

平成26年度言語研修
チャガ＝ロンボ語研修テキスト1

チャガ＝ロンボ語 (Bantu E623)
文法スケッチ

A grammatical sketch of Chaga-Rombo (Bantu E623)

品川大輔 著

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

2014



はじめに

本書は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の2014年度言語研修「チャガ＝ロンボ語」で扱った内容をまとめた、同言語の文法スケッチである。この研修では、受講生それぞれが、コンサルタント役のネイティブ講師に対して文法調査票に示された調査項目を質問し、得られた発話を記述し、それを分析することで、当該言語の文法構造を導き出すという、いわゆる言語記述のフィールド・メソッドにしたがった調査の実習を行った。

準備期間から言語研修までの経緯は次のとおりである。2012年夏より、筆者は言語研修を念頭に置いたロンボ語の現地文法調査を開始しⁱ、さらにはネイティブ講師を日本に招きⁱⁱ、語彙や音調に関するデータを収集した。これらの成果を踏まえ、さらに他のチャガ諸語に関する先行研究等も加味した形で『チャガ＝ロンボ語 (E623) 文法調査票』を作成した。さらに、バントゥ諸語の一般的現象や学術用語の解説のために、Nurse and Philippson eds. (2003) *The Bantu Languages*を底本とした『バントゥ諸語調査ハンドブック』を準備した。これらを用いて22日間(132時間)の研修に臨んだが、そのうち文法調査に充てられたのは17日間(68時間)である。本書の記述内容はこのような時間的な制約の中で得られたものであり、あくまでもロンボ語の文法の輪郭を描く「文法スケッチ」であることを明記しておきたい。

とはいえ、比較的調査の進んでいるチャガ諸語のなかでも、このロンボ語については未だまとまった **reference grammar** の類は出版されておらず、本書はこの言語にとって初めての全体的な文法記述の試みである。また、本書の大枠は上述の事前作業に基づくものではあるが、実際の言語研修の過程で、受講生とコンサルタントとの協働をとおして明らかになった事項も少なくない。その意味で本書は、コンサルタント役のモニカ・モシロ・アポリナリ先生 (Eckernforde Tanga University)、さらに受講生として調査に取り組んだ、小幡千陽、北村美月、田口智大、西浦梨佳子、松崎花の諸君との協働によって作り出されたものであることを強調しておきたい。モニカ先生および受講生諸君の熱意と優れた能力に敬意と謝意を表すとともに、チームとしてこのような成果を残せたことを、率直に喜ぶたい。

品川大輔

ⁱ 科研費「キリマンジャロ・バンツー諸語における構造類型的な内的多様性の記述と分析」(若手 (B) 課題番号 25770149, 代表: 品川大輔) の援助に対して記して謝意を述べる。

ⁱⁱ 招聘は、AA研の「言語研修実施のための研究者派遣事業」によって可能になった。深く感謝の意を表するものである。

凡例

本稿の文中およびグロスで用いられる略号の一覧は次のとおりである。

1, 2, 3... (数字のみ)	: 名詞クラス番号	IH	: 動詞初頭高音調
1sg, 2pl... (数字+sg/pl)	: 人称+単数/複数	IND	: 直説法
AFF	: 肯定	INDPRO	: 独立人称代名詞
ANT	: 完了	INF	: 不定形
APPL	: 適用	ITIVE	: 「行く」を文法化した TAM
APx	: 形容詞接頭辞	L	: 低音調
ASSERT	: 言明	LOC	: 場所名詞 (化)
C	: 子音	N	: 鼻音
CAUS	: 使役	NC	: 鼻子音連続
CERT	: 確信性	NEG	: 否定
cl.	: 名詞クラス	NEG2	: 第 2 否定辞
COMP	: 完結	NEUT	: 中動
COND	: 条件	NTP	: 否定のトーンパターン
CONSEC	: 継起	OM	: 目的語接頭辞
COP	: コピュラ	PASS	: 受動
COP.PST	: コピュラ過去形	POSS	: 所有詞
CPx	: クラス接頭辞	PPx	: 代名詞接頭辞
DEM.F	: 指示詞 (遠称)	PROGR	: 進行
DEM.M	: 指示詞 (中称)	PRS	: 現在
DEM.N	: 指示詞 (近称)	PST.STAT	: 状態過去
DSuf	: 派生接尾辞	PST1	: 過去 1 (近過去)
EPx	: 数詞接頭辞	PST2	: 過去 2 (遠過去)
EXT1	: 存在詞語幹 1	RECIP	: 相互
EXT2	: 存在詞語幹 2	REF	: 再帰
F	: 末尾辞, ないし直説法末尾辞 -a	REL	: 関係詞語幹
F.PL	: 末尾辞 (聞き手複数)	SM	: 主語接頭辞
FUT1	: 未来 1	SM.A	: 主語接頭辞 (完了形融合型)
FUT2	: 未来 2	STAT	: 状態
G	: 半母音	SUBJ	: 接続法
HAB	: 習慣	TAM	: 時制・アスペクトマーカ
H	: 高音調ないし高声調素	V	: 母音

境界記号や括弧の対応は次のとおりである.

[...]	: 音声表記	/ ... /	: 音素表記
-	: 形態素境界	≠	: 動詞語幹境界
##	: 語境界	#	: ポーズないし接辞なし
—	: 母音融合が生じる境界	.	: 文法機能境界 (グロス)

例文は, 原則として, 実現形に形態素境界を付したものを示してある (以下凡例の L1). 実現分節素構造と形態素境界が全体的にずれる場合は, 必要に応じて, 形態素表記の上段に音素表記を明示する (L0). ずれが部分的である場合は, 適宜 /.../ で音素表記を示す. 以下に凡例を示す.

- L0: 音素表記 (任意) → *ngálolywa*
L1: 形態素分析表記 → *ngi-á ≠ loli-w-a*
L2: グロス → SM.1sg-ANT ≠ 'see'-PASS-F
L3: 対訳 → 「私は見られた」 Nimeonwa.

L0 および L1 の音調記号は, 実現音価・位置をマークしたもので, 基底 (underlying level) の声調素の位置を示したものではない. また, ^(´) 等で示してあるのは, その音調が現れる場合も現れない場合もある (実現が任意ないし不安定) ということを意味する. 本稿で用いられる音調記号は次のとおりである.

- ´ : 高音調
˘ : ダウンステップないしやや低く現れる高音調
˝ : 超高音調
無表記 : 低音調

L3 の対訳には, 「」で日本語訳を示し, 続けて対応するスワヒリ語訳をつけてある.

表目次

表 1-1 : 子音音素表.....	4
表 1-2 : 母音音素表.....	11
表 2-1 : 独立人称代名詞 [人称・数].....	15
表 2-2 : コピュラ形式 [時制・肯否].....	19
表 2-3 : 所有表現 [時制・肯否].....	25
表 2-4 : 存在表現 [時制・肯否].....	32
表 3-1 : 所有詞 [人称・数].....	35
表 3-2 : 疑問詞.....	36
表 3-3 : 数詞.....	36
表 4-1 : 名詞クラスに関する一致形式.....	55
表 6-1 : 動詞構造の形態論的テンプレート.....	60
表 6-2 : 主語接頭辞 [人称・数].....	63
表 6-3 : 主語名詞項との一致のメカニズム.....	66
表 6-4 : 目的語接頭辞 [人称・数].....	67
表 8-1 : 時制標識 (暫定)	94
表 9-1 : SM と TAM ₀ <i>a-</i> の融合規則.....	99
表 9-2 : TAM 一覧.....	108
表 10-1 : TAM の可能な組み合わせ (暫定)	109

目次

0. チャガ概説.....	1
0.1 チャガ人.....	1
0.2 チャガ語.....	2
1. 文字と発音.....	4
1.1 子音.....	4
1.1.1 閉鎖音.....	4
1.1.2 鼻音.....	6
1.1.3 摩擦音・破擦音.....	8
1.1.4 流音.....	9
1.1.5 接近音.....	10
1.2 母音.....	11
1.3 音節構造.....	12
1.4 声調.....	13
2. 基本述語.....	15
2.1 コピュラ.....	15
2.1.1 現在時制.....	15
2.1.2 過去時制.....	16
2.1.3 未来時制.....	18
2.1.4 まとめ.....	19
2.2 所有表現.....	19
2.2.1 現在時制.....	19
2.2.2 過去時制.....	21
2.2.3 未来時制.....	23
2.2.4 まとめと補足.....	25
2.3 存在表現.....	25
2.3.1 現在時制.....	26
2.3.2 過去時制.....	27
2.3.3 未来時制.....	29
2.3.4 否定詞と場所の疑問詞.....	31
2.3.5 まとめ.....	31
2.4 補助動詞.....	32

3. 代名詞と数詞	33
3.1 属詞	33
3.2 所有詞	34
3.3 疑問代名詞	35
3.4 数詞	36
4. 名詞と名詞クラス	38
4.1 1/2 クラス	38
4.2 3/4 クラス	40
4.3 5/6 クラス	43
4.4 7/8 クラス	45
4.5 9/10 クラス	47
4.6 11/10 クラス	48
4.7 12/8 (13) クラス	49
4.8 13 クラス	50
4.9 16/17 クラス	51
4.10 名詞クラスの派生用法	53
4.11 まとめ	55
5. 形容詞	56
5.1 構造上の分類	56
5.2 各タイプ of 具体例	58
6. 動詞構造	60
6.1 動詞構造概説	60
6.1.1 膠着的構造	60
6.1.2 主語接頭辞 (SM: Subject Marker)	60
6.1.3 第二否定辞 (NEG2: Secondary Negative)	60
6.1.4 TA 接辞 (TAM: Tense-Aspect Marker)	60
6.1.5 目的語接頭辞 (OM: Object Marker)	61
6.1.6 語基 (base), 語幹 (stem)	61
6.1.7 派生接尾辞 (DSuf: Derivational Suffix)	61
6.1.8 末尾辞 (F: Final Vowel)	62
6.2 主語接辞	62
6.2.1 形式的特徴	62
6.2.2 文法的一致に関する規則	64
6.3 目的語接辞	66
6.3.1 分節素レベルの特徴	66
6.3.2 超分節素レベルの特徴	67

6.3.3 文法的特徴	68
7. 命令形と接続法	70
7.1 命令	70
7.1.1 肯定	70
7.1.2 否定	71
7.2 接続法	73
7.2.1 概要	73
7.2.2 構造の一般化	73
8. 単純時制形	75
8.1 現在	75
8.1.1 一般現在	75
8.1.2 状態現在	78
8.2 過去	80
8.2.1 近過去	80
8.2.2 遠過去	83
8.2.3 状態過去	86
8.3 未来	88
8.3.1 未来 1 (cf. 10.1)	88
8.3.2 未来 2	91
8.4 時制マーカのまとめ	93
9. アスペクト形	95
9.1 進行	95
9.2 完了および完結	97
9.3 習慣	102
9.4 継起	105
9.5 アスペクトマーカのまとめ	108
10. 複合 TAM 形	109
10.1 統合形 (とくに <i>she-/nde-</i> 形)	109
10.1.1 <i>le-she-/nde-</i>	110
10.1.2 \emptyset - <i>she-/nde-</i>	111
10.1.3 <i>i+she-/nde-</i>	113
10.1.4 <i>e-she-/nde-</i>	115
10.1.5 まとめ	116
10.2 分析形	116
10.2.1 過去進行	117
10.2.2 過去完了	118

10.2.3 未来進行.....	118
10.2.4 未来完了.....	119
11. 動詞派生形.....	120
11.1 受動.....	120
11.2 使役.....	121
11.3 相互.....	122
11.4 中動.....	123
11.5 適用.....	124
11.5.1 受益.....	124
11.5.2 場所.....	125
11.5.3 道具.....	126
12. 従属節.....	128
12.1 仮定節.....	128
12.1.2 条件.....	128
12.1.2 反実.....	129
12.2 関係節.....	130
12.3 時間・空間を表現する従属節.....	132
Appendix.....	134
Appendix-1: 民話.....	134
Appendix-2: 挨拶および自己紹介の表現.....	137
I. 挨拶.....	137
II. 自己紹介.....	138
Appendix-3: 文法形式のリスト.....	139
I. 名詞クラスごとの一致形態素.....	139
II. TAM, 派生接尾辞, 末尾辞.....	140
参照文献.....	141

0. チャガ概説

0.1 チャガ人

チャガ人（スワヒリ語 Wachaga, 英 the Chaga people, Chagga とも）は、タンザニア連合共和国の大陸部（Tanganyika）の北東部、キリマンジャロの山麓をホームランドとする人々である。タンザニアは 120 を超える民族集団を抱える国であるが、その中でもビクトリア湖南部のスクマ人、ビクトリア湖西部のハヤ人、政治上の首都があるドドマ市周辺のゴゴ人等と並び、チャガ人は国内の最大民族集団のひとつに数えられている。2012 年に行われた国勢調査によれば、彼らの本拠地であるキリマンジャロ州全体の人口は、164 万人を数える（National Bureau of Statistics, Ministry of Finance, Tanzania 2013）。

チャガの人々が住むキリマンジャロ周辺は、他の地域よりも早くキリスト教の布教が進んだこともあって、伝統的に学校教育に熱心で、エリートを多く生み出していることで知られる。また、ホームランドを離れダルエスサラーム等の大都市へ進出していった人々の中には商業的な成功を収めた人も多く、他の民族集団からは商才を持った人々という（やっかみ交じりの？）評価が与えられることもしばしばである。土地の生業としては、キリマンジャロの肥沃な土地を生かした農業が盛んであり、とりわけ換金作物としてのアラビカ・コーヒーは、世界中に知られている¹。

このようなチャガの人々は、対外的には自らを「チャガ人」と自称することが一般的であるが、彼らのルーツとしてのアイデンティティの拠り所は、さらに小さなコミュニティーに求めることができる。つまり、「チャガ」というのは一種の総称で、実際にはさらに複数の小集団に分けることができる。歴史的にもそれぞれ異なった首長集団（chiefship）をもっていたとされるこれらの共同体には、マチャメ（Machame）、キボシヨ（Kibosho）、シハ（Siha）、ヴンジョ（Vunjo）等が挙げられ、本研修で扱うチャガ＝ロンボ語を話すロンボ人（スWarombo, 英the Rombo people）も、その集団のひとつということになる²。

ロンボ人のホームランドは、現在の行政区分に従えばキリマンジャロ州北東部のロンボ県（Rombo district）にあたり、上述の国勢調査によれば約 26 万の人口がある。これは、西部のマチャメ人のホームランドが位置するハイ県（Hai district）の人口に比肩し、人口の面でもチャガを構成する主要集団のひとつと見なしてよい。

¹ しかし、そのコーヒー産業も、グローバル化の波の中で苦境を経験してきている。現地の人々の、現実を見据えつつもさまざまなネットワークを活かした、したたかな取り組みの詳細は、辻村（2012）によって学ぶことができる。

² 英国植民地時代の植民地行政官の残した記述（Dundas 1924/1968: 50）によると、同書が執筆された時期で 28 の下位集団（small states）があったという。ちなみにロンボ内部にも Keni, Mkuu, Useri といった下位区分があり、以下に見るように、現在でも方言的な差異が認められる。

0.2 チャガ語

上述の下位集団の区分に概ね対応する形で、総称としてのチャガ語（スKichaga）は、さらに 10 数種類の「方言」に分類することができる。しかし、地理的にある程度離れた方言間では相互理解が難しく、むしろチャガ「語群」を構成する「諸言語」として扱うべきであるという見方も可能である³。いずれにせよ、これら諸言語／方言は、言語学的には次の表のように分類されている⁴（地理的な位置関係については、次頁の地図を参照）。

表 0-1：チャガ語群の分類（Philippson and Montlahuc 2003, Maho 2009 等参照）

言語（群）	（個別）言語／方言名
西部キリマンジャロ（諸）語	シハ（Siha）、マチャメ（Machame）、キボシヨ（Kibosho）等
中部キリマンジャロ（諸）語	モシ（Moshi）、ヴンジョ（Vunjo）、ウル（Uru）等
ロンボ語	ムクー（Mkuu）、ケニ（Keni）、マシャティ（Mashati）、ウセリ（Useri）
グェノ語	

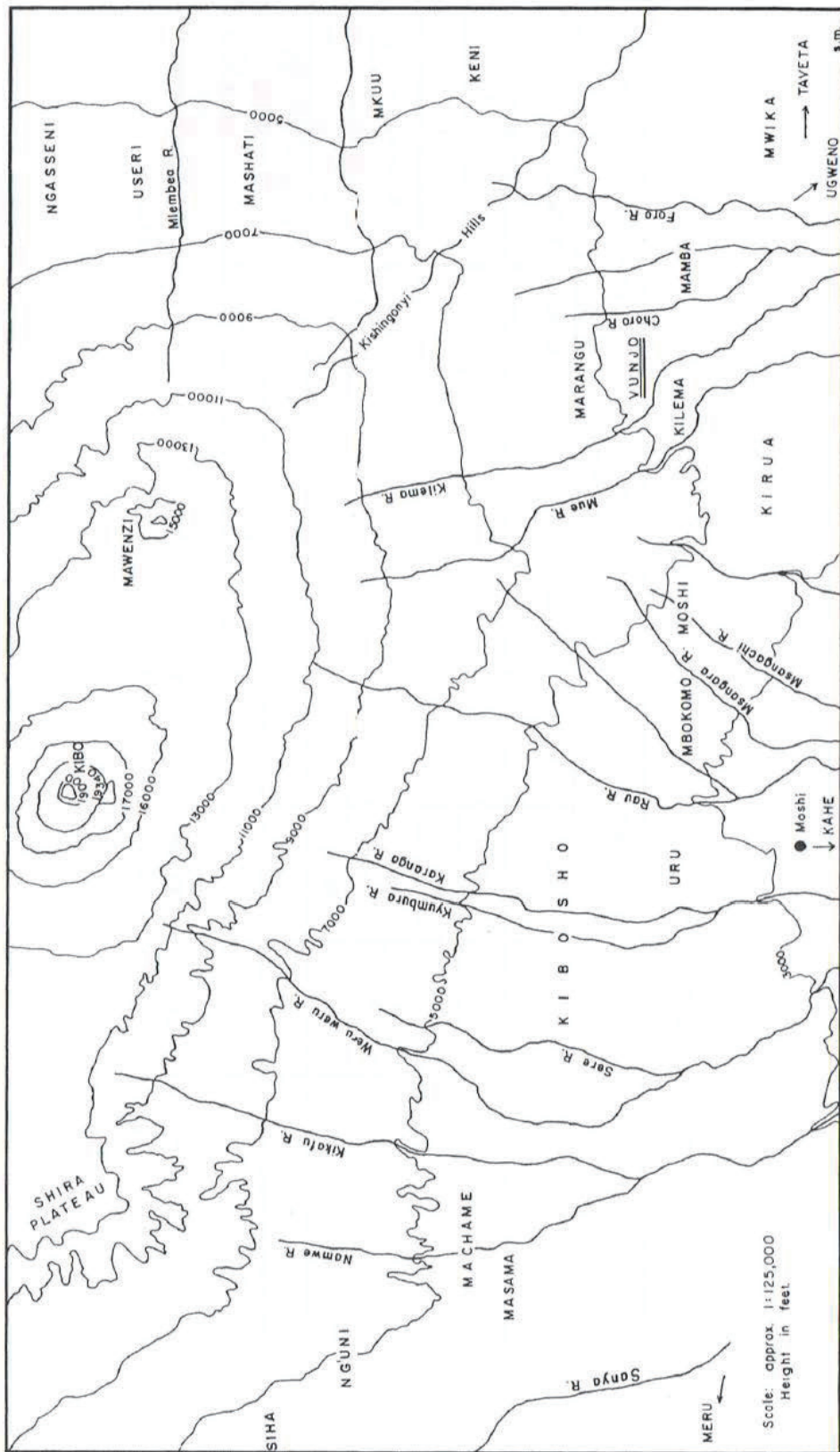
つまり、ロンボ語はその内部にさらなる方言区分を持ちつつ、西部キリマンジャロ、中部キリマンジャロの 2 つの言語群と対置される位置づけにある。本研修で扱う言語名を「チャガ＝ロンボ語」としたのはそのような背景による。

一方、これら諸言語／方言の話者数については、2009 年に発行された『タンザニア言語地図（Atlasi ya Lugha za Tanzania）』によると、チャガ＝ロンボ語話者が 202,224 人であるのに対し、西部キリマンジャロのチャガ＝マチャメ語が 194,575 人、中部キリマンジャロのチャガ＝ヴンジョ語が 141,542 人とあり、この数字に従えば、チャガ＝ロンボ語は、チャガ諸語のなかでは最大規模の言語ということになる。

³ たとえば言語学者 Derek Nurse は、それぞれ別の「言語」とされているケニア中部バントゥー諸語（キクユ語、カンバ語、メル語等）の間の相違に匹敵するほどの差異が、チャガ諸「方言」の間に認められるという趣旨のことを述べている（Nurse 2003: 69）。

⁴ バントゥー諸語の古典的な分類である Guthrie（1967-71）によるコード分類では、チャガ＝ロンボ語は、チャガ語群（Chaga group, E60）のひとつとして E62c という番号が与えられている。しかし、この分類は当時の行政区分に従っただけのもので正確性を欠くという指摘があり、Guthrie のアップデート版としての Maho（2009）では、チャガ＝ロンボ語は E623 という番号が与えられ、さらにその下位方言としてウセリ（E623A）、マシャティ（E623B）、ムクー（E623C）、ケニ（E623D）のように整理されている。

Map 1: The "dialects" of Chaga (Nurse 1979:58)



チャガ語群の地理的分布 (出典: Nurse 2003)

1. 文字と発音

ここでは、チャガ＝ロンボ語を記述していくうえで必要となる、音声実現および音韻体系に関する基本的な情報を概観する。

1.1 子音

本書におけるロンボ語の表記には、表 1-1 に示した字母を用いる。以下、各音声についての簡単な説明と語例を示す（また、各語例の音調表記は省略してある。音調実現形については、付属の語彙集を参照されたい）。

表 1-1 : 子音音素表

	両唇音	唇歯音	歯茎音	歯茎硬口蓋音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	p/b		t/d		j	k/g	
鼻音	m		n		ny	ng'	
摩擦音		f/v	s	sh			h
破擦音			t'				
ふるえ音			r				
はじき音			r̥				
側面接近音			l				
接近音					y	w	

1.1.1 閉鎖音

p [p]

日本語のパの子音と同様。

<i>parusa</i>	ひっかく / scratch / paruza
<i>pepya</i>	あおぐ, 波立てる / fan, blow, wave / pepea
<i>pofwa</i>	目を見えなくさせる / cause blindness / pofua

b [b~b~ɓ]

語頭および母音間で入破音 [b] として現れうる（日本語のバの子音と同様に発音しても通じる）。また非成節的な /m/ の後ろで両唇ふるえ音 [ɓ] に交替する現象が確認される。

<i>boru</i>	腐った／rotten／bovu
<i>bwaa</i>	濡れ（てい）る／be soaked／lowa
<i>bamba</i> [bamba]	飾る／decorate／pamba

t [t]

日本語のタの子音と同様。

<i>taa</i>	ランプ／lamp／taa
<i>tema</i>	遊ぶ／play／cheza
<i>tosha</i>	穴をあける／drill, pierce／toboa

t' [tʃ~t^h~ts~tʰ]

主に方言差によって実現音価に幅があるが，[t] の開放の後に気音をともなうか摩擦音をともなう。側面開放を伴う発音も認められる。

<i>t'aamyā</i>	座る，住んでいる／sit, stay／kaa
<i>t'ema</i>	耕す／cultivate／lima
<i>mafut'a</i>	油／oil／mafuta

d [d~d~r]

語頭および母音間で入破音 [d] として現れうる（日本語のダの子音と同様に発音しても通じる）。ただし，語幹内の非成節的な /n/ の後ろで歯茎ふるえ音 [r] に交替する現象が確認される。

<i>dava</i>	薬／medicine／dawa
<i>idikya</i>	応える（呼びかけに）／answer (a call)／itika
<i>kenda</i> [kenra]	9／nine／tisa

j [ʃ]

硬口蓋で閉鎖を作って出す有声破裂音。

<i>jenga</i>	建てる／build／jenga
<i>jibansa</i>	（自分を）押し込める／squeeze up oneself in a small place／jibanza
<i>ijokoo</i>	雄鶏／cock, rooster／jogoo

k [k]

日本語のカの子音と同様。ただし、とくに名詞語頭で子音連続 (/kC/) を構成することがしばしばある (cf. 1.3).

<i>kanga</i>	ホロホロチョウ / guinea fowl / kanga
<i>karibu</i>	近く / near / karibu
<i>kbanda</i>	小屋 / hut / kibanda

g [g]

日本語のガの子音とほぼ同様 (語頭で弱い入破音 [g] として現れることがある)。

<i>gongo</i>	棍棒 / club / gongo
<i>angwa</i>	摘む / pick / chuma
<i>nguru</i>	背中 / back / bega

1.1.2 鼻音

この言語の鼻音は、母音の前に立つもの (*ma, na, nya* 等) と、子音の前に立つもの (*mb, nd, ng* [ŋg] 等) がある。後者を一般に、鼻子音連続 (nasal cluster) と呼ぶ。鼻子音連続を構成する鼻音の多くは、単独では音節を構成しない非成節的鼻音 (non-syllabic nasal) である。つまり、/NCV/ (*mba, nda, nga* 等, C: 子音, V: 母音) 全体で一音節を構成する。一方、鼻子音連続の一部には、鼻音単独で音節を構成する成節的鼻音 (syllabic nasal) がある。この場合は、/N.CV/ (ピリオドは音節境界) の2音節という扱いになる。

言語によっては、成節的鼻音と非成節的鼻音が、音声的な長さの違いとして現れるが、この言語の場合は長さの違いがほとんど生じないので、その判別が困難な場合がある。ただし、次のような原則が認められる。

- ・異調音的 (hetero-organic) であれば、成節的鼻音である。
- ・非成節的鼻音は、同調音的 (homo-organic) である。
- ・非成節的鼻音に後続する子音は、基本的に有声音であり、**b** および **d** は、(原則) ふるえ音 (それぞれ [b, r]) として実現する。

異／同調音的というのは、後続の子音と調音点が異なる／同じである、ということである。つまり、同調音的というのは、*mb, nd, ng* [ŋg] 等のことであり、異調音的というのは、*ms, mt* 等のことである。また、成節的鼻音は、形態論的には、cl.1 および cl.3 の名詞クラス接頭辞 *m-*、1 人称の目的語接辞 *ng'*、cl.9/10 の形容詞接頭辞 *ng'* が該当する。

m [m̩, m]

母音が続く場合は日本語のマの子音と同様。子音が続く場合 (b, p) は、日本語の撥音 (同調音的鼻音) と同様に考えればよいが、日本語と違って語頭にも立ちうる。また成節的である場合は、後ろの子音の調音点とは異なる (異調音的鼻音) 場合があるので注意。成節的なものは、m' で表記する。

<i>mahaṛaki</i>	豆 / beans / maharagwe
<i>mboka</i>	野菜 / vegetable / mboga
<i>m'mee ku</i>	老人 / old person, respected person / mzee
<i>m'sheku</i>	祖母 / grandmother / bibi
<i>m'ringa</i>	水 / water / maji
<i>m'lalo</i>	裏側 / back side / upande wa nyuma

n [n̩, n, ŋ]

母音が続く場合は日本語のナの子音と同様。ただし、母音 i が続く場合 ([ni]) は、日本語のニの発音 (概ね [ni]) とは異なるうえに、それとは区別されるので注意が必要。子音 (d, g) が続く場合は、日本語の撥音 (同調音的鼻音) と同様に考えればよいが、日本語と違って語頭にも立ちうる。g に先行する非成節的鼻音 [ŋ] も、バントゥ語学の慣例に従って n で表記する。

<i>not'a</i>	渴き / thirst / kiu
<i>nianyi</i>	私 / I (INDPRO.1sg) / mimi
<i>ndi</i> [nri]	ひざ / knee / goti
<i>ngama</i>	明日 / tomorrow / kesho

ny [ɲ]

日本語のニャの子音と同様。

<i>nyama</i>	肉 / meat / nyama
<i>nionyo</i>	あなたたち / You (INDPRO.2pl) / nyinyi
<i>nyota</i>	星 / star / nyota

ng' [ŋ, ŋ]

母音前に立つ軟口蓋鼻音，ないし成節的な子音前の軟口蓋鼻音．日本語のいわゆる鼻濁音と同様だが，語頭に立つので発音に注意．ただし，成節的なものに関しては現れる環境は限定的で，1人称単数の目的語接辞，形容詞のcl.9/10 接頭辞 (*ng-fuhi*)，語幹頭が鼻子音連続からなるごく一部のcl.7 名詞 (cl.9/10 に移行の傾向) のクラス接頭辞⁵ (*ng'-ndo, ng'-nda*) である．ng [ŋg]との区別に注意．

<i>ng'ana</i>	太る／get fat／nona
<i>ng'-fuhi</i>	短い (cl.9/10 一致) ／short／n-fupi
<i>ng'-ndo</i>	モノ／thing, object／kitu
<i>ng'-nda</i>	バナナの木／banana tree／mgomba

1.1.3 摩擦音・破擦音

f [f]

英語で f で綴られる子音と同様．ただし，とくに名詞語頭で子音連続 (/fC/) を構成することがしばしばある (cf. 1.3)．

<i>farasi</i>	馬／horse／farasi
<i>fifya</i>	弱くなる／lose strength／fifia
<i>fwaa</i>	(衣服を) 洗う／wash (clothes)／fua

v [v~β]

母音 i が続くときのみ両方の唇で摩擦させる (有声両唇摩擦音[β])．それ以外は，英語で v で綴られる子音と同様．

<i>vesya</i>	(～に) 尋ねる／ulizia／ask for
<i>vishi</i>	生の，未熟な／unripe／-bichi
<i>vyaa</i>	植える／plant／panda

⁵ cl.7 接頭辞 *ki-* が次のようなプロセスで変化したものと推定される．*ki-* > *k* (i の脱落) > *ng'* (後続する語幹頭の鼻子音連続からの逆行同化．cf. 「ガンダ語の法則 (Ganda's Law, Meinhof's Law)」) ．

s [s]

日本語のサの子音と同様。ただし、後ろに母音 i が続く場合は日本語のシとは異なり [si].

<i>sihilya</i>	出る, 出発する / leave, depart / ondoka
<i>sambya</i>	洗う / wash / osha
<i>subengi</i>	ピン / pin / pini

sh [ʃ]

日本語のシャの子音と同様。

<i>shatu</i>	パイソン / pithon / chatu
<i>shemsha</i>	沸かす / boil / chemsha
<i>shisha</i>	屠殺する / slaughter / chinja

h [h~f]

日本語のハの子音と同様だが、母音間では通常有声摩擦音 [f] で発音されるか、脱落する。

<i>hangwa</i>	拭く / wipe / futa
<i>iha</i>	ここ / here (DEM.N.16) / hapa
<i>fuhi</i>	短い / short / -fupi

1.1.4 流音

r [r]

舌先をふるえさせるラ行音（歯茎ふるえ音）。

<i>ruveu</i>	空, 天国 / sky, heaven / anga, mbingu
<i>teri</i>	土, 泥 / earth, mud / udongo
<i>ra</i>	つかむ, 運ぶ / hold, carry / chukua, kamata, beba

ɾ [ɾ]

日本語のラの子音とほぼ同様（また一部に、前置気音 *pre-aspiration* を伴う発音 [ʰɾ] が認められることがあるが、音韻論的な区別はないようである）。

<i>daraja</i>	階段 / stairs, ladder / daraja
<i>shura</i>	満たす / fill / jaza
<i>nguru</i>	肩（関節の部分） / shoulder / bega

l [l ~ l̥ ~ ɭ]

母音 a, e の前に立つ場合は、英語の l で綴られる子音とほぼ同様。ただし、母音 o, u が後ろに続く場合は、舌尖を歯間につけて発音する [l̥] で、母音 i が続く場合は、有声歯茎側面摩擦音 [ɭ] で発音されることがある。

<i>m'lango</i>	扉 / door / mlango
<i>lua</i> [l̥ua]	苦い / bitter / -chungu
<i>mwalimu</i> [mwaɭim̩]	先生 / teacher / mwalimu

1.1.5 接近音

y [j]

日本語のヤの子音と同様。

<i>iyai</i>	卵 / egg / yai
<i>iyó</i>	歯 / tooth / jino
<i>ekemya</i>	近づく / come close to / egama, egemea

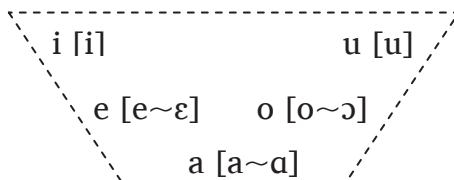
w [w]

日本語のワの子音とほぼ同様（唇をすぼめる）。子音の直後にも立つ点に注意。

<i>wari</i>	酒 / liquor / pombe
<i>wembe</i>	かみそり / razor blade / wembe
<i>wifu</i>	嫉妬 / jealousy / wivu

1.2 母音

表 1-2 : 母音音素表



a [a~ɑ]

<i>tala</i>	数える / count / hesabu	<i>tanu</i>	5 / five / -tano
<i>tamba</i>	語る / narrate / tamba	<i>asa</i>	燃やす / burn / choma

e [ε~e]

<i>tema</i>	遊ぶ / play / cheza	<i>telesa</i>	滑る / slip / teleza
<i>tenda</i>	行こう / do, act / tenda	<i>enga</i>	痩せる / loose weight / konda

i [i]

<i>tisa</i>	9 / nine / tisa	<i>itiko</i>	シマウマ / zebra / punda milia
<i>tisha</i>	怖がらせる / frighten / tisha	<i>isisi</i>	ハイエナ / hyena / fisi

o [ɔ~o]

<i>tokosa</i>	茹でる / boil / tokosa	<i>tosha</i>	穴をあける / drill / toboa
<i>toola</i>	飛ぶ / jump, fly / ruka	<i>koko</i>	腕, 手 / arm, hand / mkono

u [u]

<i>tulya</i>	落ち着く / be calm / tulia	<i>tuura</i>	こする / scrub / sugua
<i>tusa</i>	面倒を見る / care for / tunza	<i>musu</i>	煙 / smoke / moshi

1.3 音節構造

基本的な音節構造は、母音で終わる開音節構造で、母音のみ (V)、子音+母音 (CV)、鼻音+子音+母音 (NCV) が基本的なパターンである。また、C と V の間に半母音 (G) y, w が入りうる (CGV)。これらを一般化すれば、この言語の基本音節構造は、((N) C (G)) V ということになる。それ以外に、主に声調の観点から、成節的鼻音 (N') を単独の音節と見なすことができる。

[V.CV]	<i>i.ha</i>	ここ／here (DEM.N.16)／hapa
[CGV.CV.CV]	<i>mwa.li.mu</i>	先生／teacher／mwalimu
[N'.CV.NCV]	<i>m'.ri.nga</i>	水／water／maji
[CV.NCGV]	<i>ha.ngwa</i>	拭く／wipe／futa

したがって、鼻音+子音連続 (nasal cluster) を除いて、子音連続 (CC) は原則として生じないことになるが、母音脱落等によって音声実現上はしばしば認められる。典型的には、k に後続する母音 i および u は、それが語末ないし高音調が付与されなければ原則として脱落し、kC という子音連続が生じる。また、cl.8 接頭辞 *fi-* においても、頻繁に母音 i が脱落する。

<i>kbanda</i>	<i>f(i)banda</i>	小屋／hut／kibanda
<i>klalo</i>	<i>f(i)lalo</i>	食べ物／food／chakula
<i>kkabu</i>	<i>f(i)kabu</i>	バスケット／basket／kikapu

また、動词语末に位置する基底母音連続 Ci.a (Ce.a), Cu.a は、先行の母音が半母音化 (glidation) し、それぞれ Cya, Cwa として実現する (表記は実現形に従う)。つまり、2 音節である母音連続が、単音節化して実現することになる。ただし、{Ci-a} ないし {Cu-a} で一語である場合は、半母音化したうえで語末の母音が伸び(代償延長)、結果として 2 音節分の長さが維持される (Cia, Cua → 半母音化 Cya, Cwa → 代償延長 Cya:, Cwa:)。ただし、一部 ia, ua が維持されるものがある。

実現形	基底形	
<i>fwaa</i>	<i>fu-a</i>	「(衣服を) 洗え！」
<i>fueni</i>	<i>fu-a-ini</i>	「(衣服を) 洗え！」 (聞き手複数)
<i>finwa</i>	<i>finu-a</i>	「はがせ！」
<i>finueni</i>	<i>finu-a-ini</i>	「はがせ！」 (聞き手複数)

1.4 声調

本来すべてのチャガ系の言語は、複雑な声調（ないしアクセント）パターンを持つとされている（cf. Nurse 1977）。ただ、現在（若い世代に）話されているチャガ＝ロンボ語においては、それがかなり曖昧になっている。他のチャガ系言語には広く認められる語彙的な声調の対立はかなり中和し、同様に他のチャガ系言語では珍しくない声調の違い（のみ）による文法機能の表示といった現象も、限定的にしか見出されない。

<i>ngíklolya</i> (~ <i>ngíklólya</i>)	vs.	<i>ngíklólya</i>
<i>ngi-Ø-ku</i> ≠ <i>loli-a</i>		<i>ngi-Ø-ku</i> ≠ <i>loli-a</i>
SM.1sg-PRS-OM.2sg ≠ 'see'-F		SM.1sg-PRS-OM.REF ≠ 'see'-F
「私はあなたを見る」		「私は自分自身を見る」
→ cf. Rwa [WK, E61]		
<i>n'ndékulolia</i>	vs.	<i>n'ndékulólia</i>
<i>N'-nde-ku</i> ≠ <i>loli-a</i>		<i>N'-nde-kú</i> ≠ <i>loli-a</i>
SM.1sg-PST2-OM2sg ≠ 'see'-F		SM.1sg-PST2-OM.REF ≠ 'see'-F
「私はあなたを見た」		「私は自分を見た」

ただ一方で、自然なメロディーパターンとしての規則性が認められることも確かであり、これらについては、さらに詳細な音韻論（声調論）的な分析が必要である。ここでは、声調実現の基本原則のみまとめておく。以下に、一応の原則を示す（動詞構造における声調パターンは、とくに 8 章、9 章を参照のこと。また名詞の声調パターンについては、『チャガ＝ロンボ語基礎語彙集』を参照）。

(1) 主節動詞の肯定形においては、初頭音節か次頭音節のいずれかで高音調が実現する（これを仮に initial H. IH と呼ぶ）。また否定形においては、原則としてこの IH が実現しない（cf. 2.1.2 「否定の音調パターン（NTP）」）。

<i>ngí-le-m'</i> ≠ <i>loli-a</i> / <i>ngílem'lolya</i> /	vs.	<i>ngi-le-m'</i> ≠ <i>lólí-á</i>	<i>ku</i>
SM.1sg-PST1-OM3sg ≠ 'see'-F		SM.1sg-PST1-OM3sg ≠ 'see'-F	NEG
「私は彼（女）を見た」		「私は彼（女）を見なかった」	
<i>dú</i> ≠ <i>end-(é)</i>	vs.	<i>du-tá</i> ≠ <i>end-(é)</i>	
SM.1pl ≠ 'go'-SUBJ		SM.1pl-NEG.SUBJ ≠ 'go'-SUBJ	
「行きましょう」		「行かないでおきましょう」	

(2) 主節動詞に他の品詞が先行する場合、先行語の語末が H でありかつ動詞の初頭音節も H であるときは、(完了形を典型的な例外として) 原則として後者の H がより高く実現する (super H).

<i>mw-aná</i>	<i>é-le ≠ kor-y-w-a</i>	<i>k-laló</i>	<i>na</i>	<i>ksáli</i>
CPx.1-‘child’	SM.1-PST1 ≠ ‘cook’-APPL-PASS-F	CPx7-‘food’	by	Kisali

「子どもは、キサリにごはんを作ってもらった」

(3) 否定語 *ku* に先行する音節 (動詞に後節する場合は動词语末) は、H で実現する。この H は、先行音節のみを高くすることもあれば、先行語全体を高くすることもある (高音調拡張 *tone spreading*)。後者の場合の拡張の範囲は、原則として先行する H までのようである。

<i>du-í ≠ som-a</i>	<i>ki-tábu</i>
SM.1pl-PROGR ≠ ‘read’-F	CPx.7-‘book’

「私たちは本を読んでいる」

<i>du-í ≠ som-a</i>	<i>ki-t’á’bú</i>	<i>ku</i>
SM.1pl-PROGR ≠ ‘read’-F	CPx.7-‘book’	NEG

「私たちは本を読んでいない」

<i>du-í ≠ andik-a</i>	<i>∅-bárua</i>
SM.1pl-PROGR ≠ ‘read’-F	CPx.9-‘letter’

「私たちは手紙を書いている」

<i>du-í ≠ andik-a</i>	<i>∅-báruá</i>	<i>ku</i>
SM.1pl-PROGR ≠ ‘read’-F	CPx.9-‘letter’	NEG

「私たちは手紙を書いていない」

(4) 名詞の実現音調は、それが現れる統語環境によって異なりうる (名詞音調パターンについての、より詳しい情報は『チャガ = ロンボ語基礎語彙集』を参照されたい)。

<i>ni</i>	<i>ít’et’a</i>		「ことば (語) だ」
<i>ni</i>	<i>ít’et’á</i>	<i>ku</i>	「ことば (語) ではない」
	<i>it’et’á</i>	<i>lakwa</i>	
	<i>~it’et’á</i>	<i>lákwa</i>	「私のことば (語)」

2. 基本述語

ここで基本述語と呼ぶものは、存在や所有といった基本的な叙述概念を表わす述語形式を指す。基本述語の多くは、一般動詞が末尾辞 (F) *-a* によって屈折されるのに対し、それが現れないという点で形式的にも異なる。まず、基本述語とよく共起する独立人称代名詞の形式を挙げておく。

表 2-1 : 独立人称代名詞

	単数	複数
1 人称	<i>níanyí</i> 「私」	<i>sóosó</i> 「私たち」
2 人称	<i>váavé</i> 「あなた」	<i>níonyó</i> 「あなたたち」
3 人称	<i>vé</i> 「彼／彼女」	<i>vó</i> 「彼ら」

以下の説明では、動詞の基本構造やそれを構成する形態素への言及があるが、略号を含めたそれらの定義については、6.1 を参照されたい。

2.1 コピュラ

2.1.1 現在時制

主語名詞と述語名詞を繋いで叙述文を構成するコピュラの形式について、以下に例を挙げて示す。まず現在時制の肯定形（「A は B だ」）では、不変化のコピュラ形式 *ni* が用いられる。

- (1) S = 1sg. *níanyí ni mwanafúnsi* 「私は学生だ」 *mimi ni mwanafunzi*
 S = 2sg. *váavé ni mwanafúnsi* 「あなたは学生だ」 *wewe ni mwanafunzi*
 S = 3sg. *ve ní mwánafúnsi* 「彼（女）は学生だ」 *yeye ni mwanafunzi*
 S = 1pl. *sóosó ni vanafúnsi* 「私たちは学生だ」 *sisi ni wanafunzi*
 S = 2pl. *níonyó ni vanafúnsi* 「あなたたちは学生だ」 *nyinyi ni wanafunzi*
 S = 3pl. *vo n^l vánafúnsi* 「彼らは学生だ」 *wao ni wanafunzi*

その否定形は、文末におかれる否定詞 *ku* によって表現される。またこの形式は、直前の音節の音調を高める（高音調は、先行する別の高音調を有する音節まで拡張することがある (leftward tone spreading)）。

- (2) S = 1sg. *níanyí ni mwanafúnsí ku* 「私は学生ではない」 *mimi si mwanafunzi*
 S = 2sg. *váavé ni mwanafúnsí ku* 「あなたは学生ではない」 *wewe si mwanafunzi*
 S = 3sg. *ve ní mwanafúnsí ku* 「彼（女）は学生ではない」 *yeye si mwanafunzi*
 S = 1pl. *sóosó ni vanafúnsí ku* 「私たちは学生ではない」 *sisi si wanafunzi*
 S = 2pl. *níonyó ni vanafúnsí ku* 「あなたたちは学生ではない」 *nyinyi si wanafunzi*

S = 3pl. *vo n^ʔ vánafúńsí ku* 「彼らは学生ではない」 *wao si wanafunzi*

また、現在否定の 1 人称単数および 2 人称単数においては、主語接頭辞 (SM) そのものに代替される現象が確認される。

(2) S = 1sg. *níanyí ngi mwanafúńsí ku* 「私は学生ではない」 *mimi si mwanafunzi*
 S = 2sg. *váavé u mwanafúńsí ku* 「あなたは学生ではない」 *wewe si mwanafunzi*

2.1.2 過去時制

過去時制の肯定形「A は B であった」は、次のようである。

(3) S = 1sg.	a.	<i>níanyí</i>	<i>ngí ≠ ve</i>	<i>mw-ána</i>
		INDPRO.1sg	SM.1sg ≠ COP.PST	CPx.1-'child'
	b.	<i>níanyí</i>	<i>ngí-ve ≠ í</i>	<i>mw-ána</i>
		INDPRO.1sg	SM.1sg-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.1-'child'
		「私は子どもだった」 <i>mimi nilikuwa mtoto</i>		
S = 2sg.	a.	<i>váavé</i>	<i>ú ≠ ve</i>	<i>mw-ána</i>
		INDPRO.2sg	SM.2sg ≠ COP.PST	CPx.1-'child'
	b.	<i>váavé</i>	<i>ú-ve ≠ í</i>	<i>mw-ána</i>
		INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.1-'child'
		「あなたは子どもだった」 <i>wewe ulikuwa mtoto</i>		
S = 3sg.	a.	<i>vé</i>	<i>n-é ≠ ve</i>	<i>mw-ána</i>
		INDPRO.3sg	ASSERT-SM.3sg ≠ COP.PST	CPx.1-'child'
	b.	<i>vé</i>	<i>n-é-ve ≠ í</i>	<i>mw-ána</i>
		INDPRO.3sg	ASSERT-SM.3sg-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.1-'child'
		「彼 (女) は子どもだった」 <i>yeye alikuwa mtoto</i>		
S = 1pl.	a.	<i>sóosó</i>	<i>dú ≠ ve</i>	<i>va-ána /vána/</i>
		INDPRO.1pl	SM.1pl ≠ COP.PST	CPx.2-'child'
	b.	<i>sóosó</i>	<i>dú-ve ≠ í</i>	<i>va-ána /vána/</i>
		INDPRO.1pl	SM.1pl-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.2-'child'
		「私たちは子どもだった」 <i>sisi tulikuwa watoto</i>		
S = 2pl.	a.	<i>níonyó</i>	<i>mú ≠ ve</i>	<i>va-ána /vána/</i>
		INDPRO.2pl	SM.2pl ≠ COP.PST	CPx.2-'child'
	b.	<i>níonyó</i>	<i>mú-ve ≠ í</i>	<i>va-ána /vána/</i>
		INDPRO.2pl	SM.2pl-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.2-'child'
		「あなたたちは子どもだった」 <i>nyinyi mlikuwa watoto</i>		

S = 3pl.	a.	<i>vó</i>	<i>vé ≠ ve</i>	<i>va-ána /vána/</i>
		INDPRO.3pl	SM.3pl ≠ COP.PST	CPx.2-'child'
	b.	<i>vó</i>	<i>vé-ve ≠ í</i>	<i>va-ána /vána/</i>
		INDPRO.3pl	SM.3pl-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.2-'child'
		「彼らは子どもだった」 <i>wao walikuwa mtoto</i>		

述部の構造には、2つのタイプがある；a) 過去時制形のみにおいて現れるコピュラ語幹 $\neq ve$ （「～である、～になる」の意の一般動詞語幹 $\neq v$ に末尾辞 $(*)-ie$ が接合した形式に由来か）に SM が接合したものの、b) 存在を表わす語幹 (EXT1) $\neq i$ に状態過去の時制・アスペクト接辞 (TAM) *ve-* (cf. 8.2.3, 上述の語幹 $\neq ve$ が文法化したもの) が前接した形式をとる。またいずれの構造でも、述部初頭音節で高音調（ここでは **super high**）が実現しているが、この高音調は、初頭音節で実現するか次頭音節で実現するかの差こそあれ、あらゆる定動詞の肯定形でほぼ規則的に現れる。これを動詞初頭高音調 (**initial H, IH**) と呼ぶことにする。

なお、その否定形は、現在形同様、否定詞 *ku* によって表現される (SM- $ve \neq i$ の形で代表させる)。

(4)	S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngi-ve ≠ í</i>	<i>mw-órigó</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.1sg	SM.1sg-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.1-'liar'	NEG
		「私は嘘つきではなかった」 <i>mimi sikuwa mwongo</i>			
	S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>u-ve ≠ í</i>	<i>mw-órigó</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.1-'liar'	NEG
		「あなたは嘘つきではなかった」 <i>wewe hukuwa mwongo</i>			
	S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>e-ve ≠ í</i>	<i>mw-órigó</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.3sg	SM.3sg-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.1-'liar'	NEG
		「彼(女)は嘘つきではなかった」 <i>yeye hakuwa mwongo</i>			
	S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>du-ve ≠ í</i>	<i>va-órigó</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.1pl	SM.1pl-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.2-'liar'	NEG
		「私たちは嘘つきではなかった」 <i>sisi hatukuwa waongo</i>			
	S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mu-ve ≠ í</i>	<i>va-órigó</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.2pl	SM.2pl-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.2-'liar'	NEG
		「あなたたちは嘘つきではなかった」 <i>nyinyi hamkuwa waongo</i>			
	S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>va-ve ≠ í</i>	<i>va-órigó</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.3pl	SM.3pl-PST.STAT ≠ EXT1	CPx.2-'liar'	NEG
		「彼らは嘘つきではなかった」 <i>wao hawakuwa waongo</i>			

音調は、SM に IH がのらない形式で現れる。このパターンも、定動詞の各時制形において原則として適用可能である。以下、IH が生じない音調パターンを NTP (**negative tone pattern**, 否定の音調パターン) と言及する。ただし、NTP が期待される環境で肯定形同様のパターン（例えば *ngi-ve ≠ í* ではなく *ngí ≠*

ve-í) で現れるといったユレ (あるいは音調レベルの中和) が認められるのも事実である。

2.1.3 未来時制

未来時制の肯定形「AはBだろう (になるだろう)」は、次のようである。

(5)	S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngí-she ≠v-á</i>	<i>mw-alímu</i>
		INDPRO.1sg	SM.1sg-FUT1 ≠'be, become'-F	CPx.1-'teacher'
		「私は先生になるだろう」 <i>mimi nitakuwa mwalimu</i>		
	S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>ú-she ≠v-á</i>	<i>mw-alímu</i>
		INDPRO.2sg	SM.2sg-FUT1 ≠'be, become'-F	CPx.1-'teacher'
		「あなたは先生になるだろう」 <i>wewe utakuwa mwalimu</i>		
	S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>n-é-she ≠v-á</i>	<i>mw-alímu</i>
		INDPRO.3sg	ASSERT-SM.3sg-FUT1 ≠'be, become'-F	CPx.1-'teacher'
		「彼 (女) は先生になるだろう」 <i>yeye atakuwa mwalimu</i>		
	S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>dú-she ≠v-á</i>	<i>va-alímu /vaḡím/</i>
		INDPRO.1pl	SM.1pl-FUT1 ≠'be, become'-F	CPx.2-'teacher'
		「私たちは先生になるだろう」 <i>sisi tutakuwa walimu</i>		
	S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mú-she ≠v-á</i>	<i>va-alímu /vaḡím/</i>
		INDPRO.2pl	SM.2pl-FUT1 ≠'be, become'-F	CPx.2-'teacher'
		「あなたたちは先生になるだろう」 <i>nyinyi mtakuwa walimu</i>		
	S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>vé-she ≠v-á</i>	<i>va-alímu /vaḡím/</i>
		INDPRO.3pl	SM.3pl-FUT1 ≠'be, become'-F	CPx.2-'teacher'
		「彼らは先生になるだろう」 <i>wao watakuwa walimu</i>		

この構造については、他の基本述語形式と異なり、「～である、～になる」の意の一般動詞語幹 $\neq v-a$ が用いられる。上例は近未来形 (TAM は *she-*, cf. 8.3.1) であるが、それ以外の未来時制形も現れうる。否定形は、文末の否定詞 *ku* (および NTP) によって表現される。

(6)	S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngi-she ≠v-á</i>	<i>m'-kúlímá</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.1sg	SM.1sg-FUT1 ≠'be'-F	CPx.1-'farmer'	NEG
		「私は農民にならないだろう」 <i>mimi sitakuwa mkulima</i>			
	S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>u-she ≠v-á</i>	<i>m'-kúlímá</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.2sg	SM.2sg-FUT1 ≠'be'-F	CPx.1-'farmer'	NEG
		「あなたは農民にならないだろう」 <i>wewe hutakuwa mkulima</i>			
	S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>e-she ≠v-á</i>	<i>m-kúlímá</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.3sg	SM.3sg-FUT1 ≠'be'-F	CPx.1-'farmer'	NEG
		「彼 (女) は農民にならないだろう」 <i>yeye hatakuwa mkulima</i>			

S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>du-she ≠v-á</i>	<i>va-kúlímá</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.1pl	SM.1pl-FUT1 ≠'be'-F	CPx.2-'farmer'	NEG
	「私たちは農民にならないだろう」 <i>sisi hatutakuwa wakulima</i>			
S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mu-she ≠v-á</i>	<i>va-kúlímá</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.2pl	SM.2pl-FUT1 ≠'be'-F	CPx.2-'farmer'	NEG
	「あなたたちは農民にならないだろう」 <i>nyinyi hamtakuwa wakulima</i>			
S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>ve-she ≠v-á</i>	<i>va-kúlímá</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.3pl	SM.3pl-FUT1 ≠'be'-F	CPx.2-'farmer'	NEG
	「彼らは農民にならないだろう」 <i>wao hawtakuwa wakulima</i>			

音調は、SM が高音調にならない（否定形の）パターンで現れるが、肯定形のそれ（例えば *ngí-she ≠v-á*）で現れることもある。

2.1.4 まとめ

以上の構造をまとめると、次のようになる（*she-*, *ve-* 等の TAM のより詳細な分析については、8 章及び 10 章を参照されたい）。また、否定詞 *ku* によって先行語 B に付与される遡行的な高音調拡張（leftward high tone spreading）の実現パターンは、B の音調プロパティによって異なる（cf. 1.4 (3)）。

表 2-2：コピュラ形式の構造一覧

	肯定形	否定形
現在	A <i>ni</i> B	A <i>ni</i> <i>Ḃ</i> <i>ku</i> (A が 1sg および 2sg のとき, <i>ni</i> は SM に置き換え可)
過去	A <i>SḂ</i> ≠ <i>ve</i> B A <i>SḂ-ve</i> ≠ <i>í</i> B	A <i>SM</i> ≠ <i>ve</i> <i>Ḃ</i> <i>ku</i> A <i>SM-ve</i> ≠ <i>í</i> <i>Ḃ</i> <i>ku</i>
未来	A <i>SḂ-she</i> ≠ <i>v-(á)</i> B	A <i>SM-she</i> ≠ <i>v-(á)</i> <i>Ḃ</i> <i>ku</i>

2.2 所有表現

2.2.1 現在時制

「～を持っている」に相当する表現は、次のようである。

(7)	S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngí</i> ≠ <i>re</i>	<i>Ø-kálam</i>
		INDPRO.1sg	SM.1sg ≠ 'have'	CPx.9-'pen'
	「私はペンを持っている」 <i>mimi nina kalamu</i>			
	S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>ú</i> ≠ <i>re</i>	<i>Ø-kálam</i>
		INDPRO.2sg	SM.2sg ≠ 'have'	CPx.9-'pen'
	「あなたはペンを持っている」 <i>wewe una kalamu</i>			

S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>n-é ≠re</i>	<i>Ø-kálam</i>
	INDPRO.3sg	ASSERT-SM.3sg ≠ 'have'	CPx.9-'pen'
	「彼（女）はペンを持っている」 <i>yeye ana kalamu</i>		
S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>dú ≠re</i>	<i>Ø-kálam</i>
	INDPRO.1pl	SM.1pl ≠ 'have'	CPx.10-'pen'
	「私たちはペンを持っている」 <i>sisi tuna kalamu</i>		
S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mú ≠re</i>	<i>Ø-kálam</i>
	INDPRO.2pl	SM.2pl ≠ 'have'	CPx.10-'pen'
	「あなたたちはペンを持っている」 <i>nyinyi mna kalamu</i>		
S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>vé ≠re</i>	<i>Ø-kálam</i>
	INDPRO.3pl	SM.3pl ≠ 'have'	CPx.10-'pen'
	「彼らはペンを持っている」 <i>wao wana kalamu</i>		

語幹 *≠re* は、一般動詞語幹 *≠r-a* 「持つ、つかむ、等」の一種の状態形⁶と考えられる。その否定形は、文末におかれる否定詞 *ku* によって表わされる（NTPも確認されるが、肯定形と同様の形（例えば *ngí ≠re*）で現れることもある）。

(8) S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngí ≠re</i>	<i>í-kárí</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.1sg	SM.1sg ≠ 'have'	CPx.5-'car'	NEG
	「私は車を持っていない」 <i>mimi sina gari</i>			
S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>u ≠re</i>	<i>í-kárí</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.2sg	SM.2sg ≠ 'have'	CPx.5-'car'	NEG
	「あなたは車を持っていない」 <i>wewe huna gari</i>			
S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>e ≠re</i>	<i>í-kárí</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.3sg	SM.3sg ≠ 'have'	CPx.5-'car'	NEG
	「彼（女）は車を持っていない」 <i>yeye hana gari</i>			
S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>du ≠re</i>	<i>í-kárí</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.1pl	SM.1pl ≠ 'have'	CPx.5-'car'	NEG
	「私たちは車を持っていない」 <i>sisi hatuna gari</i>			
S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mu ≠re</i>	<i>í-kárí</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.2pl	SM.2pl ≠ 'have'	CPx.5-'car'	NEG
	「あなたたちは車を持っていない」 <i>nyinyi hamna gari</i>			

⁶ 過去のコピュラ *≠ve* 同様、末尾辞 **-ie* が接合した形式に由来すると考えられるが、こちらは、共時的には *-i* に相当する形式 (cf. 8.1.2) と考えるのが合理的であろう。つまり、共時レベルにおける *-ie*（遠過去）と *-i*（状態動詞化）は、ともに **-ie*（完了）に由来すると仮定しているが、このあたりの議論は、Nurse (2003: 80) を参照。

S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>ve ≠re</i>	<i>í-kárí</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.3pl	SM.3pl ≠ 'have'	CPx.5-'car'	NEG
	「彼らは車を持っていない」 <i>wao hawana gari</i>			

また、とくに否定形ないし疑問形において、「今まさに～を持っている」という含意で、TAM *i-* を前接した、次のような構造が確認される。

(8) S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngí-í ≠re</i>	<i>í-kárí</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.1sg	SM.1sg-PROGR ≠ 'have'	CPx.5-'car'	NEG
	「私は（今）車を持っていない」 <i>mimi sina gari (sasa hivi)</i>			
S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>u-í ≠re</i>	<i>í-kárí</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.2sg	SM.2sg-PROGR ≠ 'have'	CPx.5-'car'	NEG
	「あなたは（今）車を持っていない」 <i>wewe huna gari (sasa hivi)</i>			

2.2.2 過去時制

過去時制「～を持っていた」に相当する表現は、次のようである。

(9) S = 1sg.	<i>níanyí ngíveére íshamba</i>		
	<i>níanyí</i>	<i>ngí-ve-é ≠re</i>	<i>í-shamba</i>
	INDPRO.1sg	SM.1sg-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.5-'field'
		(<i>ngí ≠ ve ## í ≠ re</i>)	
		(SM.1sg ≠ COP.PST ## INF ≠ 'have')	
	「私は畑を持っていた」 <i>mimi nilikuwa na shamba</i>		
S = 2sg.	<i>váave úveére íshamba</i>		
	<i>váavé</i>	<i>ú-ve-é ≠re</i>	<i>í-shamba</i>
	INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.5-'field'
		(<i>ú ≠ ve ## í ≠ re</i>)	
		(SM.2sg ≠ COP.PST ## INF ≠ 'have')	
	「あなたは畑を持っていた」 <i>wewe ulikuwa na shamba</i>		
S = 3sg.	<i>vé něveére íshamba</i>		
	<i>vé</i>	<i>n-ě-ve-é ≠re</i>	<i>í-shamba</i>
	INDPRO.3sg	ASSERT-SM.3sg-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.5-'field'
		(<i>n-ě ≠ ve ## í ≠ re</i>)	
		(ASSERT-SM.3sg ≠ COP.PST ## INF ≠ 'have')	
	「彼（女）は畑を持っていた」 <i>yeye alikuwa na shamba</i>		

S = 1pl.	<i>sóosó dííveére íshamba</i>		
	<i>sóosó</i>	<i>díí-ve-é ≠re</i>	<i>má-shamba</i>
	INDPRO.1pl	SM.1pl-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.6-'field'
		(<i>díí ≠ ve ## í ≠ re</i>)	
		(SM.1pl ≠ COP.PST ## INF ≠ 'have')	
	「私たちは畑（複）を持っていた」 <i>sisi tulikuwa na mashamba</i>		
S = 2pl.	<i>níonyó múíveére íshamba</i>		
	<i>níonyó</i>	<i>múí-ve-é ≠re</i>	<i>má-shamba</i>
	INDPRO.2pl	SM.2pl-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.6-'field'
		(<i>múí ≠ ve ## í ≠ re</i>)	
		(SM.2pl ≠ COP.PST ## INF ≠ 'have')	
	「あなたたちは畑（複）を持っていた」 <i>nyinyi mulikuwa na mashamba</i>		
S = 3pl.	<i>vó véveére íshamba</i>		
	<i>vó</i>	<i>vé-ve-é ≠re</i>	<i>má-shamba</i>
	INDPRO.3pl	SM.3pl-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.6-'field'
		(<i>vé ≠ ve ## í ≠ re</i>)	
		(SM.3pl ≠ COP.PST ## INF ≠ 'have')	
	「彼らは畑（複）を持っていた」 <i>wao walikuwa na mashamba</i>		

構造上は、語幹 $\neq re$ の前に現れる \acute{e} ($\sim \acute{V}$) の解釈が問題になる。この母音を、現在時制で（限定的に）認められた TAM $i-$ （進行）と見なすが、体系的には合理的な解釈に見えるが、次のような問題もある； i) TAM $i-$ が TAM $ve-$ に後続する位置に現れる（あるいは、そもそも共起する）と解釈することの妥当性（cf. 9.1, 10.1 等）、ii) TAM $i-$ は、先行する母音（少なくとも SM）と融合を起ささないという傾向との齟齬（cf. 9.1）。一方、この母音を不定形⁷（動名詞）マーカー（cl.5 の CPx.）と見なせば、音韻論的な整合性は担保される⁸。またその場合は、 ve を過去のコピュラ語幹（ $\neq ve$, cf. 2.1.2）と解釈することになる（グロス内、括弧で提示。この分析をスワヒリ語の構造に強いて落としこめば、‘SM-li \neq ku(-)w-a ## ku \neq w-a ## na’）。ただ、語幹 $\neq re$ を CPx.5 によって動名詞化できるかについては不透明な点も残るため、ここでは、判断を保留しておく⁹。また、問題の母音が生じない構造、例えば *ngí-ve \neq ré* も、*ngíveére*

⁷ 形式的には、動詞語幹を名詞と並行的な形にし、かつ機能面でも、その基本は動詞語幹の名詞的用法（名詞化）にあることを考えれば、cl.5 のクラス接頭辞が用いられる形は「動名詞形（gerund）」とするのが妥当であるが、バントゥ語学の慣用にしたがって、「不定形（INF）」としておく。

⁸ 不定形マーカーは、動詞末尾辞（F）に後続する場合、規則的に融合して $a+i > e(:)$ となる（cf. 2.4 等）。

⁹ ただし、Chaga = Vunjo 語（中央キリマンジャロ諸語）では *lu-we-i \neq kapa* 「私たちは叩いていた」（= 過去進行）という形式があるようである（cf. Nurse [2003: 77], *we-* はロンボ語の *ve-* に概ね相当する）。ただロンボ語の場合、同じ過去進行形は *dú-ve \neq kab-(á)* であり、*ve-* の後ろに TAM $i-$ は後続しない

(「私は持っていた」)と同様の意味で用いられる。この場合は、問題なく *ve-* は状態過去のマーカーと見なすことができる。

否定形は、文末におかれる否定詞 *ku* (および NTP) によって表わされる。

(10)	S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngi-ve-(é) ≠re</i>	<i>Ø-úmbé</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.1sg	SM.1sg-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.9-'cow'	NEG
		「私は牛を持っていなかった」 <i>mimi sikuwa na ng'ombe</i>			
	S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>u-ve-(é) ≠re</i>	<i>Ø-úmbé</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.9-'cow'	NEG
		「あなたは牛を持っていなかった」 <i>wewe hukuwa na ng'ombe</i>			
	S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>e-ve-(é) ≠re</i>	<i>Ø-úmbé</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.3sg	SM.3sg-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.9-'cow'	NEG
		「彼(女)は牛を持っていなかった」 <i>yeye hakuwa na ng'ombe</i>			
	S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>du-ve-(é) ≠re</i>	<i>Ø-úmbé</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.1pl	SM.1pl-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.9-'cow'	NEG
		「私たちは牛を持っていなかった」 <i>sisi hatukuwa na ng'ombe</i>			
	S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mu-ve-(é) ≠re</i>	<i>Ø-úmbé</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.2pl	SM.2pl-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.9-'cow'	NEG
		「あなたたちは牛を持っていなかった」 <i>nyinyi hamkuwa na ng'ombe</i>			
	S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>ve-ve-(é) ≠re</i>	<i>Ø-úmbé</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.3pl	SM.3pl-PST.STAT-(PROGR?) ≠ 'have'	CPx.9-'cow'	NEG
		「彼らは牛を持っていなかった」 <i>wao hawakuwa na ng'ombe</i>			

2.2.3 未来時制

未来時制「～を持つ(持っている)だろう」に相当する表現は、次のようである。

(11)	S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngí-she ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>
		INDPRO.1sg	SM.1sg-FUT1 ≠ 'have'	CPx.2-'child'
		「私は子ども(複)を持つだろう」 <i>mimi nitakuwa na watoto</i>		

(**dú-ve-i ≠ kab-(á)*, ただし, *i-* が OM である場合は除く)。一方で、ほぼ同義で *duveékab(á)* という形式は可能であるから、*ve* の後ろの母音は TAM *i-* 以外の何か、ということになる。より明示的な例として、未来時制の所有表現にもほぼ並行的な構造が確認されている。例えば、*dúsher(é) {dú-she ≠ r(é)}* 「私たちは持つだろう」に対し、その変異形として *duísheére* という構造が認められる。ここでは、SM の直後に TAM *i-* が接合していることが明らかであるから、*du-i-she-i ≠ re* という構造は認めづらく、おそらくは *du-i ≠ sh-a#i ≠ re* (スワヒリ語の構造に強いて落とし込めば *tu-na/ta ≠ ku(-)w-a#ku-w-a#na*) のように見ざるを得ないであろう。

S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>í-she ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>
	INDPRO.2sg	SM.2sg-FUT1 ≠'have'	CPx.2-'child'
	「あなたは子ども（複）を持つだろう」 <i>wewe utakuwa na watoto</i>		
S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>n-ě-she ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>
	INDPRO.3sg	ASSERT-SM.3sg-FUT1 ≠'have'	CPx.2-'child'
	「彼（女）は子ども（複）を持つだろう」 <i>yeye atakuwa na watoto</i>		
S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>dí-she ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>
	INDPRO.1pl	SM.1pl-FUT1 ≠'have'	CPx.2-'child'
	「私たちは子ども（複）を持つだろう」 <i>sisi tutakuwa na watoto</i>		
S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mú-she ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>
	INDPRO.2pl	SM.2pl-FUT1 ≠'have'	CPx.2-'child'
	「あなたたちは子ども（複）を持つだろう」 <i>nyinyi mtakuwa na watoto</i>		
S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>vě-she ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>
	INDPRO.3pl	SM.3pl-FUT1 ≠'have'	CPx.2-'child'
	「彼らは子ども（複）を持つだろう」 <i>wao watakuwa na watoto</i>		

語幹 *≠re* に、TAM *she-* を前接する構造をとる。ただし、*she-* 以外の TAM をとってさまざまな未来概念を表示することも可能である (8.3, 10.1 等参照)。否定形は、文末におかれる否定詞 *ku* (および NTP) によって表わされる

(12) S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngi-sh(é) ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.1sg	SM.1sg-FUT1 ≠'have'	CPx.2-'child'	NEG
	「私は子ども（複）を持たないだろう」 <i>mimi sitakuwa na watoto</i>			
S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>u-sh(é) ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.2sg	SM.2sg-FUT1 ≠'have'	CPx.2-'child'	NEG
	「あなたは子ども（複）を持たないだろう」 <i>wewe hutakuwa na watoto</i>			
S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>e-sh(é) ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.3sg	SM.3sg-FUT1 ≠'have'	CPx.2-'child'	NEG
	「彼（女）は子ども（複）を持たないだろう」 <i>yeye hatakuwa na watoto</i>			
S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>du-sh(é) ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.1pl	SM.1pl-FUT1 ≠'have'	CPx.2-'child'	NEG
	「私たちは子ども（複）を持たないだろう」 <i>sisi hatutakuwa na watoto</i>			
S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mu-sh(é) ≠re</i>	<i>va-aná /vaná/</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.2pl	SM.2pl-FUT1 ≠'have'	CPx.2-'child'	NEG
	「あなたたちは子ども（複）を持たないだろう」 <i>nyinyi hamtakuwa na watoto</i>			

S = 3pl. *vó* *ve-sh(é) ≠re* *va-aná /vaná/ ku*
 INDPRO.3pl SM.3pl-FUT1 ≠'have' CPx.2-'child' NEG
 「彼らは子ども（複）を持たないだろう」 *wao hawatakuwa na watoto*

2.2.4 まとめと補足

以上の構造をまとめると、次のようになる。2.1 同様、否定詞 *ku* によって先行語 *X* に付与される遡行的な高音調拡張 (leftward high tone spreading) の実現パターンは、*X* の音調プロパティによって異なる (cf. 1.4 (3)).

表 2-3 : 所有表現の構造一覧

	肯定形	否定形
現在	<i>SM ≠re (X)</i> cf. + PROGR: <i>SM-í ≠re (X)</i>	<i>SM ≠re (X̂) ku</i> cf. + PROGR: <i>SM-(í) ≠re (X̂) ku</i>
過去	<i>SM-ve-Ũ ≠re (X)</i> → (? <i>SM ≠ve##í ≠re (X)</i>) <i>SM-ve ≠ré (X)</i>	<i>SM-ve-(Ũ) ≠re (X̂) ku</i> → (? <i>SM ≠ve##(í) ≠re (X̂) ku</i>) <i>SM-ve ≠re (X̂) ku</i>
未来	<i>SM-she ≠re (X)</i>	<i>SM-sh(é) ≠re (X̂) ku</i>

また、「～が（ある場所に）ある」という表現は、語幹 *≠re* に、場所名詞のクラスである cl.17 の *SM* を接合した形式（「ある場所が～を持つ」）によって表現することができる。

- (14) PRS *kú ≠re* *k-tabú* *meséni*
 SM.17 ≠'have' CPx.7-'book' 'on the table'
 「机の上に本がある」 *kuna kitabu mezani*
- PST *kú-ve-é ≠re* *k-tabú* *meséni*
 SM.17-PST.STAT-(PROGR?) ≠'have' CPx.7-'book' 'on the table'
 「机の上に本があった」 *kulikuwa na kitabu mezani*
- FUT *kú-she ≠re* *k-tabú* *meséni*
 SM.17-FUT1 ≠'have' CPx.7-'book' 'on the table'
 「机の上に本があるだろう」 *kutakuwa na kitabu mezani*

未来時制形に関しては、一般動詞 *≠v-a* に「～とともに」の意味の前置詞 *na* を後続した形式 *kú-she ≠v-a##na* (構造的には、スワヒリ語 '*kulikuwa na*' と並行的) も用いられる。

2.3 存在表現

ある存在を主語として、「～がある、いる」という表現は、例えばスワヒリ語では、その存在の在り

よう（場所の捉えられ方）によって、3つの述語形式が区別される。すなわち、 $\neq po$ 「(特定の場所に)存在する」、 $\neq ko$ 「(不特定/一般的な場所に)存在する」、 $\neq mo$ 「(内部としての場所に)存在する」のごとくである (cf. Contini-Morava [1976: 142]¹⁰)。しかし、以下に見るように、ロンボ語においては、この種の区別が、述語の側で明示的に表現し分けられるわけではない。

- (15) a. *ksali* *n-é ≠ i* *(i-)ha*
 K. ASSERT-SM.3sg ≠ EXT1 DEM.N.16
 「キサリはここにいる」 *Kisali yupo hapa*
- b. *ksali* *é ≠ i* *ku*
 K. SM.3sg ≠ EXT1 'where'
 「キサリはどこにいる？」 *Kisali yuko wapi?*
- c. *ksali* *n-é ≠ i* \emptyset -*mba* *kw-ake*
 K. ASSERT-SM.3sg ≠ EXT1 CPx.9-'room' CPx.16-POSS.3sg
 「キサリは彼の部屋の中にいます」 *Kisali yumo chumbani kwake*

これを踏まえて、以下に各時制形式における存在表現を概観する。

2.3.1 現在時制

現在時制「～がいる、ある」に相当する表現は、次のようである。

- (16) S = 1sg. *níanyí* *ngí ≠ i* *(i-)há*
 INDPRO.1sg SM.1sg ≠ EXT1 DEM.N.16
 「私はここにいる」 *mimi nipo hapa*
- S = 2sg. *váavé* *ú ≠ i* *(i-)há*
 INDPRO.2sg SM.2sg ≠ EXT1 DEM.N.16
 「あなたはここにいる」 *wewe upo hapa*
- S = 3sg. *vé* *n-é ≠ i* *(i-)há*
 INDPRO.3sg ASSERT-SM.3sg ≠ EXT1 DEM.N.16
 「彼（女）はここにいる」 *yeye yupo hapa*
- S = 1pl. *sóosó* *dú ≠ i* *(i-)há*
 INDPRO.1pl SM.1pl ≠ EXT1 DEM.N.16
 「私たちはここにいる」 *sisi tupo hapa*
- S = 2pl. *níonyó* *mú ≠ i* *(i-)há*
 INDPRO.2pl SM.2pl ≠ EXT1 DEM.N.16
 「あなたたちはここにいる」 *nyinyi mpo hapa*

¹⁰ *mu*: a space differentiated with respect to insiderness, *pa*: a space viewed as simple and homogeneous, i.e. an undifferentiated spot, *ku*: any kind of space, i.e. whose structure is left unspecified.

S = 3pl.	vó	vě ≠i	(i-)há
	INDPRO.3pl	SM.3pl ≠ EXT1	DEM.N.16
	「彼らはここにいる」 wao wapo hapa		

形式的には、存在詞語幹 ≠i に SM が接合しただけの構造で、TAM は ∅ である。否定形は、文末におかれる否定詞 *ku* (および NTP) によって表わされる。

(17) S = 1sg.	níanyí	ngi ≠í	(i-)há	ku
	INDPRO.1sg	SM.1sg ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「私はここにはいない」 mimi sipo hapa			
S = 2sg.	váavé	u ≠í	(i-)há	ku
	INDPRO.2sg	SM.2sg ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「あなたはここにはいない」 wewe hupo hapa			
S = 3sg.	vé	e ≠í	(i-)há	ku
	INDPRO.3sg	SM.3sg ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「彼 (女) はここにはいない」 yeye hayupo hapa			
S = 1pl.	sóosó	du ≠í	(i-)há	ku
	INDPRO.1pl	SM.1pl ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「私たちはここにはいない」 sisi hatupo hapa			
S = 2pl.	níonyó	mu ≠í	(i-)há	ku
	INDPRO.2pl	SM.2pl ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「あなたたちはここにはいない」 nyinyi hampo hapa			
S = 3pl.	vó	ve ≠í	(i-)há	ku
	INDPRO.3pl	SM.3pl ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「彼らはここにはいない」 wao hawapo hapa			

2.3.2 過去時制

過去時制「～がいた、あった」に相当する表現は、次のようである。

(18) S = 1sg.	níanyí	ngí-ve ≠í	(i-)ha
	INDPRO.1sg	SM.1sg-PST.ST ≠ EXT1	DEM.N.16
	「私はここにいた」 mimi nilikuwepo hapa		
S = 2sg.	váavé	ú-ve ≠í	(i-)ha
	INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.ST ≠ EXT1	DEM.N.16
	「あなたはここにいた」 wewe ulikuwepo hapa		
S = 3sg.	vé	n-ě-ve ≠í	(i-)ha
	INDPRO.3sg	ASSERT-SM.3sg-PST.ST ≠ EXT1	DEM.N.16
	「彼 (女) はここにいた」 yeye alikuwepo hapa		

S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>dí-ve ≠i</i>	<i>(i-)ha</i>
	INDPRO.1pl	SM.1pl-PST.ST ≠ EXT1	DEM.N.16
	「私たちはここにいた」 <i>sisi tulikuwepo hapa</i>		
S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mú-ve ≠i</i>	<i>(i-)ha</i>
	INDPRO.2pl	SM.2pl-PST.ST ≠ EXT1	DEM.N.16
	「あなたたちはここにいた」 <i>nyinyi mlikuwepo hapa</i>		
S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>vě-ve ≠i</i>	<i>(i-)ha</i>
	INDPRO.3pl	SM.3pl-PST.ST ≠ EXT1	DEM.N.16
	「彼らはここにいた」 <i>wao walikuwepo hapa</i>		

過去時制概念は、コピュラ、所有表現と同様、TAM *ve-* によって表示されている。また、*≠keri* という存在詞語幹も確認される。

(19) S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngí-ve ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
	INDPRO.1sg	SM.1sg-PST.ST ≠ EXT2	DEM.N.16
	「私はここにいた」 <i>mimi nilikuwepo hapa</i>		
S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>ú-ve ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
	INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.ST ≠ EXT2	DEM.N.16
	「あなたはここにいた」 <i>wewe ulikuwepo hapa</i>		
S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>n-ě-ve ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
	INDPRO.3sg	ASSERT-SM.3sg-PST.ST ≠ EXT2	DEM.N.16
	「彼（女）はここにいた」 <i>yeye alikuwepo hapa</i>		
S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>dí-ve ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
	INDPRO.1pl	SM.1pl-PST.ST ≠ EXT2	DEM.N.16
	「私たちはここにいた」 <i>sisi tulikuwepo hapa</i>		
S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mú-ve ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
	INDPRO.2pl	SM.2pl-PST.ST ≠ EXT2	DEM.N.16
	「あなたたちはここにいた」 <i>nyinyi mlikuwepo hapa</i>		
S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>vě-ve ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
	INDPRO.3pl	SM.3pl-PST.ST ≠ EXT2	DEM.N.16
	「彼らはここにいた」 <i>wao walikuwepo hapa</i>		

否定形は、文末におかれる否定詞 *ku* (および NTP) によって表わされる。*≠i* 形、*≠keri* 形、それぞれを (20), (21) に示す。

(20) S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngi-ve ≠i</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.1sg	SM.1sg-PST.STAT ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「私はここにいなかった」 <i>mimi sikuwepo hapa</i>			

S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>u-vé ≠ í</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.STAT ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「あなたはここにいなかった」 <i>wewe hukuwepo hapa</i>			
S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>e-vé ≠ í</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.3sg	SM.3sg-PST.STAT ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「彼（女）はここにいなかった」 <i>yeye hakuwepo hapa</i>			
S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>du-vé ≠ í</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.1pl	SM.1pl-PST.STAT ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「私たちはここにいなかった」 <i>sisi hatukuwepo hapa</i>			
S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mu-vé ≠ í</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.2pl	SM.2pl-PST.STAT ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「あなたたちはここにいなかった」 <i>nyinyi hamkuwepo hapa</i>			
S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>ve-vé ≠ í</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.3pl	SM.3pl-PST.STAT ≠ EXT1	DEM.N.16	NEG
	「彼らはここにいなかった」 <i>wao hawakuwepo hapa</i>			
(21) S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngi-vé ≠ kéré</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.1sg	SM.1sg-PST.STAT ≠ EXT2	DEM.N.16	NEG
	「私はここにいなかった」 <i>mimi sikuwepo hapa</i>			
S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>u-vé ≠ kéré</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.STAT ≠ EXT2	DEM.N.16	NEG
	「あなたはここにいなかった」 <i>wewe hukuwepo hapa</i>			
S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>e-vé ≠ kéré</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.3sg	SM.3sg-PST.STAT ≠ EXT2	DEM.N.16	NEG
	「彼（女）はここにいなかった」 <i>yeye hakuwepo hapa</i>			
S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>du-vé ≠ kéré</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.1pl	SM.1pl-PST.STAT ≠ EXT2	DEM.N.16	NEG
	「私たちはここにいなかった」 <i>sisi hatukuwepo hapa</i>			
S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mu-vé ≠ kéré</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.2pl	SM.2pl-PST.STAT ≠ EXT2	DEM.N.16	NEG
	「あなたたちはここにいなかった」 <i>nyinyi hamkuwepo hapa</i>			
S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>ve-vé ≠ kéré</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
	INDPRO.3pl	SM.3pl-PST.STAT ≠ EXT2	DEM.N.16	NEG
	「彼らはここにいなかった」 <i>wao hawakuwepo hapa</i>			

2.3.3 未来時制

未来時制「～がいるだろう、あるだろう」に相当する表現は、次のようである。

(22)	S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngí-she ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
		INDPRO.1sg	SM.1sg-FUT1 ≠EXT2	DEM.N.16
		「私はここにいるだろう」 <i>mimi nitakuwepo hapa</i>		
	S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>ú-she ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
		INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.ST ≠EXT2	DEM.N.16
		「あなたはここにいるだろう」 <i>wewe utakuwepo hapa</i>		
	S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>n-ě-she ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
		INDPRO.3sg	ASSERT-SM.3sg-PST.ST ≠EXT2	DEM.N.16
		「彼（女）はここにいるだろう」 <i>yeye atakuwepo hapa</i>		
	S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>dí-she ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
		INDPRO.1pl	SM.1pl-PST.ST ≠EXT2	DEM.N.16
		「私たちはここにいるだろう」 <i>sisi tutakuwepo hapa</i>		
	S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mú-she ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
		INDPRO.2pl	SM.2pl-PST.ST ≠EXT2	DEM.N.16
		「あなたたちはここにいるだろう」 <i>nyinyi mtakuwepo hapa</i>		
	S = 3pl.	<i>vó</i>	<i>vě-she ≠kerí</i>	<i>(i-)ha</i>
		INDPRO.3pl	SM.3pl-PST.ST ≠EXT2	DEM.N.16
		「彼らはここにいるだろう」 <i>wao watakuwepo hapa</i>		

ここでは、TAM *she-* を用いた例で代表しているが、それ以外の TAM を用いて、さまざまな未来概念を表示することが可能である (cf. 8.3, 10.1 等). 否定形は、文末におかれる否定詞 *ku* (および NTP) によって表わされる.

(23)	S = 1sg.	<i>níanyí</i>	<i>ngí-shé ≠kérí</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.1sg	SM.1sg-FUT1 ≠EXT2	DEM.N.16	NEG
		「私はここにはいないだろう」 <i>mimi sitakuwepo hapa</i>			
	S = 2sg.	<i>váavé</i>	<i>u-shé ≠kérí</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.2sg	SM.2sg-FUT1 ≠EXT2	DEM.N.16	NEG
		「あなたはここにはいないだろう」 <i>wewe hutakuwepo hapa</i>			
	S = 3sg.	<i>vé</i>	<i>e-shé ≠kérí</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.3sg	SM.3sg-FUT1 ≠EXT2	DEM.N.16	NEG
		「彼（女）はここにはいないだろう」 <i>yeye hatakuwepo hapa</i>			
	S = 1pl.	<i>sóosó</i>	<i>du-shé ≠kérí</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.1pl	SM.1pl-FUT1 ≠EXT2	DEM.N.16	NEG
		「私たちはここにはいないだろう」 <i>sisi hatutakuwepo hapa</i>			
	S = 2pl.	<i>níonyó</i>	<i>mu-shé ≠kérí</i>	<i>(i-)há</i>	<i>ku</i>
		INDPRO.2pl	SM.2pl-FUT1 ≠EXT2	DEM.N.16	NEG
		「あなたたちはここにはいないだろう」 <i>nyinyi hamtakuwepo hapa</i>			

S = 3pl.	vó	ve-shé ≠kérí	(i-)há	ku
	INDPRO.3pl	SM.3pl-FUT1 ≠EXT2	DEM.N.16	NEG
	「彼らはここにいないだろう」 wao hawatakuwepo hapa			

2.3.4 否定詞と場所の疑問詞

文末否定詞と場所の疑問詞(「どこ?」)は、分節素レベルでは同形で、ともに *ku* という形式である。したがって、例えば「あなたはいない」という否定文と「あなたはどこにいる?」という疑問文が、分節素構造上は同一になる。しかし、1) 先行音節(列)を高音調化するという、否定の *ku* 自体の音調特性(疑問詞の *ku* は、先行音節も含め低音調で実現する。ただし、イントネーションとして *ku* 自体が上昇することがある)と、2) 述語構造における NTP によって、超分節素的にその区別が表現される。以下に、いくつかの例を示す。

(24)	NEG	váavé	u ≠í	ku
		INDPRO.2sg	SM.2sg ≠EXT1	NEG
		「あなたはいない」 wewe hupo		
	wapi	váavé	ú ≠i	ku
		INDPRO.2sg	SM.2sg ≠EXT1	'where'
		「あなたはどこにいる?」 wewe uko wapi?		
(25)	NEG	váavé	u-vé ≠í	ku
		INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.STAT ≠EXT1	NEG
		「あなたはいなかった」 wewe hukuwepo		
	wapi	váavé	ú-ve ≠í	ku
		INDPRO.2sg	SM.2sg-PST.STAT ≠EXT1	'where'
		「あなたはどこにいた?」 wewe ulikuweco wapi?		
(26)	NEG	váavé	u-shé ≠kérí	ku
		INDPRO.2sg	SM.2sg-FUT1 ≠EXT2	NEG
		「あなたはいないだろう」 wewe hutakuwepo		
	wapi	váavé	ú-she ≠kerí	ku
		INDPRO.2sg	SM.2sg-FUT1 ≠EXT2	'where'
		「あなたはどこにいるだろう?」 wewe utakuweco wapi?		

2.3.5 まとめ

以上の構造をまとめると、次のようになる。また、2.3.1において例示はしていないが、現在時制形でも、語幹 ≠*keri* が確認されている(未来時制形では未確認)。2.1, 2.2 同様、否定詞 *ku* によって先行語 X に付与される遡行的な高音調拡張(leftward high tone spreading)の実現パターンは、Xの音調プロパティによって異なる(cf 1.4 (3))。

表 2-4 : 存在表現の構造一覧

	肯定	否定
現在	SM≠ <i>i</i> (X) SM≠ <i>kerí</i> (X)	SM≠ <i>í</i> (X) <i>ku</i> SM≠ <i>kéí</i> (X) <i>ku</i>
過去	SM- <i>ve</i> ≠ <i>í</i> (X) SM- <i>ve</i> ≠ <i>kerí</i> (X)	SM- <i>vé</i> ≠ <i>í</i> (X) <i>ku</i> SM- <i>vé</i> ≠ <i>kéí</i> (X) <i>ku</i>
未来	SM- <i>she</i> ≠ <i>kerí</i> (X)	SM- <i>shé</i> ≠ <i>kéí</i> (X) <i>ku</i>

2.4 補助動詞

動詞不定形を後続させることで補助動詞的に用いられる動詞には、≠*dim-a*「～することができる」、≠*kund-i*「～したい」、≠*tere-v-a*「～を乞う(するよう頼む)」、≠*wahi*「～したことがある」、といったものがある。以下に、いくつかの例を示す。

(27) *ngídim(e)ésoma kswahili*

ngí≠*dim-a* *í*≠*som-a* *ki-swahili*
SM.1sg≠'be able'-F INF≠'read'-F CPx.7-'Swahili'

「私はスワヒリ語を読むことができる」 *Naweza kusoma Kiswahili.*

(28) *úkundí isihilya lúv'á'á*

ú≠*kund-í* *í*≠*sihili-a* *lúvaá*
SM.2sg≠'love'-STAT INF≠'leave'-F 'now'

「あなたはすぐに出ていきたがっている」 *Unataka kuondoka sasa hivi.*

(29) *ngítere(v)eém's'á'idya*

ngí≠*tere-v-a* *í-m'*≠*s'á'idi-a*
SM.1sg≠'beg'-F INF-OM.3sg≠'help'-F

「私は、彼(女)を助けることを乞う(助けてほしい)」 *Naomba kumsaidia.*

(30) *veléwahí ila údóní ku*

ve-lé≠*wahí* *i*≠*l-a* *údoní* *ku*
SM.3pl-PST1≠'arrive on time' INF≠'eat'-F 'Udon' NEG

「彼らはまだうどんを食べたことがない」 *Hawajawahi kula Udon.*

補助動詞相当語の末尾辞が *-a* である場合、その直後に不定形が続くと、しばしば母音融合が起こり、*-a##i-* 連続が *ee* ないしその短化した形で実現する。

3. 代名詞と数詞

3.1 属詞

「A の B」のような、典型的には所有ないし所属関係にある 2 つの語を結びつける形式を、バントゥ語学では一般に *associative* と言及するが、それをここでは属詞と呼ぶ。属詞の形式は次のとおりである。

- (1) cl.1: *mw-ana* $\widehat{u-a}$ /wa/ *ksáli*
 CPx.1-‘child’ PPx.1-ASS (personal name)
 「クサリの子ども」 Mtoto wa Kisali.
- cl.2: *va-ana* /vaná/ $\widehat{va-a}$ /va/ *hádjí’á*
 CPx.2-‘child’ PPx.2-ASS (personal name)
 「ハディジャの子どもたち」 Watoto wa Hadija.
- cl.3: *m’-di* $\widehat{u-a}$ /wa/ *m’-meéku*
 CPx.3-‘tree’ PPx.3-ASS CPx.1-‘old person’
 「老人の木」 Mti wa mzee.
- cl.4: *mi-di* $\widehat{i-a}$ /ya/ *m’-shéku*
 CPx.4-‘tree’ PPx.4-ASS CPx.1-‘grand mother’
 「祖母の木 (複)」 Miti ya bibi.
- cl.5: *i-wé* $\widehat{li-a}$ /la/ \emptyset -*máé*
 CPx.5-‘stone’ PPx.5-ASS CPx.1a-‘mother (my?)’
 「母の石」 Jiwe la mama.
- cl.6: *ma-wé* $\widehat{ya-a}$ /ya/ *m’be*
 CPx.6-‘stone’ PPx.6-ASS (vocative word for a male elder)
 「父の石 (複)」 Mawe ya baba.
- cl.7: *ng’-ndo* $\widehat{ki-a}$ /kya/ *m’-rómbó*
 CPx.7(>9)-‘entity’ PPx.7-ASS CPx.1-‘Rombo’
 「ロンボ人のモノ」 Kitu cha Mrombo.
- cl.8: *fi-nd’ó* $\widehat{fi-a}$ /fya/ *va-rómbó*
 CPx.8-‘entity’ PPx.8-ASS CPx.2-‘Rombo’
 「ロンボ人たちのモノ (複)」 Vitu vya Warombo.
- cl.9: \emptyset -*shubá* $\widehat{i-á}$ /yá/ \emptyset -*ásali*
 CPx.9-‘bottle’ PPx.9-ASS CPx.9-‘honey’
 「蜂蜜のビン」 Chupa cha asali.
- cl.10: \emptyset -*shubá* $\widehat{si-a}$ /sa/ *u-ari* /wari/
 CPx.10-‘bottle’ PPx.10-ASS CPx.11-‘liquar’
 「酒のビン」 Chupa za pombe.

cl.11:	<i>u-risí</i>	<i>u-á /wa/</i>	<i>mw-ána (~mw-aná)</i>
	CPx.11-‘thread’	PPx.11-ASS	CPx.1-‘child’
	「子どもの糸」 Uzi wa mtoto.		
cl.12:	<i>ka-mw-ána</i>	<i>ka-á /ka/</i>	<i>ksáli</i>
	CPx.12-CPx.1-‘child’	PPx.12-ASS	(personal name)
	「クサリの小さい子 (赤ちゃん)」. Katoto wa Kisali.		
cl.16:	<i>ha-ndu</i>	<i>ha-á /ha/</i>	<i>mw-álimu</i>
	CPx.16-‘entity’	PPx.16-ASS	CPx.1-‘teacher’
	「先生の場合」 Mahali pa mwalimu.		
cl.17:	<i>ku-ndu</i>	<i>ku-á /kwa/</i>	<i>va-nyáma</i>
	CPx.17-‘entity’	PPx.17-ASS	CPx.2-‘animal’
	「動物たちの場合」 Mahali kwa wanyama.		

構造的には、基本的には、主語接頭辞 (6.1) と *-a* が融合した形式と分析される。ただし、cl.1 はその限りではなく、*u-a* と分析される。この、属辞に前接する接頭辞を代名詞接頭辞 (PPx, pronominal prefix) と呼ぶことにする。

3.2 所有詞

一方、同様に所有の概念を表わす要素として所有詞がある。これは 1, 2, 3 人称の単複に対応する形式が確認される。

(2) Q:	<i>i-kári</i>	<i>lí</i>	<i>ni</i>	<i>lí-á /la/</i>	<i>ívi</i>
	CPx.5-‘car’	DEM.N.5	COP	PPx.5-ASS	‘who’
	「この車は誰のですか?」 Gari hili ni la nani?				
1sg:	<i>lí</i>	<i>ni</i>	<i>lí-ákwa /lákwa/</i>		
	DEM.N.5	COP	PPx.5-POSS.1sg		
	「これは私のです」 Hili ni langu.				
2sg:	<i>lí</i>	<i>ni</i>	<i>lí-áfo /láfo/</i>		
	DEM.N.5	COP	PPx.5-POSS.2sg		
	「これはあなたのです」 Hili ni lako.				
3sg:	<i>lí</i>	<i>ni</i>	<i>lí-áke /lákwa/</i>		
	DEM.N.5	COP	PPx.5-POSS.3sg		
	「これは彼 (女) のです」 Hili ni lake.				
1pl:	<i>lí</i>	<i>ni</i>	<i>lí-edú /ledú/</i>		
	DEM.N.5	COP	PPx.5-POSS.1pl		
	「これは私たちののです」 Hili ni letu.				

2pl:	<i>lí</i>	<i>ni</i>	<i>lí-enyú</i> /lenyú/
	DEM.N.5	COP	PPx.5-POSS.2pl
	「これはあなたたちのです」 Hili ni lenyu.		
3pl:	<i>lí</i>	<i>ni</i>	<i>lí-avó</i> /lavó/
	DEM.N.5	COP	PPx.5-POSS.3pl
	「これは彼らのです」 Hili ni lao.		

上例では、単数に対応する各形式は初頭音節で高音調が、複数に対応する各形式では末音節で高音調が実現している。とくに後者は安定的に末尾音節で高音調が認められるが、先行する名詞の音調によって音調実現形は変わりうる。所有代名詞の形式は次のようにまとめられる。また、前接する接辞は **PPx** である。

表 3-1 : 所有詞の人称数別一覧

	単数	複数
1 人称	<i>-akwa</i> 「私の」	<i>-edu</i> 「私たちの」
2 人称	<i>-afo</i> 「あなたの」	<i>-enyu</i> 「あなたたちの」
3 人称	<i>-ake</i> 「彼(女)の」	<i>-avo</i> 「彼らの」

3.3 疑問代名詞

疑問文で現れる疑問代名詞には、次のようなものが確認されている。

- (3) *ú ≠ amb-a* *kí-o* /kyo/ *íki*
 SM.2sg ≠ 'say'-F CPx.7-DEM.M 'what'
 「(あなたは) 何と言いましたか?」 Unasema nini?
- (4) *u-é ≠ lá-w-a* /weláwa/ *ívi*
 SM.2sg-HAB ≠ 'call'-PASS-F CPx.7-DEM.M
 「あなたのお名前は (何と呼ばれますか) ?」 Unaitwa nani?
- (5) *ú ≠ re* *ki-ndo* /kndo/ *ki-ngá-ki*
 SM.2sg ≠ 'have' CPx.7-'entity' CPx.7-'how/which'-CPx.7
 「(あなたは) どんなものを持っていますか?」 Una kitu gani?
- (6) *mú ≠ kund-i* *ki-laló* /klaló/ *ki-ngá-ki*
 SM.2pl ≠ 'love'-STAT CPx.7-DEM.M CPx.7-'how/which'-CPx.7
 「あなたたちはどの食べ物が欲しいですか?」 Mnataka chakula gani?
- (7) *vé ≠ re* *va-ana* /vana/ *va-Ŵnga* /vaánga/
 SM.3pl ≠ 'have' CPx.2-'child' PPx.2-'how many'-PPx.2
 「彼(女)はいつ来ますか?」 Atakuja lini?

(8) *n-e-í≠sh-a* *ʔndihí*

ASSERT-SM.3sg-PROGR≠'come'-F 'when'

「彼（女）はいつ来ますか？」 *Atakuja lini?*

(9) *ú≠end-a* *k'ú'*

SM.2sg≠'go'-F 'where'

「あなたはどこに行きますか？」 *Unakwenda wapi?*

「何」に相当する *iki* は、しばしば cl.7 の中称指示詞 *kyo* を伴って現れる。「どのような」と「どの」には、形式的な区別がないようである。疑問代名詞の各形式は次のとおりである。

表 3-2 : 疑問詞一覧

何 <i>nini</i>	誰 <i>nani</i>	どんな <i>gani</i> , どの <i>-pi</i>	いくつの <i>ngapi</i>	いつ <i>lini</i>	どこ <i>wapi</i>
<i>iki</i>	<i>ivi</i>	PPx-nga-PPx	-Vnga	<i>indihi</i>	<i>ku</i>

3.4 数詞

数の表現には次のようなものがある。まず、特定の名詞を修飾しない単独の形式を「単独形」がある。名詞を修飾する場合は、名詞の後ろに単独形が後続するが、“1” から “5” までは、被修飾名詞のクラスに応じた接頭辞が前接される。この接頭辞を数詞接頭辞 (EPx) と呼ぶが、具体的な形式は、各名詞クラスを扱う 4 章を参照されたい。また、「～番目の」という順序を表わす序数の表現は、被修飾名のクラスに一致した属詞を先行させる。具体的な形式を以下に示す。名詞修飾形の例には cl.1 名詞の例を挙げている。

表 3-3 : 数詞一覧

	Swahili	単独形	序数形	cl. 1/2
“1”	<i>moja</i>	<i>ímú</i>	ASS <i>kwánsa</i>	<i>mw-aná u-imú /umú/</i>
“2”	<i>mbili</i>	<i>ivilí</i>	ASS <i>ka-vílí</i>	<i>va-aná va-vílí</i>
“3”	<i>tatu</i>	<i>sádu</i>	ASS <i>ka-radú</i>	<i>va-aná va-radú</i> cf. (cl.4) <i>mi-dí i-sadí</i>
“4”	<i>nne</i>	<i>ína</i>	ASS <i>ka-ána</i>	<i>va-aná va-ána</i>
“5”	<i>tano</i>	<i>tánu</i>	ASS <i>ka-tánú</i>	<i>va-aná va-tánú</i>
“6”	<i>sita</i>	<i>síta</i>	ASS <i>síta</i>	<i>va-aná sitá</i>
“7”	<i>saba</i>	<i>sába</i>	ASS <i>sába</i>	<i>va-aná sabá</i>
“8”	<i>nane</i>	<i>náne</i>		<i>va-aná nané</i>
“9”	<i>tisa</i>	<i>kénda</i>		<i>va-aná kenda</i>
“10”	<i>kumi</i>	<i>íkúmi</i>		<i>va-aná ikumí</i>
“11”	<i>kumi na moja</i>	<i>ikumí na ímu</i>		<i>va-aná ikumí na ímu</i>

"20"	ishirini	<i>ishirĩni</i>	<i>va-aná ishirĩni</i>
"30"	thelathini	<i>sélasĩni</i>	<i>va-aná selasĩni</i>
"40"	arobaini	<i>aṛobaĩni</i>	<i>va-aná aṛobaĩni</i>
"50"	hamsini	<i>h'ámsĩni</i>	<i>va-aná hamsĩni</i>
"60"	sitini	<i>stĩni</i>	<i>va-aná stĩni</i>
"70"	sabini	<i>sabĩni</i>	<i>va-aná sabĩni</i>
"80"	themanini	<i>sémanini</i>	<i>va-aná semanĩni</i>
"90"	tisini	<i>tisĩni</i>	<i>va-aná tisĩni</i>
"100"	mia moja	<i>mia ímu</i>	<i>va-aná mia ímu</i>

4. 名詞と名詞クラス

バントゥ諸語文法の基本原則である文法的一致の基盤となる文法カテゴリーが、名詞クラスである。名詞クラスは、名詞の分類カテゴリーであり、本来は意味的な基準に基づく分類であったと考えられるが、共時的にはそのような分類基準は曖昧化している（ただし、「人間」名詞が属する **cl.1/2** を除く）。また、一部には、派生概念（具体的には「指小」）を表わすのに特化しているクラスがある。各名詞の所属クラスは、基本的には名詞語幹に前接するクラス接頭辞（**CPx**）によって明示される。

以下、バントゥ語学におけるクラス分類順にしたがって、各クラスごとの **CPx** および一致接辞を網羅的に示す。提示する形式は、次のとおりである；

- ・主語（一致）接頭辞（**SM**）
- ・**SM** の **TAM** との融合形（例では「完了（**ANT**）」との融合形，**SM.A**）
- ・目的語（一致）接頭辞（**OM**）
- ・近称，中称，遠称に相当する 3 系列の指示詞（**DEM.N**, **DEM.M**, **DEM.F**）
- ・形容詞接辞（**APx**）
- ・数詞接頭辞（**EPx**）

またこれらに加え、ロンボ語内の体系性からみて、あるいは通バントゥ的視点からみて特徴的な現象についても言及する。

4.1 1/2 クラス

cl.1/2 の **CPx** は、バントゥ祖語では **mu-*, **ba-* という形が再建されている (cf. Meeussen 1967)。これに相当するロンボ語の形式は *m'*-, *va-* である。前者は、母音始まりの語幹に前接する場合、異形態 *mw-* で現れる（さらに、**CPx** 自体に高音調が付与される場合、*mu-* という形で実現することがある）。後者が母音始まりの語幹に前接する場合は母音連続が生じることになるが、これは統語環境によっては短化して実現する。意味的には、バントゥ諸語一般において「人間」に関する名詞が属するクラスが **1/2** クラスであり、この原則はロンボ語においても同様である。

- (1) **SM.1:** *mw-aná* *n-ě-she* ≠ *sh-a*
CPx.1-‘child’ **ASSERT-SM.1-FUT1** ≠ ‘come’-F
「子どもは来るでしょう」 *Mtoto atakuja.*
- SM.2:** *va-aná /vaná/* *vě-she* ≠ *sh-a*
CPx.2-‘child’ **SM.2-FUT1** ≠ ‘come’-F
「子どもたちは来るでしょう」 *Watoto watakuja.*
- (2) **SM.A.1:** *mw-aná* *a-ā* ≠ *sh-a /ásha/*
CPx.1-‘child’ **SM.1-ANT** ≠ ‘come’-F
「子どもが来た」 *Mtoto amekuja.*

- SM.A.2: *va-aná /vaná/ va-ā ≠ sh-a /vásha/*
 CPx.2-‘child’ SM.2-ANT ≠ ‘come’-F
 「子どもたちが来た」 Watoto wamekuja.
- (3) OM.1: *ngí-le-m’ ≠ loli-a /ngílem’lolya/ mw-aná*
 SM.1sg-PST1-OM.1 ≠ ‘see’-F CPx.1-‘child’
 「私は子どもを見た」 Nilimwona mtoto.
- OM.2: *ngí-le-va ≠ lóli-a /ngílevalólya/ va-aná /vaná/*
 SM.1sg-PST1-OM.2 ≠ ‘see’-F CPx.2-‘child’
 「私は子どもたちを見た」 Niliwaona watoto.
- (4) DEM.N.1: *m’-shukú sh^{(4)ú}*
 CPx.1-‘grand child’ DEM.N.1
 「この孫」 Mjukuu huyu.
- DEM.N.2: *va-shukú v^{(4)á}*
 CPx.2-‘grand child’ DEM.N.2
 「この孫たち」 Wajukuu hawa.
- (5) DEM.M.1: *m’-shukú sh^{(4)ó}*
 CPx.1-‘grand child’ DEM.M.1
 「その孫」 Mjukuu huyo.
- DEM.M.2: *va-shukú v^{(4)ó}*
 CPx.2-‘grand child’ DEM.M.2
 「その孫たち」 Wajukuu hao.
- (6) DEM.F.1: *m’-shuku ú-l’á*
 CPx.1-‘grand child’ PPx.1-DEM.F
 「あの孫」 Mjukuu yule.
- DEM.F.2: *va-shuku vá-l’á*
 CPx.2-‘grand child’ PPx.2-DEM.F
 「あの孫たち」 Wajukuu wale.
- (7) APx.1: *mw-anafúnsi m’-shá*
 CPx.1-‘student’ APx.1-‘good’
 「よい学生」 Mwanafunzi mzuri.
- APx.2: *va-anafúnsi /vanafúnsi/ va-shá*
 CPx.2-‘student’ APx.2-‘good’
 「よい学生たち」 Wanafunzi wazuri.
- (8) EPx.1: *mw-aná u-imú /umú/*
 CPx.1-‘child’ EPx.1-‘one’
 「ひとりの子ども」 Mtoto mmoja.

EPx.2: *va-aná /vaná/ va-vílí*
 CPx.2-‘child’ EPx.2-‘two’
 「ふたりの子ども」 Watoto wawili.

SM については、cl.1 (事実上、3 人称単数に相当) に 2 つの形式が現れる。すなわち、(1) に現れる *ne-* と、*e-* という形式である。前者は通常の肯定文に現れるが、後者は、典型的には否定文、疑問文等で現れる。他のチャガ系諸言語にもこの種の交代現象が確認され、先行研究では、*n-* (相当形式) を *focus marker* ないし *assertion marker* と言及している (cf. Philippon and Montlahuc 2003 等)。ここでは、後者の訳語をとって「言明」のマーカ―と分析しておく。

完了のTAMと融合した形式は、cl.1 で *a-*、cl.2 で *va-* である。ただし、この形式がSMそのものと再解釈され、非完了形でも現れることがある (ただし、完了形で *e-*、*ve-* が現れることはない)。また、完了形においては、先行する名詞の末尾音節に高音調があっても、動詞初頭の高音調が、その高さを超えずに実現する (つまり、動詞初頭高音調が超高音調 (SM̂-) にならない) ¹¹。

OM については、(3) に見られるように、音調上の違いが確認される。cl.1 の場合は後続の音節 (語幹初頭音節) が低いが、cl.2 の場合は高く現れる。これは、cl.1 vs. 2 の対立というよりは、1, 2, 3 人称の単数のOMに対してそれ以外のOMという対立関係であり、前者は後続音節を高くしないのに対し、後者は後続音節を高くする (これについては、8 章、9 章に挙げる動詞活用形の具体例を参照のこと。より詳細な説明は 8.1 に示す)。ただし、cl.1 のOMでも後続音節が高く発音される場合があるなど、音調パターンの差異は、曖昧化している傾向が認められる。

指示詞については、cl.1 の系列は(後に見る)cl.3 のそれと同一の形式をとっている点が指摘される。一致接辞の形式的な異同については、cl.1 で CPx (*m'*) = APx (*m'*) ≠ PPx (*u-*) = EPx (*u-*)、cl.2 で、CPx (*va-*) = APx (*va-*) = PPx (*va-*) = EPx (*va-*) となる。

4.2 3/4 クラス

cl.3/4 の CPx は、バントゥ祖語では **mu-*、**mi-* という形が再建されている (cf. Meeussen 1967)。これに相当するロンボ語の形式は *m'*、*mi-* であり、前者は cl.1 と同様、母音前で *mw-* という異形態を持つ (その形式自体に高音調が付与される場合は、*mu-* として実現する)。

¹¹ これに関しては、音調論的には、仮説として次のような解釈が可能かもしれない。すなわち、基底では SM も TAM *a-* も高音調 (H) を持っており、(H 連続の後者が消去されるという) メーウセンの規則の反対のパターン (これ自体はチャガ諸語に広く認められる) で、SM の高音調が消去され、ØH 連続が分節素レベルで融合してダウンステップ化する、というプロセスである。一般化すれば次のように記述できる； [...H]_{Noun} [[H]_{SM}[H]_{TAM...}]_{Verb} → (Anti-Meeussen's rule) → [...H]_{Noun} [[Ø]_{SM}[H]_{TAM...}]_{Verb} → (vowel fusion) → [...H]_{Noun} [[ØH]_{SM.A...}]_V → [H]_{Noun}[⁺H]_{Verb}。

- (9) SM.3: *m'-di* *ú-she ≠ u-a /úsheuwa/*
 CPx.3-'tree' SM.3-FUT1 ≠ 'fall'-F
 「木は落ちるだろう」 Mti utaanguka.
- SM.4: *mi-di* *í-she ≠ u-a /ísheuwa/*
 CPx.4-'tree' SM.4-FUT1 ≠ 'fall'-F
 「木（複）は落ちるだろう」 Miti itaanguka.
- (10) SM.A.3: *m'-di* *u-ā ≠ u-a /wáúwa/*
 CPx.3-'tree' SM.3-ANT ≠ 'fall'-F
 「木が落ちた」 Mti umeanguka.
- SM.A.4: *mi-di* *i-ā ≠ u-a /yáúwa/*
 CPx.4-'tree' SM.4-ANT ≠ 'fall'-F
 「木（複）が落ちた」 Miti imeanguka.
- (11) OM.3: *ngí-le-u ≠ lóli-a /ngíleulólya/* *m'-di*
 SM.1sg-PST1-OM.3 ≠ 'see'-F CPx.3-'tree'
 「私は木を見た」 Niliuona mti.
- OM.4: *ngí-le-i ≠ lóli-a /ngíleilólya/* *mi-di*
 SM.1sg-PST1-OM.4 ≠ 'see'-F CPx.4-'tree'
 「私は木（複）を見た」 Niliiona miti.
- (12) DEM.N.3: *m'-dí* *sh⁽⁴⁾ú'*
 CPx.3-'tree' DEM.N.3
 「この木」
- DEM.N.4: *mi-dí* *y⁽⁴⁾i'*
 CPx.4-'tree' DEM.N.4
 「これらの木（複）」
- (13) DEM.M.3: *m'-dí* *sh⁽⁴⁾ó'*
 CPx.3-'tree' DEM.M.3
 「その木」
- DEM.M.4: *mi-dí* *y⁽⁴⁾ó'*
 CPx.4-'tree' DEM.M.4
 「それらの木（複）」
- (14) DEM.F.3: *m'-di* *ú-¹lá*
 CPx.3-'tree' PPx.3-DEM.F
 「あの木」
- DEM.F.4: *mi-di* *í-¹lá*
 CPx.4-'tree' PPx.4-DEM.F
 「あれらの木（複）」

- (15) APx.3: *m'-dí* *m'-shá*
 CPx.3-'tree' APx.3-'good'
 「よい木」 Mti mzuri.
- APx.4: *mi-dí* *mi-shá*
 CPx.4-'tree' APx.4-'good'
 「よい木 (複)」 Wanafunzi wazuri.
- (16) EPx.3: *m'-dí* *u-imú /umú/*
 CPx.3-'tree' EPx.3-'one'
 「ひとつの木」 Mti mmoja.
- EPx.4: *mi-dí* *i-vlí*
 CPx.4-'tree' EPx.4-'two'
 「ふたつの木 (複)」 Miti miwili.

形式的には、次のような点が指摘される。OM は、いずれも高音調を有していると考えてよさそうである。cl.3 の指示詞の系列は、cl.1 のそれと同形である。一致接辞の形式的な異同については、cl.3 で CPx (*m'*) = APx (*m'*) ≠ PPx (*u-*) = EPx (*u-*), cl.4 で、CPx (*mi-*) = APx (*mi-*) ≠ PPx (*i-*) = EPx (*i-*) となる。

とくに cl.3 で特徴的な点は、単複の組み合わせを含む、語形式とクラス対応の関係である。一般に、名詞クラス番号というのは、奇数クラスが単数名詞で、それに 1 を加えた偶数クラスが、対応する複数のクラスという対応になっている。つまり、cl.3 の対応する複数は cl.4 というのが一般的な形である。しかし、この言語では、cl.3 名詞の複数は、語形自体は同形のまま cl.10 の一致パラダイムに従うという語彙が（基礎語彙の範疇に限れば、3/4 対応の名詞に匹敵するか、それ以上の頻度で）、多く認められる。例えばスワヒリ語では、「月」は単数で *mw-ezi*, 複数で *mi-ezi* となり、3/4 の単複対応を見せている。しかしロンボ語では、単複ともに *mw-eri* であり、複数では cl.10 扱いとなっており、例えば「この月々（ここ数か月）」という指示詞を付けた形では、*mweri si* となる（単数は *mweri shu*）。この 3/10 対応が頻繁に認められるのが、ロンボ語に見られる名詞クラス対応の著しい特徴のひとつになっている。また、3/4 パターンと 3/10 パターン両方の活用が可能という例もあり、両パターンの境界は必ずしも判然とはしない（体系的変化の途上であるかもしれない）。一方で例外的と言える組み合わせとしては、cl.3/8 という単複対応も確認されている（e.g. 「山」 *m'-lima / fi-lima*, cf. スワヒリ語 *m-lima / mi-lima*）。

同様にクラス対応に関する現象として、cl.11 名詞が、cl.3 の一致パラダイムにしたがった活用を見せることがあるという点も指摘できる。つまり、語形は cl.11 のままでありながら、指示詞「この」が、cl.11 の *wu* ではなく、*shu* で現れるといった現象である。これは、EPx, PPx が同形であるという形式的類似が契機となつての混同現象と推測される¹²。

¹² 上述の 3/4 パターンと 3/10 パターンの関係は、前者から後者への変化（単複同形化）の可能性も、後者から前者への変化（スワヒリ語からの類推的体系変化）も考えられるが、この現象については、明らかに cl.11 の活用が（部分的であれ）放棄され、cl.3 のそれに合流するという変化ということになる。

4.3 5/6 クラス

cl.5/6 の CPx は、バントゥ祖語では **i-*, **ma-* という形が再建されている (cf. Meeussen 1967). これに相当するロンボ語の形式は *i-*, *ma-* であり、前者はしばしば CPx が脱落した形式が確認される. cl.5 の CPx の脱落はスワヒリ語でも確認されるが、スワヒリ語の場合であれば、語幹が単音節のときは CPx が接合され、2 音節以上の場合には脱落するという明確な形式上の条件が認められるのに対し、この言語の場合は、そのような音形上の条件は曖昧で、CPx を接合する形も脱落している形もともに許容されるという場合が多い. 例えば、「目」は、 \emptyset -*riso*, *i-riso* ともに認められ、かつ、さまざまな (音韻・形態・統語的な) 環境で両者がともに許容される. ただし、このような例においては、意味的には、CPx が接合している方が、派生的な意味合いを伴う (この場合であれば、指大 *augmentative*. cf. 4.10) という含意があるようである.

- (17) SM.5: *i-we* *lí-she ≠ u-a /lísheuwa/*
 CPx.5-‘stone’ SM.5-FUT1 ≠ ‘fall’-F
 「石は落ちるだろう」 Jiwe litaanguka.
- SM.6: *ma-we* *yá-she ≠ u-a /yásheuwa/*
 CPx.6-‘stone’ SM.6-FUT1 ≠ ‘fall’-F
 「石 (複) は落ちるだろう」 Mawe yataanguka.
- (18) SM.A.5: *i-we* *lí-ā ≠ u-a /láúwa~laíwa/*
 CPx.5-‘stone’ SM.5-ANT ≠ ‘fall’-F
 「石が落ちた」 Jiwe limeanguka.
- SM.A.6: *ma-we* *ya-ā ≠ u-a /yáúwa~yáiwa/*
 CPx.6-‘stone’ SM.6-ANT ≠ ‘fall’-F
 「石 (複) が落ちた」 Mawe yameanguka.
- (19) OM.5: *ngí-le-li ≠ lóli-a /ngílelilólya/* *i-wé*
 SM.1sg-PST1-OM.5 ≠ ‘see’-F CPx.5-‘stone’
 「私は石を見た」 Nililiona jiwe.
- OM.6: *ngí-le-ya ≠ lóli-a /ngíleyalólya/* *ma-wé*
 SM.1sg-PST1-OM.6 ≠ ‘see’-F CPx.6-‘stone’
 「私は石 (複) を見た」 Niliyaona mawe.
- (20) DEM.N.5: *í-we* *lí*
 CPx.5-‘stone’ DEM.N.5
 「この石」 Jiwe hili.
- DEM.N.6: *má-we (~ma-wé)* *y⁽⁴⁾á*
 CPx.6-‘stone’ DEM.N.6
 「これらの石 (複)」 Mawe haya.

- (21) DEM.M.5: *í-we* *l⁽⁴⁾ó'*
 CPx.5-'stone' DEM.M.5
 「その石」 Jiwe hilo.
- DEM.M.6: *má-we (~ma-wé)* *y⁽⁴⁾ó'*
 CPx.6-'stone' DEM.M.6
 「それらの石 (複)」 Mawe hayo.
- (22) DEM.F.5: *í-we (~í-wé)* *lya*
 CPx.5-'stone' DEM.F.5
 「あの石」 Jiwe ile.
- DEM.F.6: *ma-we* *yá-l'á*
 CPx.6-'stone' PPx.6-DEM.F
 「あれらの石 (複)」 Mawe yale.
- (23) APx.5: *i-we* *í-sh'á*
 CPx.5-'stone' APx.5-'good'
 「よい石」 Jiwe zuri.
- APx.6: *ma-we* *má-sh'á (~/més'h'á/)*
 CPx.6-'stone' APx.6-'good'
 「よい石 (複)」 Mawe mazuri.
- (24) EPx.5: *i-we* *lí-imú /lím'ú/*
 CPx.5-'stone' EPx.5-'one'
 「ひとつの石」 Jiwe moja.
- EPx.6: *ma-we* *a-víli*
 CPx.6-'stone' EPx.6-'two'
 「ふたつの石 (複)」 Mawe mawili.

形式的には、次のような点が指摘される。OM は、いずれも高音調を有していると考えてよさそうである。また、cl.6 の OM は、上例では *ya-* で現れているが、*a-* という形式もある。指示詞については、cl.5 の DEM.F が、*lya* という形式で、これは規則的な *li-la* という形態素連続が、形式的な融合（「遠称」を示す *-la* の子音脱落）を起こした形とみられる。一致接辞の形式的な異同については、cl.5 で CPx (*i-*) = APx (*i-*) ≠ PPx (*li-*) = EPx (*li-*)、cl.6 で、CPx (*ma-*) = APx (*ma-*) ≠ PPx (*ya-*) ≠ EPx (*a-*) となる。

また文法上重要なのは、いわゆる動詞の不定形 (*infinitive*)、あるいは少なくとも形式的には動名詞形 (*gerund*) は、動詞語幹に CPx.5 を接合することで形成されるということである。通バントウ的には CPx.15 がその機能を担うことが一般的であることから、チャガ諸語と他を切り分ける形態論上の顕著な特徴になっている¹³。

¹³ 他に不定形を cl.5 でマークする言語は、飛び地的に離れた Forest Bantu 諸語（コンゴの森林地帯）が知られているが、両者の間に何らかの言語的な近親性が認められるか、あるいは歴史的な関係があるの

4.4 7/8 クラス

cl.7/8 の CPx は、バントゥ祖語では **ki-*, **bi-* という形が再建されている (cf. Meeussen 1967). これに相当するロンボ語の形式は *ki-*, *fi-* であり、前者は子音前で異形態 *k-* として実現する. 後者についても、その母音が著しく無声化した形で実現するが、完全に脱落しているとは見なさない. その根拠は、例えば音調の面に求めることができる. CPx に高音調が付与される場合、子音前の CPx.7 の場合、基本的にその高音調はキャンセルされるか、後続音節にシフトするが、CPx.8 の場合は、無声化しつつも、音調自体は CPx 自体で実現される. 例えば、以下 (31) を参照されたい (厳密には APx の例だが、このクラスでは CPx と APx は同形である). cl.8 の場合は、*fi-sh'á*「よい」と APx で高音調が実現しているが、cl.7 の場合は *k-shá* となり、APx は音調を保持できるだけの母音性を失っている.

- | | | |
|---------------|--|-----------------------------------|
| (25) SM.7: | <i>kʔ-ó(ó)vé</i> | <i>kí-she ≠ u-a /kísheuwa/</i> |
| | CPx.7-‘mirror’ | SM.7-FUT1 ≠ ‘fall’-F |
| | 「鏡は落ちるだろう」 Kioo kitaanguka. | |
| SM.8: | <i>fʔ-ó(ó)vé</i> | <i>fí-she ≠ u-a /físheuwa/</i> |
| | CPx.8-‘mirror’ | SM.8-FUT1 ≠ ‘fall’-F |
| | 「鏡 (複) は落ちるだろう」 Vioo kitaanguka. | |
| (26) SM.A.7: | <i>ki-óové</i> | <i>ki-ā ≠ u-a /kyáúwa~kyaúwa/</i> |
| | CPx.7-‘mirror’ | SM.7-ANT ≠ ‘fall’-F |
| | 「鏡が落ちた」 Kioo kimeanguka. | |
| SM.A.8: | <i>fi-óové</i> | <i>fí-ā ≠ u-a /fyáúwa~fyaúwa/</i> |
| | CPx.8-‘mirror’ | SM.8-ANT ≠ ‘fall’-F |
| | 「鏡 (複) が落ちた」 Vioo vimeanguka. | |
| (27) OM.7: | <i>ngí-le-ki ≠ lóli-a /ngíleklólya/</i> | <i>ki-óove</i> |
| | SM.1sg-PST1-OM.7 ≠ ‘see’-F | CPx.7-‘mirror’ |
| | 「私は鏡を見た」 Nilikiona kioo. | |
| OM.8: | <i>ngí-le-fi ≠ lóli-a /ngílefilólya/</i> | <i>fi-óove</i> |
| | SM.1sg-PST1-OM.8 ≠ ‘see’-F | CPx.8-‘mirror’ |
| | 「私は鏡 (複) を見た」 Niliviona vioo. | |
| (28) DEM.N.7: | <i>ki-óove</i> | <i>ki</i> |
| | CPx.7-‘mirror’ | DEM.N.7 |
| | 「この鏡」 Kioo hiki. | |
| DEM.N.8: | <i>fi-óove</i> | <i>fi</i> |
| | CPx.8-‘mirror’ | DEM.N.8 |
| | 「これらの鏡 (複)」 Vioo hivi. | |

かといったことは、今のところ明らかではない。

- (29) DEM.M.7: *ki-óóve* ***ky⁽⁴⁾ó'***
 CPx.7-‘mirror’ DEM.M.7
 「その鏡」 *kioo hicho*.
- DEM.M.8: *fi-óóve* ***y⁽⁴⁾ó'***
 CPx.8-‘mirror’ DEM.M.8
 「それらの鏡 (複)」 *Vioo hivyo*.
- (30) DEM.F.7: *ki-óóve* ***ki-l'á***
 CPx.7-‘mirror’ PPx.7-DEM.F
 「あの鏡」 *Kioo kile*.
- DEM.F.8: *fi-óóve* ***fi-l'á***
 CPx.8-‘mirror’ PPx.8-DEM.F
 「あれらの鏡 (複)」 *Vioo vile*.
- (31) APx.7: *ki-óóve* ***ki-sh'á /k-shá/***
 CPx.7-‘mirror’ APx.7-‘good’
 「よい鏡」 *Kioo kizuri*.
- APx.8: *fi-óóve* ***fi-sh'á***
 CPx.8-‘mirror’ APx.8-‘good’
 「よい鏡 (複)」 *Vioo vizuri*.
- (32) EPx.7: *ki-óóve* ***ki-ímu***
 CPx.7-‘mirror’ EPx.7-‘one’
 「ひとつの鏡」 *Kioo kimoja*.
- EPx.8: *fi-óóve* ***fi-vílí***
 CPx.8-‘mirror’ EPx.8-‘two’
 「ふたつの鏡 (複)」 *Vioo viwili*.

形式的には、次のような点が指摘される。OM は、いずれも高音調を有していると考えてよさそうである。一致接辞の形式的な異同については、cl.7/8 とともに、CPx (*ki-/fi-*) = APx (*ki-/fi-*) = PPx (*ki-/fi-*) = EPx (*ki-/fi-*) となる。

また一部の母音始まり語幹の語彙のなかに、CPx 部分が摩擦音化したとみられる形式がある；e.g. 「道具」 *shombo* < *ki-ombo*, 「部屋」 *shumba* < *ki-umba*. CPx の音形変化という点では、これも一部の語幹のみに認められることであるが、CPx の (母音脱落を経たうえでの) 鼻音化の現象が認められる。これは、語幹が鼻子音連続 (NC) で始まるという条件で、CPx の *k-* が *ng'* [ŋ] として実現するという現象で、例えば次の例が典型的である；*ki-ndo* > (i の脱落) > *k-ndo* > (語幹頭 NC /nd/ を引き金とする鼻音性の逆行同化) > *ng'-ndo* 「モノ」。NC をトリガーとした鼻音性の逆行同化は、バントゥ語学ではよく知られた現象で、一般に「ガンダ語の法則 (Ganda's Law)」ないし「マインホフの法則 (Meinhof's Law)」として知られる現象である。

4.5 9/10 クラス

cl.9/10 の CPx は, バントゥ祖語ではともに **n-* という形が再建されている (cf. Meeussen 1967). これに相当するロンボ語の形式は, 後続の子音と調音点を同じくする同調音的鼻音 *N-* であり, 語幹が母音で始まる場合は, *ny-* という形式が確認される (*ny-ama* 「肉」). また, 借用語を中心に \emptyset - で現れるものも少なくない.

- (33) SM.9: \emptyset -*shubá* *ĩ-she ≠ u-a /ĩsheuwa/*
 CPx.9-‘bottle’ SM.9-FUT1 ≠ ‘fall’-F
 「ビンは落ちるだろう」 Chupa itaanguka.
- SM.10: \emptyset -*shubá* *sĩ-she ≠ u-a /sĩsheuwa/*
 CPx.10-‘bottle’ SM.10-FUT1 ≠ ‘fall’-F
 「ビン (複) は落ちるだろう」 Chupa zitaanguka.
- (34) SM.A.9: \emptyset -*shubá* *ĩ-ā ≠ u-a /yáúwa/*
 CPx.9-‘bottle’ SM.9-ANT ≠ ‘fall’-F
 「ビンが落ちた」 Chupa imeanguka.
- SM.A.10: \emptyset -*shubá* *si-ā ≠ u-a /sáúwa /*
 CPx.10-‘bottle’ SM.10-ANT ≠ ‘fall’-F
 「ビン (複) が落ちた」 Chupa zimeanguka.
- (35) OM.9: *ngí-le-i ≠ lóli-a /ngíleilólya/* \emptyset -*shubá*
 SM.1sg-PST1-OM.9 ≠ ‘see’-F CPx.9-‘bottle’
 「私はビンを見た」 Niliiona chupa.
- OM.10: *ngí-le-si ≠ lóli-a /ngílesilólya/* \emptyset -*shubá*
 SM.1sg-PST1-OM.10 ≠ ‘see’-F CPx.10-‘bottle’
 「私はビン (複) を見た」 Nilizona chupa.
- (36) DEM.N.9: \emptyset -*shubá* *y^(t) [çubâ:(j)^tí]*
 CPx.9-‘bottle’ DEM.N.9
 「このビン」 Chupa hii.
- DEM.N.10: \emptyset -*shubá* *s^(t) [çubâ:s^tí]*
 CPx.10-‘bottle’ DEM.N.10
 「これらのビン (複)」 Chupa hizi.
- (37) DEM.M.9: \emptyset -*shubá* *y^(t) ó*
 CPx.9-‘bottle’ DEM.M.9
 「そのビン」 Chupa hiyo.
- DEM.M.10: \emptyset -*shubá* *s^(t) ó*
 CPx.10-‘bottle’ DEM.M.10
 「それらのビン (複)」 Chupa hizo.

- (38) DEM.F.9: \emptyset -shubá $^{\prime}i\text{-}^{\prime}lá$
 CPx.9-‘bottle’ PPx.9-DEM.F
 「あのビン」 Chupa ile.
- DEM.F.10: \emptyset -shubá $s^{\prime}i\text{-}l^{\prime}á \sim si\text{-}lá$
 CPx.10-‘bottle’ PPx.10-DEM.F
 「あれらのビン (複)」 Chupa zile.
- (39) APx.9: \emptyset -shubá $^{\prime}ng^{\prime}\text{-}sh^{\prime}á \sim ng^{\prime}\text{-}shá$
 CPx.9-‘bottle’ APx.9-‘good’
 「よいビン」 Chupa nzuri.
- APx.10: \emptyset -shubá $^{\prime}ng^{\prime}\text{-}sh^{\prime}á \sim ng^{\prime}\text{-}shá$
 CPx.10-‘bottle’ APx.10-‘good’
 「よいビン」 Chupa nzuri.
- (40) EPx.9: \emptyset -shubá $i\text{-}imú /imú/$
 CPx.9-‘bottle’ EPx.9-‘one’
 「ひとつのビン」 Chupa moja.
- EPx.10: \emptyset -shubá $i\text{-}vílí$
 CPx.10-‘bottle’ EPx.10-‘two’
 「ふたつのビン (複)」 Chupa mbili.

形式的には、次のような点が指摘される。OM は、いずれも高音調を有していると考えてよさそうである。APx ng^{\prime} - は成節的である。一致接辞の形式的な異同については、cl.9 で、CPx (N -, \emptyset -) \neq APx (ng^{\prime} -) \neq PPx (i -) = EPx (i -), cl.10 で、CPx (N -, \emptyset -) \neq APx (ng^{\prime} -) \neq PPx (si -) \neq EPx (i -) となり、形式のばらつきが著しい。

4.6 11/10 クラス

cl.11 のCPxは、バントゥ祖語ではともに $*du$ - という形が再建されている (cf. Meeussen 1967)。その複数形は、一般にcl.10 の系列の活用を見せるが、その点はロンボ語も同様である。ただし、そのような言語の場合、CPxも (cl.9 と同形の) cl.10 のそれに交替する¹⁴か、あるいはcl.9 とは異なる形式のcl.11 の複数形専用のCPxに交替すると¹⁵いう現象が認められるが、ロンボ語の場合は、CPxはcl.11 のそれと同形であることが多い。つまり、cl.9/10 同様、cl.11/10 も単複同形ということになる。以下では、cl.11 の形式の一致パターンのみ示す。

¹⁴ e.g. スワヒリ語 : $u\text{-}bao$ 「板 (単, cl.11)」, $\emptyset\text{-}bao$ 「板 (複, cl.10)」。スワヒリ語の cl.9/10 の CPx は、ともに N - ないし \emptyset -。

¹⁵ e.g. ルワ語 (E61) : $u\text{-}lumi$ 「舌 (単, cl.11)」, $nju\text{-}lumi$ 「舌 (複, cl.10)」ルワ語の cl.9/10 の CPx は、ともに N - ないし \emptyset -。この nju - という CPx を有するクラスを、"cl.10a" と呼ぶ向きもある (cf. Philippson and Montlahuc 2003)。

- (41) SM.11: *u-báo* *ú-she ≠ u-a /úsheuwa/*
 CPx.11-‘board’ SM.11-FUT1 ≠ ‘fall’-F
 「板は落ちるだろう」 Ubao utaanguka.
- (42) SM.A.11: *u-báo* *u-ā ≠ u-a /wáuwa/*
 CPx.11-‘board’ SM.11-ANT ≠ ‘fall’-F
 「板が落ちた」 Ubao umeanguka.
- (43) OM.11: *ngí-le-u ≠ lóli-a /ngíleulólya/* *u-báo*
 SM.1sg-PST1-OM.11 ≠ ‘see’-F CPx.11-‘board’
 「私は板を見た」 Niliuona ubao.
- (44) DEM.N.11: *u-báo* *wú*
 CPx.11-‘board’ DEM.N.11
 「この板」 Ubao huu.
- (45) DEM.M.11: *u-báo* *wó (~/ubaó w’ó/)*
 CPx.11-‘board’ DEM.M.11
 「その板」 Ubao huó.
- (46) DEM.F.11: *u-baó* *ú-l’á*
 CPx.11-‘board’ PPx.11-DEM.F
 「あの板」 Ubao ile.
- (47) APx.11: *u-baó* *ú-sh’á ~ u-shá*
 CPx.11-‘board’ APx.11-‘good’
 「よい板」 Ubao mzuri.
- (48) EPx.11: *u-baó* *ú-imú /ú’mú/*
 CPx.11-‘board’ EPx.11-‘one’
 「ひとつの板」 Ubao moja.

形式的には、次のような点が指摘される。OM は、高音調を有していると考えてよさそうである。一致接辞の形式的な異同については、CPx (u-) = APx (u-) = PPx (u-) = EPx (u-) と一貫して同形式をとる。また 4.2 で言及したとおり、しばしば cl.11 名詞（つまり、CPx u- が接合した名詞）が、cl.3 の一致のパラダイムにしたがう現象が確認されている。

4.7 12/8 (13) クラス

cl.12 の CPx は、バントゥ祖語では *ka- という形が再建されている (cf. Meeussen 1967)。これに相当するロンボ語の形式は ka- であるが、これは専ら派生概念「指小 (diminutive)」を表わす派生接頭辞として用いられ、接合する名詞の CPx に外接される。すなわち、構造としては CPx が二重に接合される形をとる (cf. 4.10)。対応する複数形は cl.8 であり、cl.12/8 という単複対応は、他のバントゥ語でも

広く認められる ; *ka-m-baka* 「小猫 (単, cl.12)」, *fi-m-baka* 「小猫 (複, cl.8)」, cf. *m-baka* 「猫 (単複, cl.9/10)」. また, cl.13 も, cl.12 に対応する複数クラスであるが, これは (cl.12 の単純な複数というよりは) より具体的な派生概念を表わすようである (cf. 4.8).

- (49) SM.12: *ka-m-baka* *ká-she* ≠ *shaf'ú*³*k-a*
 CPx.12-CPx.9-‘cat’ SM.12-FUT1 ≠ ‘be dirty’-F
 「子猫は汚れるだろう」 Paka mdogo (kapaka) atachafuka.
- (50) SM.A.12: *ka-m-baka* *ka-ā* ≠ *shaf'ú*³*k-a* / *káshaf'ú*³*ka*/
 CPx.12-CPx.9-‘cat’ SM.12-ANT ≠ ‘be dirty’-F
 「子猫は汚れた」 Paka mdogo (kapaka) amechafuka.
- (51) OM.12: *ngí-le-ka* ≠ *lóli-a* / *ngílekálólya*/ *ka-m-báka*
 SM.1sg-PST1-OM.12 ≠ ‘see’-F CPx.12-CPx.9-‘cat’
 「私は子猫を見た」 Nilimwona paka mdogo (kapaka).
- (52) DEM.N.12: *ka-m-báka* *ka*
 CPx.12-CPx.9-‘cat’ DEM.N.12
 「この子猫」 Paka mdogo (kapaka) huyu.
- (53) DEM.M.12: *ka-m-báka* *ko*
 CPx.12-CPx.9-‘cat’ DEM.M.12
 「その子猫」 Paka mdogo (kapaka) huyo.
- (54) DEM.F.12: *ka-m-báka* *ká-l'á*
 CPx.12-CPx.9-‘cat’ PPx.12-DEM.F
 「あの子猫」 Paka mdogo (kapaka) yule.
- (55) APx.12: *ka-m-baka* *ká-sh'á*
 CPx.12-CPx.9-‘cat’ APx.12-‘good’
 「よい子猫」 Paka mdgo (kapaka) mzuri.
- (56) EPx.12: *ka-m-baka* *ka-imú* / *kaám'ú*/
 CPx.12-CPx.9-‘cat’ EPx.12-‘one’
 「一匹の子猫」 Paka mdogo (kapaka) mmoja.

形式的には, 次のような点が指摘される. OM は, 高音調を有していると考えてよさそうである. 一致接辞の形式的な異同については, CPx (*ka-*) = APx (*ka-*) = PPx (*ka-*) = EPx (*ka-*) と一貫して同形式をとる.

4.8 13 クラス

cl.13 の CPx は, バントゥ祖語では **tu-* という形が再建されている (cf. Meeussen 1967). これに相当するロンボ語の形式は *du-* である. これは, 専ら派生クラスとして用いられる cl.12 に対応する複数クラスのひとつということになるが, もう一方の対応クラスである cl.8 とはやや含意が異なり, cl.13

の派生概念は「小さなモノの集合体，ひとまとまり」といった意味（集合複数）になるようである；e.g. *du-Ø-karanga* 「(一袋の) 落花生 (*Ø-karanga*)」。以下に示す *du-m-ba* の例も，*m-ba* 「部屋，家」の複数というよりは「一つの建物（全体）を構成する（小）部屋の集合」というような含意があるようである。

- (57) SM.13: *du-m-ba* *dú-she ≠ shaf'ú'k-a*
 CPx.13-CPx.9-'room, house' SM.13-FUT1 ≠ 'be dirty'-F
 「小部屋（複）は汚れるだろう」 *vyumba vidogo vitachafuka*.
- (58) SM.A.13: *du-m-ba* *du-ā ≠ shaf'ú'k-a / dwáshaf'ú'ka/*
 CPx.13-CPx.9-'room, house' SM.13-ANT ≠ 'be dirty'-F
 「小部屋（複）が汚れた」 *Vyumba vidogo vimechafuka*.
- (59) OM.13: *ngí-le-du ≠ lóli-a / ngíledulólya/* *du-i-rúu*
 SM.1sg-PST1-OM.13 ≠ 'see'-F CPx.13-CPx.5-'banana'
 「私は小さいバナナ（の一房）を見た」 *Nilizona ndizi ndogo*.
- (60) DEM.N.13: *d'ú-m-ba* *d'ú'*
 CPx.13-CPx.9-'room, house' DEM.N.13
 「これらの小部屋（複）」 *Vyumba vidogo hivi*.
- (61) DEM.M.13: *d'ú-m-ba* *d'ó'*
 CPx.13-CPx.9-'room, house' DEM.M.13
 「それらの小部屋（複）」 *Vyumba vidogo hivyo*.
- (62) DEM.F.13: *d'ú-m-ba* *dú-l'á*
 CPx.13-CPx.9-'room, house' PPx.13-DEM.F
 「あれらの小部屋（複）」 *Vyumba vidogo vile*.
- (63) APx.13: *du-m-ba* *dú-sh'á*
 CPx.13-CPx.9-'room, house' APx.13-'good'
 「よい小部屋（複）」 *Vyumba vidogo vizuri*
- (64) EPx.13: *du-m-ba* *du-vílí*
 CPx.13-CPx.9-'room, house' EPx.13-'two'
 「ふたつの小部屋」 *Vyumba vidogo viwili*.

形式的には，次のような点が指摘される。OM は，高音調を有していると考えてよさそうである。一致接辞の形式的な異同については，CPx (*du-*) = APx (*du-*) = PPx (*du-*) = EPx (*du-*) と一貫して同形式をとる。

4.9 16/17 クラス

cl.16/17 の CPx は，バントゥ祖語では **pa-*, **ku-* という形が再建されている (cf. Meeussen 1967)。これに相当するロンボ語の形式は *ha-*, *ku-* である。これらクラスは，これまで扱ったクラスとは性質が異なる。まず，CPx *ha-* ないし *ku-* を接合した名詞は，「場所」という意味そのものを示す *ha-ndu*, *ku-ndu*

のみであり、その語幹 *-ndu* (交替形 *-ndo*) は「存在」といった意味の、きわめて抽象的な語である。つまり、CPx としては実質的には用いられていないということになる。では、どのように用いられるかと言えば、場所名詞化接辞 (LOC) *-(i)ni* によって「場所名詞化」した名詞の、一致クラスとして用いられるわけである；*Ø-kasi* (CPx.9-'work') 「仕事」、*Ø-kasi-ni* (CPx.9-'work'-LOC) 「仕事をする場所、仕事場」＝場所名詞化、*Ø-kasi-ni##kw-angu* (CPx.9-'work'-LOC##PPx.17-POSS.1sg) 「私の仕事場」、cf. *Ø-kasi##y-angu* (CPx.9-'work'##PPx.9-POSS.1sg) 「私の仕事」。つまり、CPx は用いないが、*-(i)ni* によって場所名詞化した名詞は、cl.16 ないし cl.17 に属する名詞ということになる。

また、cl.16 と 17 の違いは、単複の違いではない。両者ともに、基本概念としては「場所」の意味であるが、cl.16 が (情報的な意味で) 特定の (つまり、聞き手と話し手の間で具体的な指示対象が共有されている) 空間を指すのに対し、cl.17 はより一般的な、あるいは広がりのある空間 (あるいはそういうものとして捉えられた空間) を指す。スワヒリ語では、さらに「内部空間」を示す cl.18 があるが、ロンボ語には認められない (cf. 2.3)。

- (65) SM.16: *ha-ndu* *á-she ≠ shaf'ú'k-a*
 CPx.16-'entity' SM.16-FUT1 ≠ 'be dirty'-F
 「(その) 場所は汚れるだろう」 Mahali patachafuka.
- SM.17: *ku-ndu* *kú-she ≠ shaf'ú'k-a*
 CPx.17-'entity' SM.17-FUT1 ≠ 'be dirty'-F
 「あたりは汚れるだろう」 Mahali kuchafuka.
- (66) SM.A.16: *ha-ndu* *a-á ≠ sháf'ú'k-a /asháf'ú'ka/*
 CPx.16-'entity' SM.9-ANT ≠ 'be dirty'-F
 「(その) 場所は汚れた」 Mahali pamechafuka.
- SM.A.17: *ku-ndu* *ku-á ≠ sháf'ú'k-a /kwasháf'ú'ka/*
 CPx.17-'entity' SM.10-ANT ≠ 'be dirty'-F
 「あたりは汚れた」 Mahali kumechafuka.
- (67) OM.16: *ngí-le-a ≠ lóli-a /ngílealólya/* *há-ndu*
 SM.1sg-PST1-OM.9 ≠ 'see'-F CPx.16-'entity'
 「私は (その) 場所を見た」 Nilipaona mahali.
- OM.17: *ngí-le-ku ≠ lóli-a /ngílek(u)lólya/* *kú-ndu*
 SM.1sg-PST1-OM.10 ≠ 'see'-F CPx.17-'entity'
 「私はあたりを見た」 Nilikuona mahali.
- (68) DEM.N.16: *há-ndu* *h'á'* [hânru h'á ~ hân'r'ú ha]
 CPx.16-'entity' DEM.N.16
 「この場所」 Mahali hapa.
- DEM.N.17: *ku-ndu* *k'ú'* [kûnru k'ú ~ kûnr'ú ku]
 CPx.17-'entity' DEM.N.17
 「このあたり」 Mahali huku.

- (69) DEM.M.16: *há-ndu* *h'ó* [hânru h'ó ~ hân'r'ú ho]
 CPx.16-‘entity’ DEM.M.16
 「その場所」 Mahali hapo.
- DEM.M.17: *ku-ndu* *k'ó* [kûnru k'ó ~ kûnr'ú ko]
 CPx.17-‘entity’ DEM.M.17
 「そのあたり」 Mahali huko.
- (70) DEM.F.16: *ha-ndu* *há-l'á*
 CPx.16-‘entity’ PPx.16-DEM.F
 「あの場所」 Mahali pale.
- DEM.F.17: *ku-ndu* *kú-l'á*
 CPx.17-‘entity’ PPx.17-DEM.F
 「あのあたり」 Mahali kule.
- (71) APx.16: *ha-ndu* *a-shá*
 CPx.16-‘entity’ APx.16-‘good’
 「よい場所」 Mahali pazuri.
- APx.17: *ku-ndu* *ku-shá*
 CPx.17-‘entity’ APx.17-‘good’
 「よいあたり」 Mahali kuzuri

形式的には、次のような点が指摘される。OM は、いずれも高音調を有していると考えてよさそうである。指示詞については、例えば cl.17 の近称 *ku* に、場所名詞化接辞を接合した *ku-ni* という形式で、「この場所、このあたり」という名詞を作ることも可能である (cf. 11.2 (3))。一致接辞の形式的な異同については、cl. 16 で、CPx (*ha-*) ≠ APx (*a-*) = PPx (*a-*) = EPx (*a-*), cl.17 で、CPx (*ku*) = APx (*ku*) = PPx (*ku*) = EPx (*ku*) となる。

4.10 名詞クラスの派生用法

すでに扱ったように、cl.12 およびその複数としての cl.8 および cl.13 は、「小さい、かわいらしい」といった派生的意味、すなわち「指小」の概念を付加的に表示する。一方、「大きい、偉大な」といった「指大」の概念は、cl.5/6 によって表示される。

(72)	[default]	[dim.]	[aug.]
sg.	<i>ki-du</i> / <i>kdu</i> / ¹⁶ CPx.7 (<15)-‘ear’ 「耳」	<i>ká-ki-du</i> / <i>kákdu</i> / CPx.12-CPx.7-‘ear’ 「小 (さい) 耳」	<i>í-ki-du</i> / <i>íkdu</i> / CPx.5-CPx.7-‘ear’ 「大 (きい) 耳」
pl.	<i>fí-du</i> CPx.8-‘ear’ 「耳 (複)」	<i>fí-ki-du</i> / <i>fíkdu</i> / CPx.8-CPx.7-‘ear’ 「小 (さい) 耳 (複)」	<i>má-du</i> CPx.6-‘ear’ 「大 (きい) 耳 (複)」
(73)	[default]	[dim.]	[aug.]
sg.	<i>n-deke</i> CPx.9-‘bird’ 「鳥」	<i>ká-n-deke</i> CPx.12-CPx.9-‘bird’ 「小 (さい) 鳥」	<i>í-n-deke</i> CPx.5-CPx.9-‘bird’ 「大 (きい) 鳥」
pl.	<i>n-deke</i> CPx.10-‘bird’ 「鳥 (複)」	<i>fí-n-deke</i> CPx.8-CPx.9-‘bird’ 「小 (さい) 鳥 (複)」	<i>má-n-deke</i> CPx.6-CPx.9-‘bird’ 「大 (きい) 鳥 (複)」
(74)	[default]	[dim.]	[aug.]
sg.	<i>ki-ndo</i> / <i>kndo~ng’ndo</i> / CPx.7-‘entity’ 「モノ」	<i>ka-ng’ndo</i> CPx.12-CPx.7-‘entity’ 「小 (さい) モノ」	<i>i-ng’ndo</i> CPx.5-CPx.7-‘entity’ 「大 (きい) モノ」
pl.	<i>fí-ndo</i> CPx.8-‘entity’ 「モノ (複)」	<i>fí-ng’ndo</i> CPx.8-CPx.7-‘entoty’ 「小 (さい) モノ (複)」	<i>ma-ng’ndo</i> CPx.6-CPx.7-‘entity’ 「大 (きい) モノ (複)」
(75)	[default]	[dim.]	[aug.]
sg.	<i>m’-ndu</i> CPx.1-‘entity’ 「人間」	<i>ka-m’-ndu</i> CPx.12-CPx.1-‘entity’ 「小 (さい) 人」	<i>i-m’-ndu</i> CPx.5-CPx.1-‘entity’ 「大 (きい) 人」
pl.	<i>va-ndu</i> CPx.2-‘entity’ 「人間 (複)」	<i>fí-m’-ndu</i> CPx.8-CPx.1-‘entity’ 「小 (さい) 人 (複)」	<i>ma-m’-ndu</i> CPx.6-CPx.1-‘entity’ 「大 (きい) 人 (複)」

上例では、(72) *mádu* だけが例外的であるが、原則として、派生クラスの CPx は、被派生名詞の CPx に外接される、すなわち二重接頭辞構造をとる。また、被派生名詞の CPx は、指示対象が複数であっても単数のままである。すなわち、名詞全体の複数性は、原則として外接された派生クラスの CPx によって表示される。

¹⁶ 通時的な観点で言えば **ku-du* (cl.15) であったと考えられるが、共時的には *u* の脱落によって、CPx.7 と同音となり、また複数形が cl.8 であるという体系的要因も作用して、cl.7 扱いになっていると考えられる。

また、詳細な含意としては、cl.5/6の派生概念としては、単に物理的に大きいだけではなく、「偉大」という価値判断が含まれたり、あるいは通常のものとは異なる (*extraordinary*)、「異形」、「異様」といった意味合いを表わすこともあるという。このような否定的な含意は、指小の概念では cl.7/8 が表示することがおおく、cl.12は、常に「かわいらしい」といった肯定的な含意を意味するようである。

4.11 まとめ

以上概観した各クラスの特徴から、一致形式のみを抽出してまとめれば、次のようになる。

表 4-1：名詞クラスに関する一致形式一覧

	cl.1	cl.2	cl.3	cl.4	cl.5	cl.6	cl.7	cl.8	
CPx	<i>m'</i> -	<i>va</i> -	<i>m'</i> -	<i>mi</i> -	<i>i</i> -/ \emptyset -	<i>ma</i> -	<i>ki</i> - (> <i>k/_C</i>)	<i>fi</i> -	
SM (\approx PPx)	(<i>n</i>) <i>e</i> -	<i>ve</i> -	<i>u</i> -	<i>i</i> -	<i>li</i> -	<i>ya</i> -	<i>ki</i> -	<i>fi</i> -	
OM	<i>m'</i> -	<i>va</i> -	<i>u</i> -	<i>i</i> -	<i>li</i> -	(<i>y</i>) <i>a</i> -	<i>ki</i> -	<i>fi</i> -	
ASS	<i>wa</i>	<i>va</i>	<i>wa</i>	<i>ya</i>	<i>la</i>	<i>ya</i>	<i>kya</i>	<i>fya</i>	
DEM	N	<i>shu</i>	<i>va</i>	<i>shu</i>	<i>yi</i>	<i>li</i>	<i>ya</i>	<i>ki</i>	<i>fi</i>
	M	<i>sho</i>	<i>vo</i>	<i>sho</i>	<i>yo</i>	<i>lo</i>	<i>yo</i>	<i>kyo</i>	<i>fyo</i>
	F	<i>ula</i>	<i>vala</i>	<i>ula</i>	<i>ila</i>	<i>lya</i>	<i>yala</i>	<i>kila</i>	<i>fila</i>
EPx	<i>u</i> -	<i>va</i> -	<i>u</i> -	<i>i</i> -	<i>li</i> -	<i>a</i> -	<i>ki</i> -	<i>fi</i> -	
APx	<i>m'</i> -	<i>va</i> -	<i>m'</i> -	<i>mi</i> -	<i>i</i> -	<i>ma</i> -	<i>ki</i> -	<i>fi</i> -	
	cl.9	cl.10	(cl.(3/)/10)	cl.11	cl.12	cl.13	cl.16	cl.17	
CPx	<i>N</i> -, \emptyset -	<i>N</i> -, \emptyset -	<i>m'</i> -	<i>u</i> -	<i>ka</i> -	<i>du</i> -	<i>ha</i> -	<i>ku</i> -	
SM (\approx PPx)	<i>i</i> -		<i>si</i> -	<i>u</i> -	<i>ka</i> -	<i>du</i> -	<i>a</i> -	<i>ku</i> -	
OM	<i>i</i> -		<i>si</i> -	<i>u</i> -	<i>ka</i> -	<i>du</i> -	<i>a</i> -	<i>ku</i> -	
ASS	<i>ya</i>		<i>sa</i>	<i>wa</i>	<i>ka</i>	<i>dwa</i>	<i>a</i>	<i>kwa</i>	
DEM	N	<i>yi</i>	<i>si</i>	<i>wu</i>	<i>ka</i>	<i>du</i>	<i>ha</i>	<i>ku</i>	
	M	<i>yo</i>	<i>so</i>	<i>wo</i>	<i>ko</i>	<i>do</i>	<i>ho</i>	<i>ko</i>	
	F	<i>ila</i>	<i>sila</i>	<i>ula</i>	<i>kala</i>	<i>dula</i>	<i>hala</i>	<i>kula</i>	
EPx	<i>i</i> -		<i>i</i> -	<i>u</i> -	<i>ka</i> -	<i>du</i> -	<i>a</i> -	<i>ku</i> -	
APx	<i>ng'</i> -		<i>ng'</i> -	<i>u</i> -	<i>ka</i> -	<i>du</i> -	<i>a</i> -	<i>ku</i> -	

5. 形容詞

5.1 構造上の分類

名詞修飾表現としては、次のようなタイプをあげることができる。

- | | | | | |
|-----|------------|-----------------|---------------------------|---|
| (1) | APx-stem: | <i>Ø-shuí</i> | <i>ng'-sáfi</i> | |
| | | CPx.10-'hair' | APx.10-'beautiful, clean' | |
| | | 「きれいな髪」 | | |
| (2) | ASS + N: | <i>ku-ndu</i> | <i>kwa</i> | <i>m'-ríke</i> |
| | | CPx.17-'entity' | ASS.17 | CPx.3-'warmness' |
| | | 「暖かい場所」 | | |
| (3) | ASS + INF: | <i>ma-shuí</i> | <i>ya</i> | <i>i ≠ telés-a</i> / <i>mashuí yeetelésa/</i> |
| | | CPx.6-'hair' | ASS.6 | INF ≠ 'slip'-F |
| | | 「滑らかな髪」 | | |
| (4) | #Adj: | <i>m'-ndu</i> | <i>goígoi</i> | |
| | | CPx.1-'entity' | 'coward, weak' | |
| | | 「弱い人」 | | |
| (5) | APx ≠ V-i: | <i>mi-dí</i> | <i>mi ≠ shimb-í</i> | |
| | | CPx.4-'tree' | APx.4-'swell'-STAT | |
| | | 「太い木」 | | |

構造的には、(2) および (3) は、属詞に（抽象）名詞ないし名詞化した動詞が後続するもので、形式としては一語の形容詞ではない。(4) のタイプは、形容詞接辞 (APx) をとらず、語幹そのままの形で現れる名詞修飾要素であり、スワヒリ語からの借用形式と見なせるものがほとんどである。ロンボ語の文法体系という観点から言えば（あるいはバントゥ語学という品詞分類においても、cf. Schadeberg 2003）、形容詞と分類する形式的基準は、語幹に APx が接合されて形成される語、ということになる。その意味では (1) と (5) がそれに該当するが、後者は動詞の状態形を語幹とするもので、語彙的な観点も含めて純粋な意味での形容詞というのは、(1) に限定されるということになる。

ここでは、まず (1) のパターンの純粋な形容詞について、各クラスとの一致の例を示していく。子音始まり語幹の例は、4章の各名詞クラスの文法的一致の例を参照されたい（形容詞語幹は *-sha*「よい」）。(6) は母音始まり語幹の例である。

- | | | | |
|-----|-------|---------------|-------------------------|
| (6) | cl.1: | <i>mw-aná</i> | <i>mw-angú /muangú/</i> |
| | | CPx.1-'child' | APx.1-'light' |
| | | 「軽い子ども」 | |

cl.2:	<i>va-aná /vaná/</i>	<i>va-angú</i>
	CPx.2-‘child’	APx.2-‘light’
	「軽い子どもたち」	
cl.5:	<i>i-wé</i>	<i>i-angú</i>
	CPx.5-‘stone’	APx.5-‘light’
	「軽い石」	
cl.6:	<i>ma-wé</i>	<i>ma-angú</i>
	CPx.6-‘stone’	APx.6-‘stone’
	「軽い石（複）」	
cl.9/10:	<i>Ø-shubá</i>	<i>ng'-angú /ng'aangú/</i>
	CPx.9-‘bottle’	APx.9-‘light’
	「軽いビン」	

形式的な特徴としては、APx と語幹の境界では、母音連続の融合が起こらないという点があげられる。したがって、cl.1 の形式は、APx は *m'* であり、それが母音前の環境で規則的に *mw-* となるが、APx 自体の長さが維持される必要があるため、実現上は *mu-* という形で現れる。また、cl.9/10 において、*/ng'aangú/* と語幹母音が長く実現しているのも、境界間の長さの維持のための調整とみてよいだろう。

また (7) は「すべての」という概念を表わす要素であり、クラス一致接頭辞に語幹が接合する構造をとっているが、その接頭辞は APx ではなく、PPx である (cl.4 および cl.10 の例を対照のこと)。したがって、ロンボ語の品詞分類を立てるならば、この形式は属詞や所有詞と同じカテゴリーに位置づけられることになる。ただし、これらの例でも (所有詞や属詞とは異なり) PPx と語幹の境界の音節長は維持されている。

(7) cl.2:	<i>va-aná /vaná/</i>	<i>va-osé /voosé/</i>
	CPx.2-‘child’	PPx.2-‘all, every’
	「すべての子ども」	
cl.4:	<i>mi-dí</i>	<i>i-osé /yoosé/</i>
	CPx.4-‘tree’	PPx.4-‘all, every’
	「すべての木」	
cl.6:	<i>ma-wé</i>	<i>ya-osé /yoosé/</i>
	CPx.6-‘stone’	PPx.6-‘all, every’
	「すべての石」	
cl.8:	<i>fi-ndo</i>	<i>fi-osé /fyoosé/</i>
	CPx.8-‘entity’	PPx.8-‘all, every’
	「すべてのモノ（複）」	

cl.10: *Ø-shubá* *si-osé /soosé/*
 CPx.10-‘bottle’ PPx.10-‘all, every’
 「すべてのビン（複）」

以上が、形容詞および形容詞相当要素の具体例ということになる。(5) にあげた、状態動词语幹に APx が接合する形式については、8.1.2.2 を参照されたい。

5.2 各タイプの具体例

以下では、5.1 に (1)–(5) として提示した名詞修飾要素の構造的タイプにしたがって、いくつかの語例を、被修飾名詞を伴った例とともに示す。

(1)-C: APx-[C...]stem

小さい／small／-dogo	-nana	e.g. <i>mi-dí mi-naná</i> 「小さい木」
高い，長い／high, long／-refu	-lei	e.g. <i>mi-dí mi-leí</i> 「高い／長い木」
低い，短い／low, short／-fupi	-fuhi	e.g. <i>midí mi-fuhí</i> 「低い／短い木」
明るい，白い／bright／-a nuru, -eupe	-hewa	e.g. <i>m-ba ng'-héwa</i> 「明るい部屋」
暗い，黒い／dark／-a giza, -eusi	-huu	e.g. <i>m-ba ng'-húu</i> 「暗い部屋」

(1)-V: APx-[V...]stem

たくさんの／many／-ingi	-ingi	e.g. <i>va-ndú va-íngi /veéngi/</i> 「たくさんの人々」, <i>fí-ndo fí-íngi</i> 「たくさんのモノ」
新しい／new／-pya	-hiya	e.g. <i>va-aná va-híyá /vaná va(h)íyá/</i> 「新しい子どもたち」

(1)-P: PPx-stem

他の／other／-ingine	-ingi	e.g. <i>va-ndú va-íngí /vandú veengí/</i> 「他の人々」, <i>mi-dí i-íngí /íngí/</i> 「他の木（複）」
------------------	-------	---

(2)-N: ASS + N

昔の／old／-a zamani	-a kasha	e.g. <i>fi-ndo fya kásh⁴á</i> 「昔のモノ (複)」
丸い／round／-a duara	-a duara	e.g. <i>i-tunda la dúara</i> 「丸い果実」
熱い／hot／-a mot'o	-a mot'o	e.g. <i>shái ya mót'o</i> 「熱いお茶」
冷たい／cold (weather...)／-a baridi	-a mbeho, -a baridi	e.g. <i>shái ya m-bého</i> 「冷たいお茶」
赤い／red／-ekundu	-a samu	e.g. <i>ki-ndo kya Ø-sámu /kndo kya sámu/</i> 「赤いモノ」

(2)-V: ASS + INF

痛い／sore, painful／-a kuumiza	-a ivavira	e.g. <i>ki-donda kya i≠vav-ír-a /kdonda kyeevavíra/</i> 「痛い (痛ませる) 傷」
いっぱい／full／yenye kujaa, tele	-a ishurwa basha	e.g. <i>ki-kombé kya í≠shur-w-a básha /kkombé kyeéshurwa básha/</i> 「いっぱいの (満ちた) コップ」
辛い／hot／-kali	-a isakya	e.g. <i>ki-laló kya í≠saki-a /klaló kyeésakya/</i> 「辛い食べ物」

(3): #Adj

善い／good／-ema, bora	#bora	e.g. <i>m'-ndu bóra</i> 「善い人」
正しい／right／sahihi	#sahihi	e.g. <i>va-ndu sahíhi</i> 「正しい人々」
違う／different／tofauti	#tafauti	e.g. <i>ki-ndo tafáuti</i> 「違うモノ」
さまざまな／various／mbalimbali	#mbalimbali	e.g. <i>va-ndu mbalimbáli</i> 「さまざまな人々」, <i>fi-ndo mbalimbáli</i> 「さまざまなモノ」

6. 動詞構造

6.1 動詞構造概説

6.1.1 膠着的構造

チャガ＝ロンボ語に限らずバントゥ諸語一般の動詞構造は、語彙的意味 (lexical meaning) を示す語幹を中心に、その前後に文法的な意味を示す接辞が一定の順序で接合される膠着的な (agglutinative) 構造をとる。主要な文法概念の多くが、これら接辞によって動詞構造内に集約的に表現されるため、動詞構造の形態論はバントゥ諸語の文法記述の中心的な位置を占めることになる。

ここでは、動詞構造の記述を行う前に、動詞構造の構成要素についての概略的な説明を示す。まず、バントゥ諸語一般の動詞構造は、概ね次のようなテンプレートに従う (例はいずれもスワヒリ語)。このテンプレートを構成するひとつひとつのセルを、文字どおりスロット (枠 slot) と呼ぶ。

表 6-1：動詞構造の形態論的テンプレート

	SM-	NEG2-	TAM-	(OM-)	≠ base	-DSuf	-F
例-1	<i>tu-</i>		<i>ta-</i>	<i>ku-</i>	≠ <i>nunu</i>	<i>-li</i>	<i>-a</i>
「私たちはあなた (のため) に買うだろう」							
例-2	<i>u-</i>	<i>si-</i>		<i>ni-</i>	≠ <i>ach</i>		<i>-e</i>
「(あなたは) 私を離さないで」							

6.1.2 主語接頭辞 (SM: Subject Marker)

主語接頭辞は、動詞の主語の人称・数/クラスをマークする要素である (言いかえれば、主語の人称・数/クラスとの文法的一致 (grammatical agreement) を示すマーカーである)。例-1 の主語接頭辞 *tu-* は、主語が 1 人称複数であることを示すマーカーであり、例-2 は、一種の命令 (依頼) の形であるが、主語接頭辞 *u-* によって、動詞「離す」*ach-a* の主語が 2 人称単数であることが示される。主語接頭辞は、(命令形等での一部の例外を除き) 動詞構造における必須要素である。

6.1.3 第二否定辞 (NEG2: Secondary Negative)

文否定は、例えばスワヒリ語の基本的な動詞構造 (F が *-a* で終わる: 直説法 *indicative*) の場合であれば、主語接頭辞の前に *ha-* という形式が接合した否定主語接頭辞で表現される (例-1 の否定形は、*ha-tu-ta-ku≠nunu-li-a*)。この *ha-* は、いわば第一否定辞 (*primary negative*) である。それに対し、例-2 の動詞構造 (F が *-e* で終わる: 接続法 *subjunctive*, 「～するように」といった意味に相当する) の場合、その否定は、SM の直後のスロットに *si-* という要素を入れることによって表示される。これを第二否定辞と呼ぶ。NEG2 は、接続法など一部の動詞構造においてのみ現れる否定形式である。

6.1.4 TA 接辞 (TAM: Tense-Aspect Marker)

動詞が表わす事態に関する時間概念には、時制 (*tense*) やアスペクト (*aspect*, 相) といったもの

がある。これをまとめて TA と略するが、TA 概念を表示する接辞を TA 接辞という。例-1 の *ta-* は未来時制を表わす要素である。スワヒリ語の場合は、原則として 1 つの動詞構造に 1 つの TA 接辞しかとることができないが、チャガ諸語の場合は、一般に複数の（多い場合は 4~5 個の）TA 接辞を接合することができる。また、このスロットには、厳密に言えば TA のみならず、（話し手の事態の「捉え方」に関する文法概念である）モダリティー（*modality*）を表わすものも含まれることがある。TA 接辞は（音形式をもたないゼロ形態 *zero morph* を含め）動詞構造における必須要素である。

6.1.5 目的語接頭辞（OM: Object Marker）

目的語接頭辞は、動詞の目的語の人称・数／クラスをマークする要素である（つまり、目的語の人称・数／クラスとの文法的な一致を示すマーカーである）。例-1 の目的語接頭辞 *ku-* は、目的語が 2 人称単数であることを示している。目的語接辞は、自動詞語幹であればそもそも現れえないし、他動詞語幹でも文構造によっては必須ではない（現れ方の規則性は言語によって異なる）。

6.1.6 語基（*base*）, 語幹（*stem*）

動詞の語彙的意味、つまり具体的な行為や状態を表わす要素を語幹という。その語幹から、使役（*causative*）や受動（*passive*）といった、名詞項との関係を表わす文法的な要素を取り去った、純粋な語彙的意味を表わす部分を語基という。語基は、（当然ながら）動詞構造における必須要素である。例-1 の「買う（*nunu*）」、例-2 の「離す（*ach*）」がこれに該当する。

語基は、他動詞性や分節素構造といったさまざまな基準で分類することが可能であるが、バントゥ諸語の場合、音調特性による分類も可能である。チャガ＝ロンボ語の場合、動詞語幹の音調プロパティはほとんど曖昧化しているが、声調の規則性がはっきりしている言語では、声調特性だけが異なる最小対（*tonal minimal pair*）が見出されることもしばしばである。

Rwa (E61) : *i ≠úr-a* [ju:rá] 「訊く、尋ねる（不定形）」 vs. *i ≠ur-a* [jur'a] 「買う（不定形）」

この例に見られるように、前者は語末で高音調が実現し、後者はそれが実現していない。つまり、高音調の有無のみによって、この二語は形式的に区別されるわけである。このとき、前者を H 動詞、後者を L 動詞と呼ぶことにする。また、この高音調は語彙的な意味の違いを表わすものであるから、語幹が有するプロパティと考えられる。つまり、この高音調は、語幹が有する高声調素（H）が右に一音節移動（*H tone shifting*）して実現したものと解釈される。また、H 動詞と L 動詞の対立を有するバントゥ語一般において、H の有無の対立は語幹初頭音節のみに認められる。

6.1.7 派生接尾辞（DSuf: Derivational Suffix）

動詞語基に接続して、名詞項とのさまざまな結合関係（*valency*, ないし格関係）を表示する接辞を派生接尾辞という。バントゥ諸語における代表的なものには、使役、受動、中動（*neuter*）、適用（*applicative*）、相互（*reciprocal*）等がある。例-1 の *li-* は適用の例である。これは、語基の要求する直接目的語とは異なる名詞項を、直接目的語として導入する形式で、導入された名詞項は、受益（*beneficiary*, 「～のため

に) や道具 (instrumental, 「～を使って」) といった意味役割を担う。例-1 の場合, 語基 *nunu(-a)* の直接目的語は, 「買う対象/モノ」であるが, 適用の *li-* が接合することで, それ以外の名詞, ここでは「買うことで恩恵を受けた人」, つまり受益の名詞 (ここでは 2 人称単数) を, 目的語として導入している (OM によってそれが明示されている)。

6.1.8 末尾辞 (F: Final Vowel)

動詞構造における必須要素のひとつで, 動詞構造を形式として完結させる要素。表わす概念は, いわゆる法 (mood) に相当する。例-1 の *-a* は直説法 (あるいは「デフォルト “default”」の形), 例-2 の *-e* は接続法を示す接尾辞である。

これら以外にも, 先頭の SM の前に現れる前接頭辞 (Pre-initial) や, F の後ろに現れる後末尾辞 (Post-final) 等の要素もあるが, 動詞構造の記述のための基本知識としては, ひとまず以上の各要素を理解しておけばよい。

6.2 主語接辞

6.2.1 形式的特徴

まず, 各人称および数に一致する主語接頭辞 (SM) の形式を確認する。文例は, 「～は家に向かっている」という意味で, TAM *i-* が後続している。また各名詞クラスの SM の形式は, 4 章各節を参照されたい。

(1)	SM.1sg:	<i>ngi-í ≠ end-a</i>	<i>kaá</i> [kāā]
	SM.2sg:	<i>u-í ≠ end-a</i>	<i>kaá</i> [kāā]
	SM.3sg:	<i>(n-)e-í ≠ end-a</i>	<i>kaá</i> [kāā]
	SM.1pl:	<i>du-í ≠ end-a</i>	<i>kaá</i> [kāā]
	SM.2pl:	<i>mu-í ≠ end-a</i>	<i>kaá</i> [kāā]
	SM.3pl:	<i>ve-í ≠ end-a</i>	<i>kaá</i> [kāā]
	gloss:	SM-PROGR ≠ 'go'-F	'home'
		「～は家に向かっている」	

SM は, いくつかの単母音からなる TAM が後続する場合, 母音融合を起こし単音節化する。(2) は, 完了 (ANT) の TAM *a-* が後続する例である。融合が生じることを示すために "◌" の記号を付す。

(2)	SM.A.1sg:	<i>ngi-ā ≠ shik-a</i>	<i>shúle</i>	<i>/ngáshika shúle/</i>
	SM.A.2sg:	<i>u-ā ≠ shik-a</i>	<i>shúle</i>	<i>/wáshika shúle/</i>
	SM.A.3sg:	<i>n-e-ā ≠ shik-a</i>	<i>shúle</i>	<i>/náshika shúle/</i>
	SM.A.1pl:	<i>du-ā ≠ shik-a</i>	<i>shúle</i>	<i>/dwáshika shúle/</i>
	SM.A.2pl:	<i>mu-ā ≠ shik-a</i>	<i>shúle</i>	<i>/mwáshika shúle/</i>

SM.A.3pl: *ve-ā ≠ shik-a* *shúle* /*váshika shúle/*
gloss: SM-ANT ≠ 'arrive at'-F 'school'
「～は学校に到着した」

母音融合が生じる TAM には、ほかに習慣 (HAB) の *e-* がある (cf. 9 章). さらに 4.1 で指摘したとおり, cl.1 (すなわち「人間」を指示する 3 人称単数) の SM に関しては, 「言明」(ASSERT) のマーカー *n-* が共起する場合がある.

- (3) AFF-1: *n-e-í ≠ end-a* *duká-ni*
ASSERT-SM.3.sg-PROGR ≠ 'go'-F 'shop'-LOC
- AFF-2: *e-í ≠ end-a* *duká-ni*
SM.3.sg-PROGR ≠ 'go'-F 'shop'-LOC
「彼 (女) は店に向かっている」
- NEG: *e-ǀ ≠ end-a* *duká-n'í* *ku*
SM.3.sg-PROGR ≠ 'go'-F 'shop'-LOC NEG
「彼 (女) は店に向かっていない」
cf. **neienda dukani ku*
- INTERROG: *e-í ≠ end-a* *duká-ni?*
SM.3.sg-PROGR ≠ 'go'-F 'shop'-LOC
「彼 (女) は店に向かっている?」
cf. **neienda dukani?*

基本的には, 平叙肯定文で *n-* が現れ, それ以外では現れない, ということであるが, 平叙文でも *n-* が共起しない例も確認されている. *n-* が共起する形態統語的, あるいは意味のないし情報構造的な条件については, より詳細な調査が必要である¹⁷.

以上概観した人称および数に一致する SM の形式は次のようにまとめられる.

表 6-2 : 人称・数別主語接頭辞一覧

	単数		複数	
	SM	SM- <i>a</i> (ANT)	SM	SM- <i>a</i> (ANT)
1 人称	<i>ngi-</i>	<i>nga-</i>	<i>du-</i>	<i>dwa-</i>
2 人称	<i>u-</i>	<i>wa-</i>	<i>mu-</i>	<i>mwa-</i>
3 人称	<i>(n-)e-</i>	<i>(n-)a-</i>	<i>ve-</i>	<i>va-</i>

¹⁷ 若い世代になるにつれ, この *n-* の使い分けが曖昧化しているようであり, このような, ある種の単純化の現象を目の当たりにするのも, バントゥ系の民族語を調査する上での一つの現実である.

6.2.2 文法的一致に関する規則

バントゥ諸語一般において、SMの文法的一致にまつわる現象として注意すべきは次の2点である；

- 1) 主語名詞との一致において、名詞クラスのみが唯一的な基準であるか（機械的一致 *mechanical agreement*），あるいは意味的な調整が行われるか（意味的一致 *semantic agreement*），2) 主語名詞項が（等位関係で）並列された場合、どのクラスで一致するか。

6.2.2.1 主語名詞が一語の場合

まず、1) について見ていく。バントゥ諸語文法の基本原則である「名詞クラスを文法カテゴリーとする文法的一致」の原則でいえば、主語名詞のクラスがそのまま動詞の側でSMによって表示されるのが当然であるように思われる（これを機械的一致という）。しかし、例えば（標準）スワヒリ語においては、主語名詞が有生（*animate*）である場合、主語名詞のクラスの如何に関わらず、単数であれば *cl.1*，複数であれば *cl.2* に一致する。(4a) のスワヒリ語対訳文 *M(CPx.9)-bwa###a(SM.1)-me ≠ anguk-a* 「犬が落ちた」では、*Mbwa* 「犬」は *cl.9* 名詞であるが、動詞の側のSMは *a-*，すなわち *cl.1* のSMが接合される（SM.9は *i-*）。つまり、「主語名詞の有生性」という意味的な基準による調整が行われ、一致クラスが変更されるわけである。これを意味的一致という。

- (4) a. *i-kité* *lí-á ≠ u-a /láúwa/*
 CPx.5-‘dog’ *SM.5-ANT ≠ ‘fall’-F*
 「犬が落ちた」 *Mbwa ameanguka.*
 * *i-kite a-a ≠ u-a*
- b. *ka-mw-aná* *kǎ-i ≠ li-a /káilya ~ kéelya/*
 CP.12-CP.1-‘child’ *SM.12-PROGR ≠ ‘cry’-F*
 「かわいい子どもが泣いている」 *Mtoto mdogo (katoto) analia.*
 * *ka-mw-ana (n-)e-i ≠ u-a*

ロンボ語においては、主語名詞が一語である場合は、スワヒリ語におけるような意味的一致は行われず、機械的に主語名詞のクラスに一致するということである。このことは、派生名詞においても同様であり、被派生名詞のクラスではなく、派生概念を表わす外接CPx ((4b)では *cl.12*) のほうに一致する。

6.2.2.2 主語名詞が並列する場合

次に2)の問題、つまり主語名詞が等位接続関係で並列する場合に、どのクラスと一致するのか、またその際に有生性などによる意味的な調整が関与するのか、という点を見る。

- (5) a. *cl.1 × cl.1:* *m’-meéku* *na* *mw-aná* *ve-í ≠ t’et’-a*
 CPx.1-‘old (man)’ ‘and’ *CPx.1-‘child’* *SM.2-PROGR ≠ ‘talk’-F*
 「老人と子どもが話している」
- b. *cl.1 × cl.9 [+a]:* *mw-aná* *na* *m-baká* *vě-i ≠ tem-an-a*

- CPx.1-‘child’ ‘and’ CPx.9-‘cat’ SM.2-PROGR ≠ ‘play’-RECIP-F
「子どもと猫と一緒に遊んでいる」
- c. cl.9 [+a] × cl.5 [+a]: *m-baká na i-kité vé-i ≠ dish-ír-an-a*
CPx.9-‘cat’ ‘and’ CPx.5-‘dog’ SM.2-PROGR ≠ ‘run’-CAUS-RECIP-F
「猫と犬が追いかけてっこしている」
- d. cl.5 [+a] × cl.9 [-a]: *i-kité na Ø-píkíki fí ≠ gong-an-a*
CPx.5-‘dog’ ‘and’ CPx.9-‘motorbike’ SM.8 ≠ ‘crash’-RECIP-F
「犬とバイクがぶつかる」
- e. cl.9 [-a] × cl.5 [+a]: *Ø-píkíki ná i-kité fí ≠ gong-an-a*
CPx.9-‘motorbike’ ‘and’ CPx.5-‘dog’ SM.8 ≠ ‘crash’-RECIP-F
「バイクと犬がぶつかる」
- f. cl.9 [-a] × cl.5 [-a]: *Ø-píkíki ná i-karí fí ≠ kumb-w-a*
CPx.9-‘motorbike’ ‘and’ CPx.5-‘dog’ SM.8 ≠ ‘sell’-PASS-F
Ø-píkíki ná i-karí sí ≠ kumb-w-a
CPx.9-‘motorbike’ ‘and’ CPx.5-‘dog’ SM.10 ≠ ‘sell’-PASS-F
「バイクと車が売られている」

(5a) から、意味的に有生であり、かつ形式的に cl.1 である名詞が並列する場合は、SM は対応する複数クラス、すなわち cl.2 で一致することが確認される。一方で (5b) は、形式的には異なるクラスに属するが、ともに意味的に有生であるという場合である。この場合も cl.2 で一致するということは、ここで意味的な調整が働いているということになる。形式的にともに cl.1/2 ではない名詞が並列する (5c) の例もあわせて、主語名詞が二語並列される場合は、有生性による意味的一致のメカニズムにしたがうということになる。

(5d), (5e) は、所属クラスが異なり、かつ有生性も異なる二語が並列する場合である。この場合は、いずれの語順であっても、cl.8 のSMで一致しており、(例には載せていないが) cl.10 での一致も可能なようである(ただし (5f) のような、ともに無生物という例に比べると、やや容認度が落ちるようである)。このcl.8 およびcl.10 での一致というパターンは、所属クラスが異なり、ともに無生物の主語が並列する (5f) の例でも確認される。つまり、主語名詞が二語並列される構造では、所属クラスに関わらず、ともに有生である場合は、意味的一致のメカニズムにしたがってcl.2 で一致し、それ以外の場合はcl.8 ないしcl.10 での一致に収斂されているようである¹⁸。

¹⁸ cl.7 名詞が並列されれば (cl.10 ではなく) cl.8 が優先され、cl.9 名詞が並列すれば cl.10 が優先されるというような傾向は認められる。それ以外のクラスの、同じクラスの無生物名詞が並列する場合については、cl.8 ないしcl.10 以外の一一致も認められるようであるが、容認度が分かれるようである。

表 6-3 : 主語名詞項との一致のメカニズム

主語	主語の有生性	一致形式
S = N _{cl,x}	[-anim]	SM _{cl,x}
	[+anim]	SM _{cl,x} (mechanical agr.)
S = N1 na N2	N1 [+anim] + N2 [+anim]	SM _{cl,2} (semantic agr.)
	otherwise	SM _{cl,8} or SM _{cl,10}

6.3 目的語接辞

6.3.1 分節素レベルの特徴

人称および数に一致する目的語接辞 (OM) の形式は、次のとおりである。各名詞クラスに一致する OM については、4 章各節を参照されたい。

- (6) a. OM.1sg: *ú-ng' ≠ l'á-á*
SM.2sg-OM.1sg ≠ 'call'-F
「あなたは私を呼ぶ」
- b. OM.2sg: *ngí-ku ≠ kund-í /ngíkkundí/*
SM.1sg-OM.2sg ≠ 'love'-STAT
「私はあなたが好きです」
- c. OM.3sg: *ngí-m' ≠ s'á'idi-a*
/ngím's'á'idya/
SM.1sg-OM.3sg ≠ 'help'-F
「私は彼 (女) を助ける」
- d. OM.1pl: *vé-du ≠ kamát'-a* *hospitali-ni*
SM.3pl-OM.1pl ≠ 'take'-F 'hospital'-LOC
「彼らは私たちを病院に連れて行く」
- e. OM.2pl: *dú-ku ≠ saku-eni /dúksakuéni/*
SM.1pl-OM.2.sg ≠ 'watch'-F.PL
- f. OM.2pl: *dú-mu ≠ saku-a /dúmusakwa/*
SM.1pl-OM.2.pl ≠ 'watch'-F
「私たちはあなたたちをじっと見る」
- g. OM.3pl: *ngí-va ≠ táfut-a*
SM.1sg-OM.3pl ≠ 'look for'-F
「私は彼らを探している」

- h. OM.REF: *ngí-ku ≠ kund-í /ngíkkundí/*
 SM.1sg-OM.REF ≠ 'love'-STAT
 「私はあなたが好きです」

形式的には、2 人称複数において、2 つの形式が並存しているという点を指摘する必要がある。(6e) の形式は、2 人称単数の OM *ku-* を接合したうえで、末尾辞 *-a* を *-eni* に交替する形式である。形態論的には、末尾辞 *-a* に「聞き手複数」を示す *-(i)ni* が後続すると分析するのがより厳密であろう。このタイプの、機能を分割して表示する形式は、スワヒリ語のいくつかの方言で認められる。一方で、(6f) の *mu-* は、他のチャガ諸語で一般に認められる形である。以上の形式をまとめると次のようになる。

表 6-4：人称・数別目的語接頭辞一覧

	単数	複数
1 人称	<i>ng'-</i>	<i>dú-</i>
2 人称	<i>k(u)-</i>	<i>mú-</i> <i>k(u)-[≠ stem]-eni</i>
3 人称	<i>m-</i>	<i>vá-</i>
再帰	<i>k(u)-</i>	

6.3.2 超分節素レベルの特徴

また、(6b) と (6h) から明らかなように、2 人称単数と再帰 (REF) の接辞は、少なくとも分節素レベルで同形である。上例では超分節素レベルでも同形になっている¹⁹が、本来的には、REFが後続の音節を高音調化するのに対し、2sgはそのような影響を与えない、という形の音調上の最小対 (tonal minimal pair) を構成していると考えられる。

OM.1sg:	<i>n-é-ng' ≠ loli-a /néng'lolya/</i>
OM.2sg:	<i>n-é-kú ≠ loli-a /néklolya/</i>
OM.3sg:	<i>n-é-m' ≠ loli-a /ném'lolya/</i>
OM.1pl:	<i>n-é-du ≠ lóli-a /nédulólya/</i>
OM.2pl:	<i>n-é-mu ≠ lóli-a /némulólya/</i>
OM.3pl:	<i>n-é-va ≠ lóli-a /névelólya/</i>
REF:	<i>n-é-ku ≠ lóli-a /nékklólya/</i>

¹⁹ これは、語幹 *≠kund* が H 動詞で、OM の H と語幹の H が並列することで、前者が消去されてしまう (メーウセンの逆規則 Anti-Meeussen's Rule) ことで、両者の区別が中和してしまったことによると考えてよい。

structure: [OM = sg] SM-OM ≠ [vv]_{stem(L)}-a
 [OM = pl] SM-OM ≠ [v̄v]_{stem(L)}-a

これは、動詞「見る」の現在時制形で、1sg から 3pl の OM を接合した形式のリストである (SM は 3sg)。ここで、単数形の OM と複数形の OM では、音調上のふるまいが異なることが分かる。つまり、OM の後続音節＝動詞語幹頭音節を高めているのは複数形の OM で、単数形の方はそうならないということである。このとき、動詞語幹頭の高音調は、OM に起因するものであることが明らかであるから、複数形の OM は高声調素 (H) を有している (そしてそれは後続音節＝動詞語幹頭音節で実現する) のに対し、単数形のそれは H を持っていないと考えることができる。つまり、2sg は H を持たない OM、REF は H を持つ OM というわけである。また、4章各節で見たように、cl.1 を除くすべての名詞クラスの OM は、基本的に H を持つと考えてよさそうである。したがって、OM の音調特性としては、1-3 人称の単数形のみ H をもたず、それ以外の OM は H を有するとまとめることができる。

6.3.3 文法的特徴

OM に関する文法構造上の特徴としては、一動詞構造内に複数の OM を取ることが可能であるという点があげられる。通バントゥ的には、そもそも OM が生じない言語 (e.g. Lingala C36) から、3つの OM を許容する言語 (e.g. Haya JE22) まで幅があるが、複数の OM の共起というのは、チャガ諸語全体の特徴として位置付けることができる。(7) は、直接目的語以外の名詞項を目的語に導入する適用形 (applicative form) の例である。この文では、直接目的語の *klalo* 「ごはん」に加え、「～のために」という受益の関係にある名詞項「私」も目的語になっている。「ごはん」の OM は *ki-*、「私」つまり 1sg の OM は *ng'* である。

- (7) a. OM_A + ON_B: *ndí yakwa néleng'lia klaló*
n-dí i-akwa n-é-le-ng' ≠ li-i-a ki-laló
 CPX.9-‘father’ PPx.9-POSS.1sg ASSERT-SM.3sg-PST1-OM.1sg ≠ ‘eat’-APP-F CPx.7-‘food’
 「私の父は、私のためにごはんを食べた」
- b. *OM_B + ON_B: **ndí yakwa néleklia klaló*
n-dí i-akwa n-é-le-ki ≠ li-i-a ki-laló
 CPX.9-‘father’ PPx.9-POSS.1sg ASSERT-SM.3sg-PST1-OM.1sg ≠ ‘eat’-APP-F CPx.7-‘food’
- c. OM_A-OM_B: *ndí yakwa néleng'klia klaló*
n-dí i-akwa n-é-le-ng'-ki ≠ li-i-a
 CPX.9-‘father’ PPx.9-POSS.1sg ASSERT-SM.3sg-PST1-OM.1sg-OM.3sg ≠ ‘eat’-APP-F
- d. OM_B-OM_A: *ndí yakwa néleking'lia klaló*
n-dí i-akwa n-é-le-ki-ng' ≠ li-i-a
 CPX.9-‘father’ PPx.9-POSS.1sg ASSERT-SM.3sg-PST1-OM.3sg-OM.1sg ≠ ‘eat’-APP-F
 「私の父は私のためにそれ (ごはん) を食べた」

(7a) では、目的語名詞項として *klalo* が現れ、「私」は SM として動詞構造内で表示される。一方、(7b) の場合、目的語名詞項に対応する OM を取る形式であるが、これは通常許容されない。すなわち、動詞後位置に現れる目的語名詞項とそれに対応する OM は共起しないのが原則である。そして、チャガ諸語の特徴でもある複数の OM の共起は、(7c)、(7d) で確認される。そして、両者がともに許容されることから推測されるように、OM の辞順については明確な規則性は見られない。より詳細な例は、適用形を扱う 11.5 で示す。

7. 命令形と接続法

7.1 命令

動詞構造として最も短い形，すなわち語幹と末尾辞（F）のみで構成されるのが，命令形（肯定）である．その否定形，すなわち禁止の表現とあわせて以下に示す．

7.1.1 肯定

肯定の命令形「～しろ」に相当する表現は次のようである．

- (1) a. *shíó*
‘come’ (irregular imperative)
「来い」 Njoo!
cf. *sháh’á* < *shíó* *h’á*
「ここに来い」 Njoo hapa! ‘come’ (irregular imperative) DEM.N.16
- b. *shioní*
shio-ení
‘come’-F.PL
「来い（対複数）」 Njoooni!
- (2) a. *énd-á*
‘go’-F
「行け」 Nenda!
- b. *end-ení*
‘go’-F.PL
「行け（対複数）」 Nendeni!
- (3) a. *l-á*
‘eat’-F
「食べろ」 Kula!
- b. *l-ení*
‘eat’-F.PL
「食べろ（対複数）」 Kuleni!
- (4) a. *sáku-a /sákwa/*
‘watch’-F
「(よく) 見ろ」 Angalia!
- b. *saku-ení*
‘watch’-F.PL
「(よく) 見ろ（対複数）」 Angalieni!

- (5) a. *sóm-a*
 ‘read’-F
 「読め」 Soma!
- b. *som-ení*
 ‘read’-F.PL
 「読め (対複数)」 Someni!
- (6) a. *kúnd-a*
 ‘love’-F
 「愛せよ」 Penda!
- b. *kund-ení ~ kúnd-ení*
 ‘love’-F.PL
 「愛せよ (対複数)」 Kuleni!

(1) のみが不規則な形であるが、それ以外は単音節語幹も含め、語幹と F のみという構造である。対複数の命令は、F を *-eni* に交替させる。動詞構造のスロットを用いて一般化すれば、次のように記述できる。

《命令形 (肯定)》					
SM-	NEG2-	TAM-	(OM-)	≠ stem	-a
《命令形 (肯定・対複数)》					
SM-	NEG2-	TAM-	(OM-)	≠ stem	-eni

7.1.2 否定

命令の否定形、すなわち禁止「～するな」に相当する表現は次のようである。

- (7) a. *u-tá ≠ sh-⁽⁴⁾é*
 SM.2sg-NEG.SUBJ ≠ ‘come’-SUBJ
 「来るな」 Usije!
- b. *mu-tá ≠ sh-⁽⁴⁾é*
 SM.2pl-NEG.SUBJ ≠ ‘come’-SUBJ
 「来るな (対複数)」 Msije!
- (8) a. *u-tá ≠ end-^(é)*
 SM.2sg-NEG.SUBJ ≠ ‘go’-SUBJ
 「行くな」 Usiende!
- b. *mu-tá ≠ end-^(é)*
 SM.2pl-NEG.SUBJ ≠ ‘go’-SUBJ
 「行くな (対複数)」 Msiende!

- (9) a. *u-tá ≠ l-ʼé*
SM.2sg-NEG.SUBJ ≠ 'eat'-SUBJ
「食べるな」 Usile!
- b. *mu-tá ≠ l-ʼé*
SM.2pl-NEG.SUBJ ≠ 'eat'-SUBJ
「食べるな (対複数)」 Msile!
- (10) a. *u-tá ≠ saku-é /utásakwé/*
SM.2sg-NEG.SUBJ ≠ 'watch'-SUBJ
「見るな」 Usiangalie!
- b. *mu-tá ≠ saku-é /mutásakwé/*
SM.2pl-NEG.SUBJ ≠ 'watch'-SUBJ
「見るな (対複数)」 Msiangalie!
- (11) a. *u-tá ≠ som-é*
SM.2sg-NEG.SUBJ ≠ 'read'-SUBJ
「読むな」 Usisome!
- b. *mu-tá ≠ som-é*
SM.2pl-NEG.SUBJ ≠ 'read'-SUBJ
「読むな (対複数)」 Msisome!
- (12) a. *u-tá ≠ kund-é*
SM.2sg-NEG.SUBJ ≠ 'love'-SUBJ
「愛するな」 Usipende!
- b. *mu-tá ≠ kund-é*
SM.2pl-NEG.SUBJ ≠ 'love'-SUBJ
「愛するな (対複数)」 Msipende!

これは、聞き手が単数であれば 2sg の、複数であれば 2pl の SM をとって、F は -e という形式が用いられる。これは、7.2 で扱う接続法 (subjunctive) の形で、日本語に訳せば「～するように」という表現でおおむねカバーできる概念 (未実現、あるいは irrealis である事態の表現) を表わす。命令の否定は、この接続法形の否定形によって表現される。接続法形において、否定概念は第 2 否定辞 (NEG2) スロットに充填される *ta-* という形式で表示される。

《命令否定=禁止=接続法否定形》					
SM(2sg)-	<i>ta-</i>	FAM-	(OM-)	≠ stem	-é
《命令否定=禁止=接続法否定形 (対複数) 》					
SM(2pl)-	<i>ta-</i>	FAM-	(OM-)	≠ stem	-é

7.2 接続法

7.2.1 概要

接続法とは、法 (mood) 概念のひとつで、事態 (事象 event) を、未実現 (irrealis) のものとして捉える場合の表現である。日本語では、おおむね「～するように」という形式に置き換えることができる。7.1.2 の否定命令=禁止は、すなわち「～しないように」という表現ということになる。接続法の肯定形について、以下に具体例を示す。

- (13) *lasíma* *ngi ≠ sīhili-é /ngisīhilyé/*
 ‘must’ SM.1sg ≠ ‘go out’-SUBJ
 「私は出発しなければならない」 *Lazima niondoke*
- (14) *borá* *u ≠ som-é*
 ‘good, better’ SM.2sg ≠ ‘read’-SUBJ
 「あなたは読んだ (勉強した) 方がよい」 *Bora usome.*
- (15) *m’ ≠ (a)mb-i-(é) /m’mby-(é) /* *e ≠ sh-é* *sasá ifi*
 OM.3sg ≠ ‘say’-APPL-SUBJ SM.3sg ≠ ‘come’-SUBJ ‘right now’
 「彼 (女) にすぐ来るように言って」 *Mwambie aje sasa hivi.*

(13) は 1sg を主語に取る形で、動詞構造だけを取れば「私が出発するように」という概念 (より実際的には「私が出発しましょうか」という申し出) を表わすが、*lasima* という副詞要素とともに用いることで、「～しなければならない」という義務の表現になる。(14) は *borá* という同じく副詞的な要素と用いることで「あなたは～した方がよい」という意味を示す。(15) は主節動詞も、またその補部の形式も接続法形である。前者は、「あなたが彼 (女) に言うように」(2sg の SM が脱落)、後者は「彼 (女) が来るように」という意味を表わす。

7.2.2 構造の一般化

まず、接続法の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。

	《接続法 (肯定)》					
SM-	NEG2-	TAM-	(OM-)	≠ stem	-é	
	《接続法 (否定)》					
SM-	tá-	TAM-	(OM-)	≠ stem	-é	

以下に接続法の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。まず L 動詞 ≠ *end-a* 「行く」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngí ≠ end-(é)</i>	<i>ngi-tá ≠ end-(é)</i>
SM.2sg:	<i>ú ≠ end-(é)</i>	<i>u-tá ≠ end-(é)</i>
SM.3sg:	<i>é ≠ end-(é)</i>	<i>e-tá ≠ end-(é)</i>
SM.1pl:	<i>dú ≠ end-(é)</i>	<i>du-tá ≠ end-(é)</i>
SM.2pl:	<i>mú ≠ end-(é)</i>	<i>mu-tá ≠ end-(é)</i>
SM.3pl:	<i>vé ≠ end-(é)</i>	<i>va-tá ≠ end-(é)</i>
structure:	$S\acute{M} \neq [v]_{\text{stem(L)}}-(\acute{e})$	$SM-t\acute{a} \neq [v]_{\text{stem(L)}}-(\acute{e})$

肯定形、否定形とも、F位置でHが実現する（単独発話では実現しないこともある）。肯定形ではSM位置で、否定形ではNEG2位置でHが実現する。

次に、H動詞 ≠kab-a「叩く」の活用パターンを示す。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngí ≠ kab-(é)</i>	<i>ngi-tá ≠ kab-(é)</i>
SM.2sg:	<i>ú ≠ kab-(é)</i>	<i>u-tá ≠ kab-(é)</i>
SM.3sg:	<i>é ≠ kab-(é)</i>	<i>é-tá ≠ kab-(é)</i>
SM.1pl:	<i>dú ≠ kab-(é)</i>	<i>du-tá ≠ kab-(é)</i>
SM.2pl:	<i>mú ≠ kab-(é)</i>	<i>mu-tá ≠ kab-(é)</i>
SM.3pl:	<i>vá ≠ kab-(é)</i>	<i>va-tá ≠ kab-(é)</i>
structure:	$S\acute{M} \neq [v]_{\text{stem(H)}}-(\acute{e})$	$SM-t\acute{a} \neq [v]_{\text{stem(H)}}-(\acute{e})$

H動詞も、L動詞同様の音調パターンを見せる。つまり、接続法形においては、音調パターンの対立が中和していると見てよさそうである。

8. 単純時制形

チャガ諸語は、バントゥ諸語のなかでも動詞構造の統合度が高いことで知られるが、その要因の一つとして、TAM スロットに複数のマーカーが充填されうることができる。TAM の連鎖については 10 章で扱うことになるが、ここでは、それを構成する基本要素である時制概念に関する接辞について扱う。

8.1 現在

現在時制とは、表現される事態が発話時点に位置付けられていることを示す時間的概念である。これに相当するロンボ語の形式は、末尾辞 (F) *-a* で屈折される一般動詞の場合と、F *-i* で屈折される状態動詞の場合で構造が異なる。

8.1.1 一般現在

8.1.1.1 概要

一般動詞における現在時制を、ここでは一般現在 (general present, 単に PRS と略) と呼ぶことにする。これに相当する表現は、次のようである。

- (1) AFF: *ú-∅ ≠ som-a* *ki-tábu /ktábu/*
 SM.2sg-PRS ≠ 'read'-F CPx.7-'book'
 「あなたは本を読む」 Unasoma kitabu.
- NEG: *ú'-∅ ≠ som-a* *ki-tabú /ktabú/* *ku*
 SM.2sg-PRS ≠ 'read'-F CPx.7-'book' NEG
 「あなたは本を読まない」 Husomi kitabu.
- (2) AFF: *n-é-∅ ≠ saku-a /nesakwa/* *∅-héwa*
 ASSERT-SM.3sg-PRS ≠ 'watch'-F CPx.9-'sky'
 「彼 (女) は空を見る」 Anaangalia hewa.
- NEG: *é'-∅ ≠ saku-a /é'sakwa/* *∅-héwá* *ku*
 SM.3sg-PRS ≠ 'watch'-F CPx.9-'sky' NEG
 「彼 (女) は空を見ない」 Haangalii hewa.
- (3) AFF: *dú-∅-ku ≠ fúns-a* *ki-rómbó* */dúkfúnsa křómbó/*
 SM.1pl-PRS-OM.REF ≠ 'teach'-F CPx.7-'Rombo'
 「私たちはロンボ語を習っている」 Tunajifunza kirombo.
- NEG: *d'ú'-∅-ku ≠ fúns-a* *ki-r'óm'bó* *ku* */d'ú'kfúnsa kř'óm'bó ku/*
 SM.1pl-PRS-OM.REF ≠ 'teach'-F CPx.7-'Rombo' NEG
 「私たちはロンボ語を習っていない」 Hatujifunzi kirombo.

各例から明らかなように、TAMスロットには音形のあるマーカーが現れない。体系的に、これ以外の時制形では何らかの音形のあるマーカー（ただしFが *-a* 以外の場合は \emptyset - でありうる）が充填されるので、一般現在時制には \emptyset - を立てることが合理的である²⁰。Fは *-a*、否定形は文末に置かれる否定詞 *ku* によって表示される。

8.1.1.2 構造の一般化

まず、一般現在形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。

$$\text{SM-} \quad | \quad \text{NEG2-} \quad | \quad \emptyset\text{-} \quad | \quad (\text{OM-}) \quad | \quad \neq \text{stem} \quad | \quad \text{-a}$$

《一般現在》

以下に一般現在形の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。まずL動詞 \neq *loli-a* 「見る」に各人称形のSMを接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngí</i> \neq <i>loli-a</i> / <i>nglolya</i> /	<i>ngi</i> \neq <i>lólí-á ku</i>
SM.2sg:	<i>ú</i> \neq <i>loli-a</i> / <i>úlolya</i> /	<i>u</i> \neq <i>lólí-á ku</i>
SM.3sg:	<i>n-é</i> \neq <i>loli-a</i> / <i>nélolya</i> /	<i>e</i> \neq <i>lólí-á ku</i>
SM.1pl:	<i>dú</i> \neq <i>loli-a</i> / <i>dúlolya</i> /	<i>du</i> \neq <i>lólí-á ku</i>
SM.2pl:	<i>mú</i> \neq <i>loli-a</i> / <i>múlolya</i> /	<i>mu</i> \neq <i>lólí-á ku</i>
SM.3pl:	<i>vé</i> \neq <i>loli-a</i> / <i>vélolya</i> /	<i>ve</i> \neq <i>lólí-á ku</i>
structure:	$\text{SM} \neq [\text{vv}]_{\text{stem(L)}}\text{-a}$	$\text{SM} \neq [\text{v}']_{\text{stem(L)}}\text{-á ku}$

肯定形では、SM位置にHが実現し、否定形ではそれが現れない。以降の時制形においても、初頭ないし次頭位置でHが実現するが、これを動詞初頭高音調（IH）と呼ぶ。そして、上例では、このIHが実現していない。この音調パターンを「否定の音調パターン（Negative Tone pattern, NTP）」と呼ぶ。否定詞 *ku* に起因する高音調は、語幹初頭まで拡張している。

次に、各人称形のOMを接合したパターンを示す。SMは3sgである。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	<i>n-é-ng'</i> \neq <i>loli-a</i> / <i>néng'lolya</i> /	<i>(é)-ng'</i> \neq <i>lólí-á ku</i>
OM.2sg:	<i>n-é-k</i> \neq <i>loli-a</i> / <i>néklolya</i> /	<i>e-k</i> \neq <i>lólí-á ku</i>
OM.3sg:	<i>n-é-m'</i> \neq <i>loli-a</i> / <i>ném'lolya</i> /	<i>e-m'</i> \neq <i>lólí-á ku</i>

²⁰ ただし、本章以外での文例のグロスでは、PRS \emptyset - は省略している（本稿での文例の記述の原則は、「実現形に形態素境界を与える」という方針による。「略号と表記法」の項を参照）。

OM.1pl:	<i>n-é-du ≠ lóli-a /nédulólya/</i>	<i>e-du ≠ lóli-á ku</i>
OM.2pl:	<i>n-é-mu ≠ lóli-a /némulólya/</i>	<i>e-mu ≠ lóli-á ku</i>
OM.3pl:	<i>n-é-va ≠ lóli-a /névelólya/</i>	<i>e-va ≠ lóli-á ku</i>
structure:	[OM = sg] $S\acute{M}-O\acute{M} \neq [v\acute{v}]_{\text{stem(L)}}-a$	[OM = sg] $SM-O\acute{M} \neq [v\acute{v}]_{\text{stem(L)}}-á ku$
	[OM = pl] $S\acute{M}-OM \neq [v\acute{v}]_{\text{stem(L)}}-a$	[OM = pl] $SM-OM \neq [v\acute{v}]_{\text{stem(L)}}-á ku$

肯定形では、SM 位置で IH が実現したうえで、単数形の OM を接合する場合は OM 位置で、複数形の OM を接合する場合は語幹初頭音節で H が実現する。否定形の場合は NTP が確認され、ku の遡及的音調拡張は、いずれの場合も語幹初頭音節まで伸びている。

次に、H 動詞 $\neq kab-a$ 「叩く」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngí ≠ kab-¹á</i>	<i>ngi ≠ kab-á ku</i>
SM.2sg:	<i>ú ≠ kab-¹á</i>	<i>u ≠ kab-á ku</i>
SM.3sg:	<i>é ≠ kab-¹á</i>	<i>e ≠ kab-á ku</i>
SM.1pl:	<i>dú ≠ kab-¹á</i>	<i>du ≠ kab-á ku</i>
SM.2pl:	<i>mú ≠ kab-¹á</i>	<i>mu ≠ kab-á ku</i>
SM.3pl:	<i>vé ≠ kab-¹á</i>	<i>ve ≠ kab-á ku</i>
structure:	$S\acute{M} \neq [v]_{\text{stem(H)}}-1á$	$SM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-á ku$

肯定形では、SM 位置に IH が実現し、否定形ではそれが実現しない (NTP)。また、肯定形においては、語彙的な H とみられる高音調が動詞語末で実現する（ただし、音声的な高さは初頭のそれに比べ低い）。否定形の場合は H が動詞語末のみで実現している。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	<i>n-é-ng' ≠ kab-¹á</i>	<i>e-ng' ≠ kab-á ku</i>
OM.2sg:	<i>n-é-k ≠ kab-¹á</i>	<i>e-k ≠ kab-á ku</i>
OM.3sg:	<i>n-é-m' ≠ kab-¹á</i>	<i>e-m' ≠ kab-á ku</i>
OM.1pl:	<i>n-é-du ≠ kab-¹á</i>	<i>e-du ≠ kab-á ku</i>
OM.2pl:	<i>n-é-mu ≠ kab-¹á</i>	<i>e-mu ≠ kab-á ku</i>
OM.3pl:	<i>n-é-va ≠ kab-¹á</i>	<i>e-va ≠ kab-á ku</i>
structure:	[OM = sg] $S\acute{M}-O\acute{M} \neq [v]_{\text{stem(H)}}-a$	[OM = sg] $SM-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-á ku$
	[OM = pl] $S\acute{M}-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-a$	

肯定形においては、L 動詞同様、単数形 OM と複数形 OM でパターンが異なる。前者の場合は、H が OM 位置でも実現する (IH の拡張?)。後者の場合は、(L 動詞であれば語幹初頭音節で H が実現するところであるが) SM 位置のみで H が実現する。否定形では、H が動詞語末のみで実現している。

8.1.2 状態現在

8.1.2.1 概要

F -i によって屈折した形式は、動詞語幹を状態動詞化する。例えば、(5) ≠*kund* は「愛する」という行為動詞であるが、これに -i を接合した ≠*kund-i* という形式は「欲している、欲しい」(あるいは「愛している」という状態動詞になる。ただし、接合できる動詞語幹には制約があるようである。この動詞形における現在時制形「～している、～という状態である」(これをここでは状態現在 *stative present* と呼ぶことにする) に相当する表現は、次のようである。

- (4) AFF: *n-é-∅ ≠ shu-i / néshwi/* *∅-sauti* *ya* *∅-rédió*
 ASSERT-SM.3sg-PRS ≠ 'hear'-STAT CPx.9-'sound' ASS.9 CPx.9-'radio'
 「彼(女)はラジオの音を聞いている」 *Anasikia sauti ya redio.*
- NEG: *e-∅ ≠ shu-i* *∅-sauti* *ya* *∅-redió* *ku*
 SM.3sg-PRS ≠ 'hear'-STAT CPx.9-'sound' ASS.9 CPx.9-'radio' NEG
 「彼(女)はラジオの音を聞いている」 *Hasikii sauti ya redio.*
- (5) AFF: *dú-∅ ≠ kund-i* *i-ku ≠ loli-a /ikl'ó'lya/*
 SM.1pl-PRS ≠ 'love'-STAT INF-OM.2sg ≠ 'see'-F
 「私たちはあなたに会いたい」 *Tunataka kukuona.*
- NEG: *dú-∅ ≠ kund-i* *i-ku ≠ lólí-á* *ku* */iklólíá ku/*
 SM.1pl-PRS ≠ 'love'-STAT INF-OM.2sg ≠ 'see'-F NEG
 「私たちはあなたに会いたくない」 *Hatutaki kukuona.*
- (6) AFF: *mu-∅ ≠ ré* *∅-umbe* *ng'-ingi /nyingi/*
 SM-2pl-PRS ≠ 'have' CPx.9-'cow' APx.9-'many'
 「あなたたちはたくさんの牛を持っている」 *Mna ng'ombe wengi.*
- NEG: *mu-∅ ≠ ré* *∅-umbe* *hatá* *i-imú /imú/* *ku*
 SM-2pl-PRS ≠ 'have' CPx.9-'cow' 'even' EPx.9-'one' NEG
 「あなたたちは、牛を一頭も持っていない」 *Hamna ng'ombe hata mmoja.*

この動詞形においても、TAM スロットには音形をもった TAM は現れないが、現在時制マーカー *∅-* が挿入されていると解釈される。(6) の語幹「持っている」は、≠*re* であるが、F -i で屈折した形式とパラレルな活用パターンを見せるので、状態動詞のカテゴリーに含めておく (cf. 8.2.3)。否定形は文末に置かれる否定詞 *ku* によって表示される。

8.1.2.2 状態動詞の形容詞用法

状態動詞形は、一致接頭辞をAPxにすることで、形容詞として用いることができる²¹。

- (7) S: *mw-an^ʔá* *ʔ-∅ ≠lal-í*
 CPx.1-'child' SM.1-PRS ≠ 'sleep'-STAT
 「子どもは寝ている」 Mtoto amelala (yuko usingizini).
- A: *mw-aná* *m' ≠l'ál-í*
 CPx.1-'child' APx.1 ≠ 'sleep'-STAT
 「寝ている子ども」 Mtoto anayelala.
- (8) S: *mom^ʔú* *s^ʔ-∅ ≠simb-í*
 10.'lip' SM.10-PRS ≠ 'swell'-STAT
 「唇は腫れている」 Midomo imevimba.
- A: *momú* *ng' ≠simb-í*
 10.'lip' APx.10 ≠ 'swell'-STAT
 「腫れている唇」 Midomo inayovimba.

この用法は、確認した限りのすべての状態動詞において可能であるから、この言語における名詞修飾の方策として、相当程度生産的であることが推測される。

8.1.2.3 構造の一般化

状態現在形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。

《状態現在》

$$\text{SM-} \quad | \quad \text{NEG2-} \quad | \quad \emptyset- \quad | \quad (\text{OM-}) \quad | \quad \neq \text{stem} \quad | \quad -\text{ʔ}$$

以下に状態現在形の基本活用パターンを示す。状態現在に関しては、状態動詞化できる語幹に制約があることもあり、L動詞と確定できる形式での（信頼に足る）データが得られていない。したがって、ここではH動詞 *≠kund-i* 「欲している、欲しい」を例とする。音調は単独発話におけるそれである。まず、各人称形のSMを接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngí ≠kund-^ʔ</i>	<i>ngi ≠kund-í ku</i>
SM.2sg:	<i>ú ≠kund-^ʔ</i>	<i>u ≠kund-í ku</i>
SM.3sg:	<i>é ≠kund-^ʔ</i>	<i>e ≠kund-í ku</i>
SM.1pl:	<i>dú ≠kund-^ʔ</i>	<i>du ≠kund-í ku</i>

²¹ 以下の例における音調記号における「^ʔ」の表記は、その音調が現れることが期待されるが確認していない、ということである。

SM.2pl:	$mú \neq kund^{-\langle 4 \rangle}$	$mu \neq kund-i ku$
SM.3pl:	$vé \neq kund^{-\langle 4 \rangle}$	$ve \neq kund-i ku$
structure:	$S\acute{M} \neq [v]_{\text{stem(H)}}^{-\langle 4 \rangle}$	$SM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-i ku$

肯定形においては SM で IH が実現し，否定形ではそれが実現しない (NTP)。また，肯定形においては，語彙的な H とみられる高音調が動詞語末で実現する（ただし，音声的な高さは初頭のそれに比べ低い）。否定形の場合は H が動詞語末のみで実現している。

次に，各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	$n-é-ng' \neq kund^{-\langle 4 \rangle}$	$e-ng' \neq kund-i ku$
OM.2sg:	$n-é-k \neq kund^{-\langle 4 \rangle}$	$e-k \neq kund-i ku$
OM.3sg:	$n-é-m' \neq kund^{-\langle 4 \rangle}$	$e-m' \neq kund-i ku$
OM.1pl:	$n-é-du \neq kund^{-\langle 4 \rangle}$	$e-du \neq kund-i ku$
OM.2pl:	$n-é-mu \neq kund^{-\langle 4 \rangle}$	$e-mu \neq kund-i ku$
OM.3pl:	$n-é-va \neq kund^{-\langle 4 \rangle}$	$e-va \neq kund-i ku$
structure:	$[OM = \text{sg}] S\acute{M}-O\acute{M} \neq [v]_{\text{stem(H)}}^{-\langle 4 \rangle}$ $[OM = \text{pl}] S\acute{M}-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}^{-\langle 4 \rangle}$	$[OM = \text{sg}] SM-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-i ku$

肯定形においては，単数形 OM と複数形 OM でパターンが異なる。前者の場合は，H が OM 位置でも実現する (IH の拡張?)。後者の場合は，(L 動詞であれば語幹初頭音節で H が実現することが期待されるところであるが) SM 位置のみで H が実現する。否定形では，H が動詞語末のみで実現している。

8.2 過去

過去時制とは，表現される事態が発話時点以前の時点に位置付けられていることを示す時間的概念である。バントゥ諸語では，過去時制に複数の形式的区分を持つものが少なくないが，ロンボ語も二つの過去時制形を持つ。

8.2.1 近過去

8.2.1.1 概要

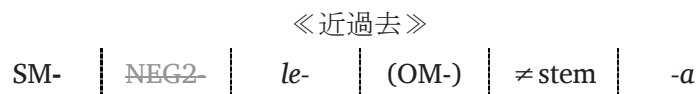
発話時点に近い過去を示す過去時制（これをここでは近過去 PST1 と呼ぶ）に相当する表現は，次のようである。

- (9) AFF: *ngí-le-m' ≠ l'ó'li-a /ngílem'l'ó'lya/* Ø-*rafíkí* *i-ákwa /yakwa/* *ívó*
 SM.1sg-PST1-OM.3sg ≠ 'see'-F CPx.9-'friend' PPx.9-POSS.1sg 'yesterday'
 「私は昨日友達に会った」 Nilimwona rafiki yangu jana.
- NEG: *ngí-le-m' ≠ l'ó'li-a /ngílem'l'ó'lya/* Ø-*rafíkí* *i-ákwa /yakwa/* *ívó* *ku*
 SM.1sg-PST1-OM.3sg ≠ 'see'-F CPx.9-'friend' PPx.9-POSS.1sg 'yesterday' NEG
 「私は昨日友達に会わなかった」 Sikumwona rafiki yangu jana.
- (10) AFF: *dú-le ≠ fuma* *móshi* *ívó*
 SM.1pl-PST1 ≠ 'go out from'-F Moshi 'yesterday'
 「私たちは昨日モシを出発した」 Tuliondoka Moshi jana.
- NEG: *dú-le ≠ fuma* *móshí* *ívó* *ku*
 SM.1pl-PST1 ≠ 'go out from'-F Moshi 'yesterday' NEG
 「私たちは昨日モシを出発しなかった」 Hatukuondoka Moshi jana.
- (9) AFF: *vé-le ≠ nw-a* *u-ari /wari/* *u-ingí /wingí/* *sana*
 SM.3pl-PST1 ≠ 'drink'-F CPx.11-'liquar' APx.11-'many' 'very'
 「彼らはたくさん酒を飲んだ」 Walikunywa pombe nyingi sana.
- NEG: *vé-le ≠ nw-a* *u-ari /wari/* *u-ingí /wingí/* *saná* *ku*
 SM.3pl-PST1 ≠ 'drink'-F CPx.11-'liquar' APx.11-'many' 'very' NEG
 「彼らはたくさん酒を飲まなかった」 Hawakunywa pombe nyingi sana.

この時制形は、TAM *le-* によってマークされる。F は *-a*、否定形は文末に置かれる否定詞 *ku* によって表示される。

8.1.2.2 構造の一般化

近過去形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。



以下に近過去形の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。まず L 動詞 ≠ *loli-a* 「見る」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形		否定形
SM.1sg:	<i>ngí-le ≠ lóli-a /ngílelóllya/</i>		<i>ngi-le ≠ lólí-á ku</i>
SM.2sg:	<i>ú-le ≠ lóli-a /úlelóllya/</i>		<i>u-le ≠ lólí-á ku</i>
SM.3sg:	<i>n-é-le ≠ lóli-a /nélelóllya/</i>		<i>e-le ≠ lólí-á ku</i>
SM.1pl:	<i>dú-le ≠ lóli-a /dúlelóllya/</i>		<i>du-le ≠ lólí-á ku</i>

SM.2pl:	<i>mú-le ≠ lóli-a / múlelóllya/</i>	<i>mu-le ≠ lólí-á ku</i>
SM.3pl:	<i>vé-le ≠ lóli-a / vélelóllya/</i>	<i>ve-le ≠ lólí-á ku</i>
structure:	<i>S^M-le ≠ [v̆v]_{stem(L)}-a</i>	<i>SM-le ≠ [v̆v]_{stem(L)}-á ku</i>

肯定形においては SM で IH が実現し、さらに語幹初頭音節でも H が実現する。否定形では SM 上の H が実現せず (NTP), *ku* に起因する H が語幹初頭音節まで拡張する。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	<i>n-é-le-ng' ≠ l'ó'li-a / néleŋl'ó'lya/</i>	<i>e-le-n'ǵ' ≠ lólí-á ku</i>
OM.2sg:	<i>n-é-le-k ≠ l'ó'li-a / nélek'l'ó'lya/</i>	<i>e-le-k ≠ lólí-á ku</i>
OM.3sg:	<i>n-é-le-m' ≠ l'ó'li-a / nélem'l'ó'lya/</i>	<i>e-le-m' ≠ lólí-á ku</i>
OM.1pl:	<i>n-é-le-du ≠ lóli-a / néledulóllya/</i>	<i>e-le-du ≠ lólí-á ku</i>
OM.2pl:	<i>n-é-le-mu ≠ lóli-a / nélemulóllya/</i>	<i>e-le-mu ≠ lólí-á ku</i>
OM.3pl:	<i>n-é-le-va ≠ lóli-a / nélevelóllya/</i>	<i>e-le-va ≠ lólí-á ku</i>
structure:	<i>[OM = sg] S^M-le-OM ≠ [v̆v]_{stem(L)}-a</i>	<i>SM-le-OM ≠ [v̆v]_{stem(L)}-á ku</i>
	<i>[OM = pl] S^M-le-OM ≠ [v̆v]_{stem(L)}-a</i>	

肯定形では SM 位置で IH が実現し、否定形ではそれが実現しない (NTP)。肯定形において、OM が複数形の場合は、動詞初頭音節で安定的に H が実現する。OM が単数形の場合は、H の実現が期待されないが、それが現れることがある。否定形における *ku* の遡及的音調拡張は、語幹初頭音節まで伸びている。

次に、H 動詞 ≠*kab-a* 「叩く」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngí-le ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>ngi-le ≠ kab-á ku</i>
SM.2sg:	<i>ú-le ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>u-le ≠ kab-á ku</i>
SM.3sg:	<i>é-le ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>e-le ≠ kab-á ku</i>
SM.1pl:	<i>dú-le ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>du-le ≠ kab-á ku</i>
SM.2pl:	<i>mú-le ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>mu-le ≠ kab-á ku</i>
SM.3pl:	<i>vé-le ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>va-le ≠ kab-á ku</i>
structure:	<i>S^M-le ≠ [v]_{stem(H)}-⁽⁴⁾á'</i>	<i>SM-le ≠ [v]_{stem(H)}-á ku</i>

肯定形においては SM で IH が実現し、否定形ではそれが実現しない (NTP)。また、肯定形においては、語彙的な H とみられる高音調が動詞語末で実現することがある (ただし、音声的な高さは初頭のそれに比べ低い)。否定形の場合は H が動詞語末のみで実現している。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

肯定形	否定形
OM.1sg: $n\text{-}\acute{e}\text{-le}\text{-ng}' \neq kab\text{-}^{(4)}\acute{a}$	$e\text{-ng}' \neq kab\text{-}\acute{a} ku$
OM.2sg: $n\text{-}\acute{e}\text{-le}\text{-k} \neq kab\text{-}^{(4)}\acute{a}$	$e\text{-k} \neq kab\text{-}\acute{a} ku$
OM.3sg: $n\text{-}\acute{e}\text{-le}\text{-m}' \neq kab\text{-}^{(4)}\acute{a}$	$e\text{-m}' \neq kab\text{-}\acute{a} ku$
OM.1pl: $n\text{-}\acute{e}\text{-du} \neq kab\text{-}^{(4)}\acute{a} \sim n\text{-}\acute{e}\text{-du} \neq k\acute{a}b\text{-}a$	$e\text{-du} \neq kab\text{-}\acute{a} ku$
OM.2pl: $n\text{-}\acute{e}\text{-mu} \neq kab\text{-}^{(4)}\acute{a} \sim n\text{-}\acute{e}\text{-mu} \neq k\acute{a}b\text{-}a$	$e\text{-mu} \neq kab\text{-}\acute{a} ku$
OM.3pl: $n\text{-}\acute{e}\text{-va} \neq kab\text{-}^{(4)}\acute{a} \sim n\text{-}\acute{e}\text{-va} \neq k\acute{a}b\text{-}a$	$e\text{-va} \neq kab\text{-}\acute{a} ku$
structure: $S\acute{M}\text{-le}\text{-OM} \neq [v]_{\text{stem(H)}}\text{-}^{(4)}\acute{a}$ $\sim S\acute{M}\text{-le}\text{-OM} \neq [v']_{\text{stem(H)}}\text{-}a$	$[OM = \text{sg}] S\acute{M}\text{-le}\text{-OM} \neq [v]_{\text{stem(H)}}\text{-}\acute{a} ku$

OM を接合しても、全体的な音調パターンは変わらない。ただし、OM が複数形の場合に、語末音節で H が実現する場合と、次末音節で H が実現する場合という形で実現のユレが確認される。

8.2.2 遠過去

8.2.2.1 概要

近過去よりも相対的に以前の時点で生じた事態を表現する形式を、ここでは(遠過去 PST2)と呼ぶ。これに相当する表現は、次のようである。

- (10) AFF: $u\text{-ng}' \neq vi\text{-ie}$ $ng' \neq saidi\text{-}\acute{e}$ $/ung'vie ng'saidy\text{-}\acute{e}/$
 SM.2sg-OM.1sg \neq 'tell'-PST2 SM.1sg-'help'-SUBJ
 「あなたは「私を助けて」と私に言った」Uliniambia "nisaidie."
 NEG: $u\text{-ng}' \neq vi\text{-ie}$ $ng' \neq saidi\text{-}\acute{e}$ ku $/ung'vie ng'saidi\acute{e} ku/$
 SM.2sg-OM.1sg \neq 'tell'-PST2 SM.1sg-'help'-SUBJ NEG
 「あなたは「私を助けて」と私に言わなかった」Hukuniambia "nisaidie."
- (11) AFF: $n\text{-}\acute{e} \neq amb\text{-ie}$ $n\text{-}\acute{e} \neq fum\text{-ie}$ $\emptyset\text{-tansania}$
 ASSERT-SM.3sg \neq 'say'-PST2 ASSERT-SM.3sg \neq 'come from'-PST2 CPx.9-Tanzania
 「彼(女)はタンザニアから来たと言った」Alisema alitoka Tanzania.
 NEG: $e \neq amb\text{-ie}$ $n\text{-}\acute{e} \neq fum\text{-}\acute{e}$ $\emptyset\text{-tansania}$ ku
 SM.3sg \neq 'say'-PST2 ASSERT-SM.3sg \neq 'come from'-PST2 CPx.9-Tanzania NEG
 「彼(女)はタンザニアから来たと言わなかった」Hakusema alitoka Tanzania.
- (12) AFF: $m\acute{u} \neq kor\text{-ie}$ $ki\text{-lal}\acute{o}$ $ki\text{-sh}\acute{a}$ $/m\acute{u}kory\acute{e} klal\acute{o} ksh\acute{a}/$
 SM.2pl \neq 'cook'-PST2 CPx.7-'food' APx.7-'good'
 「あなたたちはおいしい料理を作った」Mlipika chakula kizuri.

NEG: *mu ≠kor-íé* *ki-laló /klaló/* *ki-shá /kshá/* *ku* */múkoryé klaló kshá ku/*
 SM.2pl ≠ 'cook'-PST2 CPx.7-'food' APx.7-'good' NEG
 「あなたたちはおいしい料理を作らなかった」 Hamkupika chakula kizuri.

この時制形は、F *-ie* によってマークされる²²。1.3 で見たように、とくに動词语末の母音連続は、後続要素がない環境では半母音化して実現するため、とりわけ文末においては /*ye/* という形で実現する。否定形は文末に置かれる否定詞 *ku* によって表示される。

8.2.2.2 構造の一般化

まず、遠過去形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。

《遠過去》
 SM- | NEG2- | Ø- | (OM-) | ≠ stem | *-(é)*

以下に遠過去形の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。まず L 動詞 ≠ *loli-a* 「見る」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngí ≠ loli-íé /ngílolyé/</i>	<i>ngi ≠ loli-íé ku</i>
SM.2sg:	<i>ú ≠ loli-íé /úlolyé/</i>	<i>u ≠ loli-íé ku</i>
SM.3sg:	<i>n-é ≠ loli-íé /nélolyé/</i>	<i>e ≠ loli-íé ku</i>
SM.1pl:	<i>dú ≠ loli-íé /dúlolyé/</i>	<i>du ≠ loli-íé ku</i>
SM.2pl:	<i>mú ≠ loli-íé /múlolyé/</i>	<i>mu ≠ loli-íé ku</i>
SM.3pl:	<i>vé ≠ loli-íé /vélolyé/</i>	<i>ve ≠ loli-íé ku</i>
structure:	<i>S^M ≠ [vv]_{stem(L)}-íé</i>	<i>SM ≠ [vv]_{stem(L)}-íé ku</i>

肯定形では、SM 位置に IH が実現し、否定形ではそれが現れない (NTP)。また肯定形、否定形ともに、F *-ie* で H が実現する。したがって、結果的にこの時制形では、肯定形と否定形の音調上の違いは、NTP のみということになる。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	<i>n-(é)-ng' ≠ loli-íé /néng'lolyé/</i>	<i>e-ng' ≠ lóli-íé ku</i>
OM.2sg:	<i>n-é-k ≠ loli-íé /néklolyé/</i>	<i>e-k ≠ lóli-íé ku</i>

²² 厳密には TAM Ø- と F *-ie* の組み合わせで表現される。

OM.3sg:	<i>n-(é-m') ≠ loli-íé /n'(é)m'lolyé/</i>	<i>e-m' ≠ lóli-íé ku</i>
OM.1pl:	<i>n-é-du ≠ loli-íé /nédulólyé/</i>	<i>e-du ≠ lóli-íé ku</i>
OM.2pl:	<i>n-é-mu ≠ loli-íé /némulolyé/</i>	<i>e-mu ≠ lóli-íé ku</i>
OM.3pl:	<i>n-é-va ≠ loli-a /névelolyé/</i>	<i>e-va ≠ lóli-íé ku</i>
structure:	[OM = sg] S'(M')-OM' ≠ [vv] _{stem(L)} -íé	SM-OM ≠ [v'] _{stem(L)} -íé ku
	[OM = pl] SM'-OM' ≠ [vv] _{stem(L)} -íé	

肯定形では、SM 位置に IH が実現し、否定形ではそれが現れない (NTP)。ただし、肯定形で OM が単数形の場合、SM 位置ではなく OM 位置で IH が実現する発音も認められる。否定形の場合は、NTP が確認され、ku の遡及的音調拡張は、語幹初頭音節まで伸びている。しかし、OM を取らない形では、H は -ie のみに付与されており、これが音声的なユレなのか、体系的に意味のあるズレなのかは不明瞭である。

次に、H 動詞 ≠kab-a 「叩く」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngí ≠ kab-íé /ngíkabyé/</i>	<i>ngi ≠ kab-íé ku</i>
SM.2sg:	<i>ú ≠ kab-íé /úkabyé/</i>	<i>u ≠ kab-íé ku</i>
SM.3sg:	<i>n-é ≠ kab-íé /nékabyé/</i>	<i>e ≠ kab-íé ku</i>
SM.1pl:	<i>dú ≠ kab-íé /dúkabyé/</i>	<i>du ≠ kab-íé ku</i>
SM.2pl:	<i>mú ≠ kab-íé /múkabyé/</i>	<i>mu ≠ kab-íé ku</i>
SM.3pl:	<i>vé ≠ kab-íé /vékabyé/</i>	<i>va ≠ kab-íé ku</i>
structure:	SM' ≠ [v] _{stem(H)} -íé	SM ≠ [v] _{stem(H)} -íé ku

L 動詞と同様の音調パターンを示している。つまり、肯定形では、SM 位置に IH が実現し、否定形ではそれが現れない (NTP)。また肯定形、否定形ともに、F -ie で高音調が実現する。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	$n\text{-}^{(e)}\text{-ng}' \neq kab\text{-}íé / néng'kabyé/$	$e\text{-ng}' \neq kab\text{-}^{(e)}é ku$
OM.2sg:	$n\text{-}é\text{-}k \neq kab\text{-}íé / nékkabyé/$	$e\text{-}k \neq kab\text{-}^{(e)}é ku$
OM.3sg:	$n\text{-}^{(e)}\text{-}m' \neq kab\text{-}íé / né'm'kabyé/$	$e\text{-}m' \neq kab\text{-}^{(e)}é ku$
OM.1pl:	$n\text{-}é\text{-}du \neq kab\text{-}íé / nédu'kabyé/$	$e\text{-}du \neq kab\text{-}^{(e)}é ku$
OM.2pl:	$n\text{-}é\text{-}mu \neq kab\text{-}íé / nému'kabyé/$	$e\text{-}mu \neq kab\text{-}^{(e)}é ku$
OM.3pl:	$n\text{-}é\text{-}va \neq kab\text{-}íé / névakabyé/$	$e\text{-}va \neq kab\text{-}^{(e)}é ku$
structure:	[OM = sg] $S^{(M)}\text{-}OM' \neq [v]_{\text{stem}(H)} \text{-}íé$ [OM = pl] $S^{M}\text{-}OM' \neq [v]_{\text{stem}(H)} \text{-}íé$	[OM = sg] $SM\text{-}OM' \neq [v]_{\text{stem}(H)} \text{-}^{(e)}é ku$

肯定形においては、L 動詞同様、単数形 OM と複数形 OM でパターンが異なる。前者の場合は、H が OM 位置でも実現する (IH の拡張?)。後者の場合は、(L 動詞であれば語幹初頭音節で H が実現するところであるが) SM 位置のみで IH が実現する。否定形では、H が動詞語末のみで実現している。

8.2.3 状態過去

8.2.3.1 概要

状態動詞における過去時制「～していた、～という状態であった」に相当する表現を、ここでは状態過去 (stative past, PST.STAT) と呼ぶ。具体例は、次のようである。

- (13) AFF: $n\text{-}é\text{-}ve \neq shu\text{-}i / néveshwi/$ $\emptyset\text{-}sauti$ ya $\emptyset\text{-}rédio$
 ASSERT-SM.3sg-PST.STAT \neq 'hear'-STAT CPx.9-'sound' ASS.9 CPx.9-'radio'
 「彼 (女) はラジオの音を聞いていた」 Alikuwa anasikia sauti ya redio.
- NEG: $e\text{-}ve \neq shu\text{-}i$ $\emptyset\text{-}sauti$ ya $\emptyset\text{-}red\text{'}^{(e)}ó$ ku
 SM.3sg-PST.STAT \neq 'hear'-STAT CPx.9-'sound' ASS.9 CPx.9-'radio' NEG
 「彼 (女) はラジオの音を聞いていなかった」 Alikuwa hasikii sauti ya redio.
- (14) AFF: $dú\text{-}ve \neq kund\text{-}i$ $i\text{-}ku \neq loli\text{-}a / ikl\text{'}ó\text{'}lyá/$
 SM.1pl-PST.STAT \neq 'love'-STAT INF-OM.2sg \neq 'see'-F
 「私たちはあなたに会いたかった」 Tuliitaka kukuona.
- NEG: $dú\text{-}ve \neq kund\text{-}i$ $i\text{-}ku \neq lólí\text{-}á$ $ku / iklólí\text{'}á ku/$
 SM.1pl-PST.STAT \neq 'love'-STAT INF-OM.2sg \neq 'see'-F NEG
 「私たちはあなたに会いたくなかった」 Hatukutaka kukuona.
- (15) AFF: $mú\text{-}ve \neq ré$ $\emptyset\text{-}umbé$ $ng\text{'-}ingi / nyingi/$
 SM-2pl-PST.STAT \neq 'have' CPx.9-'cow' APx.9-'many'
 「あなたたちはたくさんの牛を持っていた」 Mna ng'ombe wengi.

NEG: *mu-ve ≠ re* *∅-umbé* *hatá* *i-imú /imú/* *ku*
 SM-2pl ≠ 'have' CPx.9-'cow' 'even' EPx.9-'one' NEG
 「あなたたちは、牛を一頭も持っていなかった」 *Hamna ng'ombe hata mmoja.*

この時制形は、TAM *ve-* によってマークされる。F は *-i* (ないし一部の化石化した語幹で *-e*)、否定形は文末に置かれる否定詞 *ku* によって表示される。

8.2.3.2 構造の一般化

まず、状態過去形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。

《状態過去》
 SM- | NEG2- | *ve-* | (OM-) | ≠ stem | *-i*

以下に状態過去形の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。H 動詞 ≠ *kund-i* 「欲している、欲しい」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngí-ve ≠ kúnd-i</i>	<i>ngi-ve ≠ kund-í ku</i>
SM.2sg:	<i>ú-ve ≠ kúnd-i</i>	<i>u-ve ≠ kund-í ku</i>
SM.3sg:	<i>é-ve ≠ kúnd-i</i>	<i>e-ve ≠ kund-í ku</i>
SM.1pl:	<i>dú-ve ≠ kúnd-i</i>	<i>du-ve ≠ kund-í ku</i>
SM.2pl:	<i>mú-ve ≠ kúnd-i</i>	<i>mu-ve ≠ kund-í ku</i>
SM.3pl:	<i>vé-ve ≠ kúnd-i ~ vé-ve ≠ kund-í</i>	<i>ve-ve ≠ kund-í ku</i>
structure:	<i>S[́]M-ve ≠ [v[́]]_{stem(H)}-i ~ S[́]M-ve ≠ [v]_{stem(H)}-í</i>	<i>SM-ve ≠ [v]_{stem(H)}-í ku</i>

肯定形においては、現在形とは異なる音調パターンが確認される。すなわち、F *-i* ではなく、語幹初頭で H が実現する。しかし、F *-i* で実現する形も（少なくとも 3pl で）確認されている。否定形では NTP が確認され、F *-i* のみで H が実現する。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	<i>n-é-ve-ng' ≠ kund-i ~ n-é-ve-ng' ≠ kúnd-i</i>	<i>e-ve-ng' ≠ kund-í ku</i>
OM.2sg:	<i>n-é-ve-ku ≠ k^(í)nd-i /névekkúndi/</i>	<i>e-ve-ku ≠ kund-í ku /evekkundí ku/</i>
OM.3sg:	<i>n-é-ve-ń' ≠ kund-i</i>	<i>e-ve-ń' ≠ kund-í ku</i>
OM.1pl:	<i>n-é-ve-du ≠ kúnd-i</i>	<i>e-ve-du ≠ kund-í ku</i>

OM.2pl:	<i>n-é-ve-mu ≠ kúnd-i</i>	<i>e-ve-mu ≠ kund-í ku</i>
OM.3pl:	<i>n-é-ve-va ≠ kúnd-i</i>	<i>e-ve-va ≠ kund-í ku</i>
structure:	[OM = sg] SM-ve-OM ≠ [v] _{stem(H)} -i	SM-ve-OM ≠ [v] _{stem(H)} -í ku
	[OM = pl] SM-ve-OM ≠ [v] _{stem(H)} -i	

肯定形では、SM 位置で IH が実現し、否定形ではそれが現れない (NTP)。肯定形では、OM が単数形の場合、さらに OM 位置でも H が実現する。OM が複数形の場合は、語幹初頭音節で H が実現する。いずれの場合も、状態現在形で現れていた F 位置での H は実現していない。否定形では、F 位置のみで H が実現している。

8.3 未来

未来時制とは、表現される事態が発話時点以降の時点に位置付けられていることを示す時間的な概念である。過去時制同様、バントゥ諸語では、未来時制にも複数の形式的区分を持つものが少なくないが過去時制とは異なり、未来の形式的区分は、必ずしも時間的な距離にしたがった差異であるとは限らない。ロンボ語は、少なくとも二つの未来時制概念を表わす形式があるが、各形式の厳密な機能については、10.1 で再度整理する。

8.3.1 未来 1 (cf. 10.1)

8.3.1.1 概要

未来時制「～する (だろう)」に相当する表現はロンボ語には複数存在するが、話者にとって基本的な形式として認識されているものの一つが次のタイプの表現である。これを (便宜的に) 未来 1 形 (FUT1) と呼ぶ。具体的には、次のような形式である。

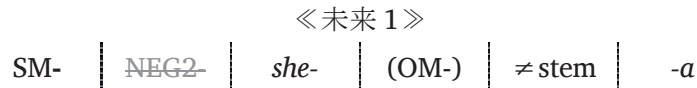
- (16) AFF: *ngí-she-m' ≠ loli-a /ngíshem'lolya/* *Ø-rafiki* *i-ákwa /yákwa/* *n-gáma*
 SM.1sg-FUT1-OM.3sg ≠ 'see'-F CPx.9-'friend' PPx.9-POSS.1sg CPx.9-'tomorrow'
 「私は明日、友達に会う」 Nitamwona rafiki yangu kesho.
- NEG: *ngi-she-m' ≠ loli-a /ngishem'lolya/* *Ø-rafiki* *i-ákwa /yákwa/* *n-gámá* *ku*
 SM.1sg-FUT1-OM.3sg ≠ 'see'-F CPx.9-'friend' PPx.9-POSS.1sg CPx.9-'tomorrow' NEG
 「私は明日、友達に会わない」 Sitamwona rafiki yangu kesho.
- (17) AFF: *mú-she ≠ rund-a* *iki* *lúni*
 SM.2pl-FUT1 ≠ 'do, work'-F 'what' 'today'
 「あなたたちは、今日、何をしますか？」 Mtafanya nini leo?
- NEG: *mú-she ≠ rund-a* *Ø-kasí* *luní* *ku*
 SM.2pl-FUT1 ≠ 'do, work'-F CPx.9-'work' 'today' NEG
 「あなたたちは、今日、仕事をしないでしょ」 Hamtafanya kazi leo.

- (18) AFF: *vé-she-ku ≠koṛ-i-a /véshekkorya/ ki-laló /klaló/ kya Ø-kashíní*
 SM.3pl-FUT1-OM.2sg ≠'cook'-APPL-F CPx.7-'food' ASS.7 CPx.9-'evening'
 「彼らはあなたに夕食を作ってくれるでしょう」 *Watakupikia chakula cha jioni.*
- NEG: *vé-she-ku ≠koṛ-i-a /véshekkorya/ ki-laló /klaló/ kya Ø-kashín'í ku*
 SM.3pl-FUT1-OM.2sg ≠'cook'-APPL-F CPx.7-'food' ASS.7 CPx.9-'evening' NEG
 「彼らはあなたに夕食を作ってくれないでしょう」 *Hawaatakupikia chakula cha jioni.*

この時制形は、TAM *she-* によってマークされる。Fは *-a*、否定形は文末に置かれる否定詞 *ku* によって表示される。

8.3.1.2 構造の一般化

まず、未来1形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。



以下に未来1形の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。まずL動詞 *≠loli-a* 「見る」に各人称形のSMを接合した形式は次のとおりである。

	肯定形		否定形
SM.1sg:	<i>ngí-she ≠loli-a /ngíshelolya/</i>		<i>ngi-she ≠ lólí-á ku</i>
SM.2sg:	<i>ú-she ≠loli-a /úshelolya/</i>		<i>u-she ≠ lólí-á ku</i>
SM.3sg:	<i>n-é-she ≠loli-a /néshelolya/</i>		<i>e-she ≠ lólí-á ku</i>
SM.1pl:	<i>dí-she ≠loli-a /díshelolya/</i>		<i>du-she ≠ lólí-á ku</i>
SM.2pl:	<i>mú-she ≠loli-a /múshelolya/</i>		<i>mu-she ≠ lólí-á ku</i>
SM.3pl:	<i>vé-she ≠loli-a /véshelolya/</i>		<i>ve-she ≠ lólí-á ku</i>
structure:	<i>S^M-she ≠ [vv]_{stem(L)} -a</i>		<i>SM-she ≠ [v^v]_{stem(L)} -á ku</i>

肯定形では、SM位置にIHが実現し、否定形ではそれが現れない(NTP)。否定形において、否定詞 *ku* に起因する高音調は、語幹初頭まで拡張している。

次に、各人称形のOMを接合したパターンを示す。SMは3sgである。

	肯定形		否定形
OM.1sg:	<i>n-é-she-ng' ≠ loli-a /nésheng'lolya/</i>		<i>e-she-ng' ≠ lólí-á ku</i>
OM.2sg:	<i>n-é-she-ku ≠ loli-a /nésheklolya/</i>		<i>e-she-ku ≠ lólí-á ku /esheklólíá ku/</i>
OM.3sg:	<i>n-é-she-m' ≠ loli-a /néshem'lolya/</i>		<i>e-she-m' ≠ lólí-á ku</i>

OM.1pl:	<i>n-é-she-du ≠ lóli-a /néshedulólya/</i>	<i>e-she-du ≠ lóli-á ku</i>
OM.2pl:	<i>n-é-she-mu ≠ lóli-a /néshemulólya/</i>	<i>e-she-mu ≠ lóli-á ku</i>
OM.3pl:	<i>n-é-she-va ≠ lóli-a /néshevalólya/</i>	<i>e-she-va ≠ lóli-á ku</i>
structure:	[OM = sg] $\acute{S}M-she-OM \neq [vv]_{stem(L)}-a$ [OM = pl] $\acute{S}M-she-OM \neq [v\acute{v}]_{stem(L)}-a$	SM-she-OM $\neq [v\acute{v}]_{stem(L)}-á ku$

基本音調パターンは、OMを取らない構造と同様である。また、OMが複数形である場合の、語幹頭音節でのH実現も、他の時制形で規則的に確認される場所である。

次に、H動詞 $\neq kab-a$ 「叩く」に各人称形のSMを接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngí-she ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>ngi-she ≠ kab-á ku</i>
SM.2sg:	<i>ú-she ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>u-she ≠ kab-á ku</i>
SM.3sg:	<i>é-she ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>e-she ≠ kab-á ku</i>
SM.1pl:	<i>dú-she ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>du-she ≠ kab-á ku</i>
SM.2pl:	<i>mú-she ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>mu-she ≠ kab-á ku</i>
SM.3pl:	<i>vé-she ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>ve-she ≠ kab-á ku</i>
structure:	$\acute{S}M-she \neq [v]_{stem(H)}-á$	SM-she $\neq [v]_{stem(H)}-á ku$

他の時制形でも繰り返し現れてきたパターンである。肯定形においてはSMでIHが実現し、否定形ではそれが実現しない(NTP)。また、肯定形においては、語彙的なHとみられる高音調が動詞語末で実現する(ただし、音声的な高さは初頭のそれに比べ低い)。否定形の場合はHが動詞語末のみで実現している。

次に、各人称形のOMを接合したパターンを示す。SMは3sgである。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	<i>n-é-she-ng' ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>e-she-ng' ≠ kab-á ku</i>
OM.2sg:	<i>n-é-she-ku ≠ kab-⁽⁴⁾á' /néshekkab⁽⁴⁾á' /</i>	<i>e-she-ku ≠ kab-á ku /eshekkabá ku /</i>
OM.3sg:	<i>n-é-she-m' ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>e-she-m' ≠ kab-á ku</i>
OM.1pl:	<i>n-é-she-du ≠ kab-⁽⁴⁾á' ~ n-é-she-du ≠ káb-a</i>	<i>e-she-du ≠ kab-á ku</i>
OM.2pl:	<i>n-é-she-mu ≠ kab-⁽⁴⁾á' ~ n-é-she-mu ≠ káb-a</i>	<i>e-she-mu ≠ kab-á ku</i>
OM.3pl:	<i>n-é-she-va ≠ kab-⁽⁴⁾á' ~ n-é-she-va ≠ káb-a</i>	<i>e-she-va ≠ kab-á ku</i>
structure:	$\acute{S}M-she-OM \neq [v]_{stem(H)}-(4)á'$ ~ [OM = pl] $\acute{S}M-she-OM \neq [v]_{stem(H)}-a$	SM-she-OM $\neq [v]_{stem(H)}-á ku$

否定形は、他の時制形におけるのと同様、NTPが確認され、動詞語末のみでHが実現している。肯定形

については、SM 位置での IH に加え、≠*kab* が有する語彙的な H と想定されるものが、F で実現する場合と、語幹音節で実現する場合の両方が確認されている（同様のパターンは、近過去時制等で確認される）。

8.3.2 未来 2

8.3.2.1 概要

未来 1 形に比べ、より遠い未来を表現するとされる形式が、未来 2 形 (FUT2) である。この形式の具体例は、次のようである。

- (19) AFF: *ngi-é-m' ≠loli-a /ngeém'lolya/* *Ø-rafikí* *i-akwa /yakwa/* *mw-aká-ni*
 SM.1sg-FUT2-OM.3sg≠'see'-F CPx.9-'friend' PPx.9-POSS.1sg CPx.3-'year'-LOC
 「私は来年、友達に会う」 Nitamwona rafiki yangu mwakani.
- NEG: *ngi-e-m' ≠loli-a /ngeem'lolya/* *Ø-rafikí* *i-akwa /yakwa/* *mw-aká-n'í* *ku*
 SM.1sg-FUT2-OM.3sg≠'see'-F CPx.9-'friend' PPx.9-POSS.1sg CPx.3-'year'-LOC NEG
 「私は来年、友達に会わない」 Sitamwona rafiki yangu mwakani.
- (20) AFF: *lí* *mu-é ≠mari-a /muémarya/* *Ø-shulé* *mu-é ≠rund-a* *iki*
 'when' SM.2pl-FUT2≠'finish'-F CPx.9-'school' SM.2pl-FUT2≠'do, work'-F 'what'
 「学校を卒業するとき、あなたたちは何をしますか」 Mtakapomaliza shule, Mtafanya nini?
- NEG: *mu-e ≠rund-a* *Ø-kasí* *mw-aká-n'í* *ku*
 SM.2pl-FUT2≠'do, work'-F CPx.9-'work' CPx.3-'year'-LOC NEG
 「あなたたちは、来年、仕事をしないでしょ
- (21) AFF: *ve-é-ku ≠kor-i-a /veékkorya/* *ki-laló /klaló/* *kya* *Ø-kashíni*
 SM.3pl-FUT2-OM.2sg≠'cook'-APPL-F CPx.7-'food' ASS.7 CPx.9-'evening'
 「彼らはあなたに夕食を作ってくれるでしょう」 Watakupikia chakula cha jioni.
- NEG: *ve-é-ku ≠kor-i-a /veékkorya/* *ki-laló /klaló/* *kya* *Ø-kashín'í* *ku*
 SM.3pl-FUT2-OM.2sg≠'cook'-APPL-F CPx.7-'food' ASS.7 CPx.9-'evening' NEG
 「彼らはあなたに夕食を作ってくれないでしょう」 Hawaatakupikia chakula cha jioni.

この時制形は、TAM *e-* によってマークされる。F は *-a*、否定形は文末に置かれる否定詞 *ku* によって表示される。

8.3.2.2 構造の一般化

まず、未来 2 形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。

《未来 2》					
SM-	NEG2-	e-	(OM-)	≠ stem	-a

以下に未来2形の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。まずL動詞 ≠*loli-a*「見る」に各人称形のSMを接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngi-é ≠loli-a /ngeélolya/</i>	<i>ngi-é ≠ lólí-á ku /ngeélólíá ku/</i>
SM.2sg:	<i>u-é ≠loli-a /uélolya/</i>	<i>u-é ≠ lólí-á ku</i>
SM.3sg:	<i>n-e-é ≠loli-a /neélolya/</i>	<i>e-é ≠ lólí-á ku</i>
SM.1pl:	<i>du-é ≠loli-a /duélolya/</i>	<i>du-é ≠ lólí-á ku</i>
SM.2pl:	<i>mu-é ≠loli-a /muélolya/</i>	<i>mu-é ≠ lólí-á ku</i>
SM.3pl:	<i>ve-é ≠loli-a /veélolya/</i>	<i>ve-é ≠ lólí-á ku</i>
structure:	SM-é ≠ [vv] _{stem(L)} -a	SM-é ≠ [v́v́] _{stem(L)} -á ku

この形式で特徴的なのは、肯定形のSM位置ではなくTAM位置でIHが実現するということである（ただし、SM位置で実現する場合もある）。そして、否定形でもTAM位置でのIHは確認される。さらにkuに起因すると想定される高音調が語幹音節まで遡及的に拡張する。

次に、各人称形のOMを接合したパターンを示す。SMは3sgである。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	<i>n-e-é-ng' ≠loli-a /neéng'lolya/</i>	<i>e-é-ng' ≠ lólí-á ku</i>
OM.2sg:	<i>n-e-é-ku ≠loli-a /neéklolya/</i>	<i>e-é-kú ≠ lólí-á ku /eéklólíá ku/</i>
OM.3sg:	<i>n-e-é-m' ≠loli-a /neém'lolya/</i>	<i>e-é-m' ≠ lólí-á ku</i>
OM.1pl:	<i>n-e-é-du ≠ lólí-a /neédulólolya/</i>	<i>e-é-dú ≠ lólí-á ku</i>
OM.2pl:	<i>n-e-é-mu ≠ lólí-a /neémulólolya/</i>	<i>e-é-mú ≠ lólí-á ku</i>
OM.3pl:	<i>n-e-é-va ≠ lólí-a /neévalólolya/</i>	<i>e-é-vá ≠ lólí-á ku</i>
structure:	[OM = sg] SM-é-OM ≠ [vv] _{stem(L)} -a [OM = pl] SM-é-OM ≠ [v́v́] _{stem(L)} -a	SM-é-OM' ≠ [v́v́] _{stem(L)} -á ku

肯定形では、TAM位置でIHが実現したうえで、複数形のOMを接合する場合は語幹初頭音節でもHが実現する。否定形の場合は、OMを取らない形と同様、TAM位置でのIHが確認され、さらに語末までHが持続する。

次に、H動詞 ≠*kab-a*「叩く」に各人称形のSMを接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngi-é ≠ kab-⁽⁴⁾á' /ngeékab⁽⁴⁾á'/</i>	<i>ngi-e ≠ kab-á ku /ngeekabá ku/</i>
SM.2sg:	<i>u-é ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>u-e ≠ kab-á ku</i>

SM.3sg:	$n-e-é \neq kab-{}^{(4)}\acute{a}$	$e-e \neq kab-á ku$
SM.1pl:	$du-é \neq kab-{}^{(4)}\acute{a}$	$du-e \neq kab-á ku$
SM.2pl:	$mu-é \neq kab-{}^{(4)}\acute{a}$	$mu-e \neq kab-á ku$
SM.3pl:	$ve-é \neq kab-{}^{(4)}\acute{a}$	$ve-e \neq kab-á ku$
structure:	$SM-é \neq [v]_{\text{stem(H)}}-{}^{(4)}\acute{a}$	$SM-e \neq [v]_{\text{stem(H)}}-á ku$

このパターンは、TAM 位置での IH が、否定形において実現しておらず NTP にしたがつている。肯定形における語彙的な H の実現、ku の拡張が語末にとどまる点は、他の H 動詞のパターンと同様である。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	$n-{}^{(e)}-é-ng' \neq kab-{}^{(4)}\acute{a}$	$e-e-ng' \neq kab-á ku$
OM.2sg:	$n-{}^{(e)}-é-kú \neq kab-{}^{(4)}\acute{a} / néékkab{}^{(4)}\acute{a} /$	$e-e-ku \neq kab-á ku / eekkabá ku /$
OM.3sg:	$n-{}^{(e)}-é-m' \neq kab-{}^{(4)}\acute{a}$	$e-e-m' \neq kab-á ku$
OM.1pl:	$n-{}^{(e)}-é-du \neq kab-{}^{(4)}\acute{a} \sim n-{}^{(e)}-é-du \neq káb-a$	$e-e-du \neq kab-á ku$
OM.2pl:	$n-{}^{(e)}-é-mu \neq kab-{}^{(4)}\acute{a} \sim n-{}^{(e)}-é-mu \neq káb-a$	$e-e-mu \neq kab-á ku$
OM.3pl:	$n-{}^{(e)}-é-va \neq kab-{}^{(4)}\acute{a} \sim n-{}^{(e)}-é-va \neq káb-a$	$e-e-va \neq kab-á ku$
structure:	$[OM = \text{sg}] \text{ } (SM-é-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-{}^{(4)}\acute{a})$ $[OM = \text{pl}] \text{ } (SM-é-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-{}^{(4)}\acute{a})$ $\sim (SM-é-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-a)$	$SM-e-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-á ku$

肯定形において、SM 位置でも IH が実現することがあるが、これは音声的なユレと見てよさそうである。OM が単数形の場合は OM においても H が実現する。また、語彙的な H の実現位置のユレも確認される。否定形の場合は、安定的に、F 位置で H が実現するのみである。

8.4 時制マーカのまとめ

本章で扱った TAM, すなわち概念としての時制を表示する TAM, および F を整理すれば次のようになる。TAM スロットを、TAM₀, TAM₁, TAM₂ と分けているのは、複数の TAM を補充したときの相対的な位置関係を反映したものであるが、それについては 9.5, 10.1 で再度整理する。

表 8-1 : 時制マーカーの一覧 (暫定)

	TAM ₀	TAM ₁	TAM ₂	[stem]	FV
現在 PRS		∅-			-a
状態現在 PRS.STAT					-i
近過去 PST1		le-			-a
遠過去 PST2					-ie
状態過去 PST.STAT		ve-			-i
未来 1 FUT1			she-		-a
未来 2 FUT2		e-			-a

9. アスペクト形

アスペクトとは、述部によって表現される事態内の、時間的段階にかかわる文法カテゴリーである。ここでは、通バントゥ諸語的に一般的なアスペクトカテゴリーである、進行、完了（および完結）、習慣、継起を表現する形式を扱う。

9.1 進行

9.1.1 概要

事態が、発話時区間においてまさに生じている、あるいは持続しているというアスペクト概念を進行 (progressive, PROGR) と呼ぶ。この概念を表現する具体例は、次のようである。

- (1) AFF: *ngi-í ≠eleke-a (~ngí-i ≠eleke-a)* \emptyset -*shúle* /ngítelekya shúle/
 SM.1sg-PROGR ≠ 'go toward'-F CPx.9-'school'
 「私は学校に向かっている (行くところだ)」 *Ninaelekea shule.*
- NEG: *ngi-i ≠eleke-a* \emptyset -*shulé* *ku* /ngítelekya shulé ku/
 SM.1sg-PROGR ≠ 'go toward'-F CPx.9-'school' NEG
 「私は学校に向かっていない (行くところではない)」 *Sielekei shule.*
- (2) AFF: *n-e-í-ng' ≠kor-i-a /neíng'korya/* *ki-laló /klaló/* *sasá ifi*
 ASSERT-SM.3sg-PROGR-OM.1sg ≠ 'cook'-APPL-F CPx.7-'food' 'right now'
 「彼 (女) は今、私にごはんを作ってくれている」 *Ananipikia chakula sasa hivi.*
- NEG: *e-í-ng' ≠kor-i-a /neíng'korya/* *ki-laló /klaló/* *sasá ifí* *ku*
 SM.3sg-PROGR-OM.1sg ≠ 'cook'-APPL-F CPx.7-'food' 'right now' NEG
 「彼 (女) は今、私にごはんを作っていない」 *Hanipikii chakula sasa hivi.*
- (3) AFF: *m'-dí* *shú* *u-í ≠u-a (ú-i ≠u-a) /úúwa ~ úúwa/*
 CPx.3-'tree' DEM.N.3 SM.3-PROGR ≠ 'fall'-F
 「この木は、(今まさに) 倒れている」 *Mti huu unaanguka.*
- NEG: *m'-dí* *shú* *'ú-í ≠'ú-á ('ú'í'úw'á)* *ku*
 CPx.3-'tree' DEM.N.3 SM.3-PROGR ≠ 'fall'-F NEG
 「この木は、倒れて (きて) いない」 *Mti huu hauanguki.*

このアスペクト形は、TAM *i-* によってマークされる。F は *-a*、否定形は文末に置かれる否定詞 *ku* によって表示される。

9.1.2 構造の一般化

まず、進行形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。

《進行》

SM- | NEG2- | i- | (OM-) | ≠ stem | -a

以下に進行形の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。まず L 動詞 ≠*loli-a* 「見る」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngi-í ≠ loli-a / ngeílolya/</i>	<i>ngi-í ≠ lólí-á ku</i>
SM.2sg:	<i>u-í ≠ loli-a / uúlolya/</i>	<i>u-í ≠ lólí-á ku</i>
SM.3sg:	<i>n-e-í ≠ loli-a / neflolya/</i>	<i>e-í ≠ lólí-á ku</i>
SM.1pl:	<i>du-í ≠ loli-a / dueílolya/</i>	<i>du-í ≠ lólí-á ku</i>
SM.2pl:	<i>mu-í ≠ loli-a / muúlolya/</i>	<i>mu-í ≠ lólí-á ku</i>
SM.3pl:	<i>ve-í ≠ loli-a / veílolya/</i>	<i>ve-í ≠ lólí-á ku</i>
structure:	SM-í ≠ [vv] _{stem(L)} -a	SM-í ≠ [v'v] _{stem(L)} -á ku

未来 2 形同様、SM 位置ではなく、TAM 位置で IH が実現している。否定形では、その H が実現するうえに、*ku* に起因すると想定される拡張的な H が語幹頭音節まで持続する。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	<i>n-e-í-ng' ≠ loli-a / neíng'lolya/</i>	<i>e-i-ng' ≠ lólí-á ku</i>
OM.2sg:	<i>n-e-í-ku ≠ loli-a / neíklolya/</i>	<i>e-i-ku ≠ lólí-á ku / eiklólíá ku/</i>
OM.3sg:	<i>n-e-í-m' ≠ loli-a / neím'lolya/</i>	<i>e-i-m' ≠ lólí-á ku</i>
OM.1pl:	<i>n-e-í-du ≠ loli-a / neídulólolya/</i>	<i>e-i-du ≠ lólí-á ku</i>
OM.2pl:	<i>n-e-í-mu ≠ loli-a / neímulólolya/</i>	<i>e-i-mu ≠ lólí-á ku</i>
OM.3pl:	<i>n-e-í-va ≠ loli-a / neívalólolya/</i>	<i>e-i-va ≠ lólí-á ku</i>
structure:	[OM = sg] SM-í-OM ≠ [vv] _{stem(L)} -a [OM = pl] SM-í-OM ≠ [v'v] _{stem(L)} -a	SM-i-OM ≠ [v'v] _{stem(L)} -á ku

ここでは、(未来 2 形とは異なり)規則的なパターンが確認される。肯定形では TAM 位置で IH が実現し、否定形では実現しない (NTP)。また、肯定形において、複数形 OM の H が語幹初頭音節で実現している。否定形における *ku* の遡及的音調拡張は、語幹初頭音節まで持続している。

次に、H 動詞 ≠*kab-a* 「叩く」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	<i>ngi-í ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>ngi-i ≠ kab-á ku</i>
SM.2sg:	<i>u-í ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>u-i ≠ kab-á ku</i>
SM.3sg:	<i>n-e-í ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>e-i ≠ kab-á ku</i>
SM.1pl:	<i>du-í ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>du-i ≠ kab-á ku</i>
SM.2pl:	<i>mu-í ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>mu-i ≠ kab-á ku</i>
SM.3pl:	<i>ve-í ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>ve-i ≠ kab-á ku</i>
structure:	SM-í ≠ [v] _{stem(H)} - ⁽⁴⁾ á'	SM-i ≠ [v] _{stem(H)} -á ku

これも規則的な音調パターンである。肯定形においては TAM 位置で IH が実現し、否定形ではそれが実現しない (NTP)。また、肯定形においては、語彙的な H とみられる高音調が動詞語末で実現する（ただし、音声的な高さは初頭のそれに比べ低い）。否定形の場合は H が動詞語末のみで実現している。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	<i>n-e-í-ng' ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>e-i-ng' ≠ kab-á ku</i>
OM.2sg:	<i>n-e-í-kú ≠ kab-⁽⁴⁾á' /neíkkab⁽⁴⁾á' /</i>	<i>e-i-ku ≠ kab-á ku /eekkabá ku /</i>
OM.3sg:	<i>n-e-í-n' ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>e-i-m' ≠ kab-á ku</i>
OM.1pl:	<i>n-e-í-du ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>e-i-du ≠ kab-á ku</i>
OM.2pl:	<i>n-e-í-mu ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>e-i-mu ≠ kab-á ku</i>
OM.3pl:	<i>n-e-í-va ≠ kab-⁽⁴⁾á'</i>	<i>e-i-va ≠ kab-á ku</i>
structure:	[OM = sg] SM-í-OM' ≠ [v] _{stem(H)} - ⁽⁴⁾ á'	SM-i-OM ≠ [v] _{stem(H)} -á ku
	[OM = pl] SM-í-OM ≠ [v] _{stem(H)} - ⁽⁴⁾ á'	

肯定形においては、単数形 OM と複数形 OM でパターンが異なる。前者の場合は、TAM 位置の IH に加え、OM 位置でも（拡張的に）H が実現する。後者の場合は、(L 動詞であれば語幹初頭音節で H が実現するところであるが) TAM 位置の IH のみを実現する。否定形では、H が動詞語末のみで実現している。

9.2 完了および完結

9.2.1 概要

事態は発話時点以前に終了しているが、その事態が発話時点において関連性をもつ、あるいは事態が発話時点において終了するという時間的段階を、一般に完了 (anterior, ANT) と呼ぶが、ロンボ語では、さらにその事態が完全に終了して (典型的には) 再度繰り返されることがない、という概念を表わす形式もある。これを完結 (completive, COMP) と呼ぶ。両者は、概念的にも形式的にも共通するとこ

ろがあるので、ここでまとめて扱うこととする。具体例は次のとおりである。

- (4) AFF-A: $u-\bar{a} \neq tengenes-a / wátengnesa/$ $\bar{i}ki$
 SM.2sg-ANT \neq 'make'-F 'what'
 「あなたは何かを作ったの？」 Umetengeneza nini?
 AFF-C: $u-\bar{a}-me \neq tengenesa / wámetengnesa/$ $\bar{i}ki$
 SM.2sg-ANT-COMP \neq 'make'-F 'what'
 「あなたは何かを作り終えた（作っちゃった）の？」 Umeshatengeneza nini?
 NEG: $u-\bar{a} \neq tengenes-a / wátengnesa/$ $badó$ ku
 SM.2sg-ANT \neq 'make'-F 'yet, still' NEG
 「あなたはまだ作っていない」 Hujatengeneza bado.
 cf. $u-a \neq téngénés-á ku / waténgnésá ku/$ 「あなたは（まだ）作っていない」
- (5) AFF-A: $mu-\bar{a}-va \neq fúúndish-a / mwávafúúndisha/$ $ki-rómbo / křómbo/$
 SM.2sg-ANT-OM.3pl. \neq 'teach'-F CPx.7-'Rombo'
 「あなたたちは彼らにロンボ語を教えた」 Mmewafundisha Kirombo.
 AFF-C: $mu-\bar{a}-me-va \neq fúúndish-a / mwámevafúúndisha/$ $ki-rómbo / křómbo/$
 SM.2sg-ANT-COMP-OM.3pl. \neq 'teach'-F CPx.7-'Rombo'
 「あなたたちは彼らにロンボ語を教え終わった」 Mmeshawafundisha Kirombo.
 NEG: $mu-\bar{a}-va \neq fúúndish-á / mwávafúúndishá/$ ku
 SM.2sg-ANT-OM.3pl. \neq 'teach'-F NEG
 「あなたたちは彼らにまだ教えていない」 Hamjawafundisha.
- (6) AFF-A: $n-guo$ $si-afó / safó/$ $si-\bar{a} \neq um-^á / sáum^á/$
 CPx.10-'cloth' PPx.10-POSS.2sg SM.10-ANT \neq 'be dried'-F
 「あなたの服は乾いた」 Nguo zako zimekauka.
 AFF-C: $n-guo$ $si-afó / safó/$ $si-\bar{a}-me \neq ^úm-^á / sáme^úm^á/$
 CPx.10-'cloth' PPx.10-POSS.2sg SM.10-ANT-COMP \neq 'be dried'-F
 「あなたの服は乾いた」 Nguo zako zimekauka.
 NEG: $n-guo$ $si-afó / safó/$ $si-\bar{a} \neq um-^á / sáum^á/$ ku
 CPx.10-'cloth' PPx.10-POSS.2sg SM.10-ANT \neq 'be dried'-F NEG
 「あなたの服は（まだ）乾いていない」 Nguo zako hazijakauka.

完了は、TAM $a-$ によってマークされるが、この TAM は SM と母音融合を起こす。母音融合の規則は、次のように一般化できる ($C_{[+alv]}$ は、歯茎音を、 $C_{[-alv]}$ は非歯茎音を指す)。

表 9-1 : SM と TAM₀ -a の融合規則

SM-	TAM ₀	
(C)u-	a-	→ (C)wa
C _[+alv] i-		→ Ca
(C _[-alv])i-		→ (C)ya
Ca-		→ Ca
(C)e-		→ (C)a

また完結は *a-me-* という TAM 連続で実現する。ただし、この構造を否定形にすることはできない。体系的に言えば、否定形においては、完了と完結の対立が中和しているということになる。

9.2.2 構造の一般化

まず、一般現在形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。

		《完了》			
SM-	NEG2-	\widehat{a} -	(OM-)	≠ stem	-a
		《完結》			
SM-	NEG2-	$\widehat{a-me}$ -	(OM-)	≠ stem	-a

以下に一般現在形の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。まず L 動詞 ≠ *loli-a* 「見る」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	A: <i>ngi-\widehat{a} ≠ loli-a / ngálolya/</i>	<i>ngi-\widehat{a} ≠ lólí-á ku / ngálólíá ku/</i>
	C: <i>ngi-$\widehat{a-me}$ ≠ loli-a / ngámelolya/</i>	
SM.2sg:	A: <i>u-\widehat{a} ≠ loli-a / wálolya/</i>	<i>u-\widehat{a} ≠ lólí-á ku / wálólíá ku/</i>
	C: <i>u-$\widehat{a-me}$ ≠ loli-a / wámelolya/</i>	
SM.3sg:	A: <i>n-e-\widehat{a} ≠ loli-a / nálolya/</i>	<i>e-\widehat{a} ≠ lólí-á ku / álólíá ku/</i>
	C: <i>n-e-$\widehat{a-me}$ ≠ loli-a / námelolya/</i>	
SM.1pl:	A: <i>du-\widehat{a} ≠ loli-a / dwálolya/</i>	<i>du-\widehat{a} ≠ lólí-á ku / dwálólíá ku/</i>
	C: <i>du-$\widehat{a-me}$ ≠ loli-a / dwámelolya/</i>	
SM.2pl:	A: <i>mu-\widehat{a} ≠ loli-a / mwálolya/</i>	<i>mu-\widehat{a} ≠ lólí-á ku / mwálólíá ku/</i>
	C: <i>mu-$\widehat{a-me}$ ≠ loli-a / mwámelolya/</i>	

SM.3pl:	A:	$ve\text{-}\bar{a} \neq \text{loli-a} / \text{v}\bar{a}lolya/$	$ve\text{-}\bar{a} \neq \text{l}\acute{o}l\acute{i}\text{-}\acute{a} \text{ ku} / \text{v}\bar{a}l\acute{o}l\acute{i}\acute{a} \text{ ku}/$
	C:	$ve\text{-}\bar{a}\text{-me} \neq \text{loli-a} / \text{v}\bar{a}melolya/$	
structure:	A:	$SM\text{-}\bar{a} \neq [\text{vv}]_{\text{stem(L)}}\text{-a}$	$SM\text{-}\bar{a} \neq [\acute{v}\acute{v}]_{\text{stem(L)}}\text{-}\acute{a} \text{ ku}$
	C:	$SM\text{-}\bar{a}\text{-me} \neq [\text{vv}]_{\text{stem(L)}}\text{-a}$	

まず、この時制形では NTP が適用されない。すなわち、肯定形では初頭音節に IH が実現するが、否定形でもそれが現れる。そして、否定詞 *ku* に起因する高音調は、語幹初頭まで拡張している。また、完結の *me-* が挿入されても、音調パターンは変わらない。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形		
SM.1sg:	A:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-ng}' \neq \text{loli-a} / \text{n}\bar{a}ng'lolya/$	$e\text{-}\bar{a}\text{-ng}' \neq \text{l}\acute{o}l\acute{i}\text{-}\acute{a} \text{ ku} / \text{a}\bar{ng}'l\acute{o}l\acute{i}\acute{a} \text{ ku}/$	
	C:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-me-ng}' \neq \text{loli-a} / \text{n}\bar{a}meng'lolya/$		
SM.2sg:	A:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-ku} \neq \text{loli-a} / \text{n}\bar{a}klolya/$	$e\text{-}\bar{a}\text{-ku} \neq \text{l}\acute{o}l\acute{i}\text{-}\acute{a} \text{ ku} / \text{a}\bar{kl}\acute{o}l\acute{i}\acute{a} \text{ ku}/$	
	C:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-me-ku} \neq \text{loli-a} / \text{n}\bar{a}meklolya/$		
SM.3sg:	A:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-m}' \neq \text{loli-a} / \text{n}\bar{a}m'lolya/$	$e\text{-}\bar{a}\text{-m}' \neq \text{l}\acute{o}l\acute{i}\text{-}\acute{a} \text{ ku} / \text{a}\bar{m}'l\acute{o}l\acute{i}\acute{a} \text{ ku}/$	
	C:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-me-m}' \neq \text{loli-a} / \text{n}\bar{a}mem'lolya/$		
SM.1pl:	A:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-du} \neq \text{l}\acute{o}l\acute{i}\text{-}\acute{a} / \text{n}\bar{a}dul\acute{o}l\acute{i}\acute{a} /$	$e\text{-}\bar{a}\text{-du} \neq \text{l}\acute{o}l\acute{i}\text{-}\acute{a} \text{ ku} / \text{a}\bar{dul}\acute{o}l\acute{i}\acute{a} \text{ ku}/$	
	C:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-me-du} \neq \text{l}\acute{o}l\acute{i}\text{-}\acute{a} / \text{n}\bar{a}medul\acute{o}l\acute{i}\acute{a} /$		
SM.2pl:	A:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-mu} \neq \text{loli-a} / \text{n}\bar{a}mul\acute{o}l\acute{i}\acute{a} /$	$e\text{-}\bar{a}\text{-mu} \neq \text{l}\acute{o}l\acute{i}\text{-}\acute{a} \text{ ku} / \text{a}\bar{mul}\acute{o}l\acute{i}\acute{a} \text{ ku}/$	
	C:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-me-mu} \neq \text{loli-a} / \text{n}\bar{a}memul\acute{o}l\acute{i}\acute{a} /$		
SM.3pl:	A:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-va} \neq \text{loli-a} / \text{n}\bar{a}val\acute{o}l\acute{i}\acute{a} /$	$e\text{-}\bar{a}\text{-va} \neq \text{l}\acute{o}l\acute{i}\text{-}\acute{a} \text{ ku} / \text{a}\bar{val}\acute{o}l\acute{i}\acute{a} \text{ ku}/$	
	C:	$n\text{-}e\text{-}\bar{a}\text{-me-va} \neq \text{loli-a} / \text{n}\bar{a}meval\acute{o}l\acute{i}\acute{a} /$		
structure:	A:	$[\text{OM} = \text{sg}] SM\text{-}\bar{a}\text{-OM} \neq [\text{vv}]_{\text{stem(L)}}\text{-a}$	$[\text{OM} = \text{sg}] SM\text{-}\bar{a}\text{-OM}' \neq [\acute{v}\acute{v}]_{\text{stem(L)}}\text{-}\acute{a} \text{ ku}$	
		$[\text{OM} = \text{pl}] SM\text{-}\bar{a}\text{-OM} \neq [\acute{v}\acute{v}]_{\text{stem(L)}}\text{-a}$		
	C:	$[\text{OM} = \text{sg}] SM\text{-}\bar{a}\text{-me-OM} \neq [\text{vv}]_{\text{stem(L)}}\text{-a}$		$[\text{OM} = \text{pl}] SM\text{-}\bar{a}\text{-OM} \neq [\acute{v}\acute{v}]_{\text{stem(L)}}\text{-}\acute{a} \text{ ku}$
		$[\text{OM} = \text{pl}] SM\text{-}\bar{a}\text{-me-OM} \neq [\acute{v}\acute{v}]_{\text{stem(L)}}\text{-a}$		

肯定形では、SM 位置で IH が実現したうえで、複数形の OM を接合する場合は語幹初頭音節でも H が実現する。また、完結の *me-* が挿入されても、音調パターンは変わらない。否定形の場合は、ここでも NTP は適用されず、*ku* の遡及的音調拡張は、語幹初頭音節まで伸びている。

次に、H 動詞 $\neq kab\text{-}a$ 「叩く」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	A: $ngi-\bar{a} \neq kab^{-(\acute{a})} / ngákab^{(\acute{a})} /$ C: $ngi-\bar{a}-me \neq kab^{-(\acute{a})} / ngámekab^{(\acute{a})} /$	$ngi-\bar{a} \neq kab-\acute{a} ku / ngákabá ku /$
SM.2sg:	A: $u-\bar{a} \neq kab^{-(\acute{a})} / wákab^{(\acute{a})} /$ C: $u-\bar{a}-me \neq kab^{-(\acute{a})} / wámekab^{(\acute{a})} /$	$u-\bar{a} \neq kab-\acute{a} ku / wákabá ku /$
SM.3sg:	A: $n-e-\bar{a} \neq kab^{-(\acute{a})} / nákab^{(\acute{a})} /$ C: $n-e-\bar{a}-me \neq kab^{-(\acute{a})} / námekab^{(\acute{a})} /$	$n-e-\bar{a} \neq kab-\acute{a} ku / nákabá ku /$
SM.1pl:	A: $du-\bar{a} \neq kab^{-(\acute{a})} / dwákab^{(\acute{a})} /$ C: $du-\bar{a}-me \neq kab^{-(\acute{a})} / dwámekab^{(\acute{a})} /$	$du-\bar{a} \neq kab-\acute{a} ku / dwákabá ku /$
SM.2pl:	A: $mu-\bar{a} \neq kab^{-(\acute{a})} / mwákab^{(\acute{a})} /$ C: $mu-\bar{a}-me \neq kab^{-(\acute{a})} / mwámekab^{(\acute{a})} /$	$mu-\bar{a} \neq kab-\acute{a} ku / mwákabá ku /$
SM.3pl:	A: $ve-\bar{a} \neq kab^{-(\acute{a})} / vákab^{(\acute{a})} /$ C: $ve-\bar{a}-me \neq kab^{-(\acute{a})} / vámekab^{(\acute{a})} /$	$ve-\bar{a} \neq kab-\acute{a} ku / vákabá ku /$
structure:	A: $SM-\bar{a} \neq [v]_{\text{stem(H)}}^{-(\acute{a})}$ C: $SM-\bar{a}-me \neq [v]_{\text{stem(H)}}^{-(\acute{a})}$	$SM-\bar{a} \neq [v]_{\text{stem(H)}}-\acute{a} ku$

この構造でも NTP は適用されない。つまり，肯定形において実現する SM 位置の IH が，否定形でも実現する。肯定形においては，語彙的な H とみられる高音調が動詞語末で実現する（ただし，音声的な高さは初頭のそれに比べ低い）。また，完結の *me-* が挿入されても，音調パターンは変わらない。否定形の場合は H が動詞語末のみで実現している。

次に，各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	A: $n-e-\bar{a}-ng' \neq kab^{-(\acute{a})} / nánng'kab^{(\acute{a})} /$ C: $n-e-\bar{a}-me-(ng') \neq kab^{-(\acute{a})} / náme(ng')kab^{(\acute{a})} /$	$e-\bar{a}-ng' \neq kab-\acute{a} ku / áng'kabá ku /$
SM.2sg:	A: $n-e-\bar{a}-k'ú \neq kab^{-(\acute{a})} / nákkab^{(\acute{a})} /$ C: $n-e-\bar{a}-me-k'ú \neq kab^{-(\acute{a})} / námekkab^{(\acute{a})} /$	$e-\bar{a}-ku \neq kab-\acute{a} ku / ákkabá ku /$
SM.3sg:	A: $n-e-\bar{a}-m' \neq kab^{-(\acute{a})} / nám'kab^{(\acute{a})} /$ C: $n-e-\bar{a}-me-(m') \neq kab^{-(\acute{a})} / náme(m')kab^{(\acute{a})} /$	$e-\bar{a}-m' \neq kab-\acute{a} ku / ám'kabá ku /$
SM.1pl:	A: $n-e-\bar{a}-du \neq kab^{-(\acute{a})} / nádúkab^{(\acute{a})} /$ C: $n-e-\bar{a}-me-du \neq kab^{-(\acute{a})} / námedúkab^{(\acute{a})} /$	$e-\bar{a}-du \neq kab-\acute{a} ku / ádúkabá ku /$
SM.2pl:	A: $n-e-\bar{a}-mu \neq kab^{-(\acute{a})} / námúkab^{(\acute{a})} /$ C: $n-e-\bar{a}-me-mu \neq kab^{-(\acute{a})} / námemukab^{(\acute{a})} /$	$e-\bar{a}-mu \neq kab-\acute{a} ku / ámúkabá ku /$

SM.3pl:	A:	$n-e-\bar{a}-va \neq kab-^{(4)}\acute{a} / n\acute{a}vakab^{(4)}\acute{a} /$	$e-\bar{a}-va \neq kab-\acute{a} ku / \acute{a}vakab\acute{a} ku /$
	C:	$n-e-\bar{a}-me-va \neq kab-^{(4)}\acute{a} / n\acute{a}mevakab^{(4)}\acute{a} /$	
structure:	A:	[OM = sg] $SM-\bar{a}-(OM) \neq [v]_{stem(H)}-^{(4)}\acute{a}$	[OM = sg] $SM-\bar{a}-OM \neq [v]_{stem(H)}-\acute{a} ku$
		[OM = pl] $SM-\bar{a}-OM \neq [v]_{stem(H)}-^{(4)}\acute{a}$	
	C:	[OM = sg] $SM-\bar{a}-me-(OM) \neq [v]_{stem(H)}-^{(4)}\acute{a}$	[OM = pl] $SM-\bar{a}-OM \neq [v]_{stem(H)}-\acute{a} ku$
		[OM = pl] $SM-\bar{a}-me-OM \neq [v]_{stem(H)}-^{(4)}\acute{a}$	

ここでも NTP は適用されない。肯定形においては，単数形 OM と複数形 OM でパターンが異なる。前者の場合は，SM 位置の IH に加え OM 位置でも H が実現する。ただし，*me-* を挿入した場合は，OM 上の H は不安定になる。後者の場合は，OM 位置での H は実現しない。否定形では，IH に加え，動词语末で H が実現している。

9.3 習慣

9.3.1 概要

ある事態が，(時区間を区切らず) 継続的，習慣的に生じているという時間的概念を習慣 (habitual, HAB) と呼ぶ。ロンボ語における具体例は次のようである。

- (7) AFF: $ngi-\bar{e} \neq \acute{e}nd-a / nge\acute{e}nda /$ $\emptyset-shul\acute{e}$ $kil\acute{a} / kl\acute{a} /$ $\emptyset-siku$
 SM.1sg-HAB \neq 'go'-F CPx.9-'school' 'every' CPx.9-'day'
 「私は毎日学校に行く」 Mimi huenda shule kila siku.
- NEG: $ngi-\bar{e} \neq \acute{e}nd-a / nge\acute{e}nda /$ $\emptyset-shul\acute{e}$ $kil\acute{a} / kl\acute{a} /$ $\emptyset-sik\acute{u}$ ku
 SM.1sg-HAB \neq 'go'-F CPx.9-'school' 'every' CPx.9-'day' NEG
 「私は毎日学校に行かない」 Mimi huwa siendi shule kila siku.
- (8) AFF: $n-a-\bar{e}-ng' \neq kor-i-a / n\acute{e}ng'kor\acute{y}a /$ $ki-lal\acute{o} / klal\acute{o} /$ $kya kw\acute{a}ya$
 ASSERT-SM.3sg-HAB-OM.1sg \neq 'cook'-APPL-F CPx.7-'food' ASS.7 'daytime'
 「彼(女)は，いつも私に昼ご飯を作ってくれる」 Yeye hunipikia chakula cha mchana.
- NEG: $a-\bar{e}-ng' \neq kor-i-a / eng'kor\acute{y}a /$ $ki-lal\acute{o} / klal\acute{o} /$ $kya kw\acute{a}y\acute{a}$ ku
 SM.3sg-HAB-OM.1sg \neq 'cook'-APPL-F CPx.7-'food' ASS.7 'daytime' NEG
 「彼(女)は，いつも私に昼ご飯を作ってくれない」 Huwa hanipikii chakula cha mchana.
- (9) AFF: $u-akati / wakati /$ $sh\acute{u}$ $\emptyset-m'f\acute{u}a$ $i-\bar{e} \neq kab-\acute{a} / y\acute{e}kab\acute{a} /$
 CPx.11-'time' DEM.N.3 CPx.9-'rain' SM.9-HAB \neq 'hit'-F
 「この時期，いつも雨が降る」 Wakati huu, mvua hunyesho.
- NEG: $u-akati / wakati /$ $sh\acute{u}$ $\emptyset-m'f\acute{u}a$ $i-\bar{e} \neq kab-\acute{a} / y\acute{e}kab\acute{a} /$ ku
 CPx.11-'time' DEM.N.3 CPx.9-'rain' SM.9-HAB \neq 'hit'-F NEG
 「この時期，いつも雨は降らない」 Wakati huu, huwa hainyeshi.

このアスペクト形は、TAM *e-* によってマークされるが、この TAM は先行の SM と母音融合を起こす。F は *-a*、否定形は文末に置かれる否定詞 *ku* によって表示される。

9.3.2 構造の一般化

まず、習慣形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。



以下に習慣形の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。まず L 動詞 $\neq \text{loli-a}$ 「見る」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	$\text{ngi-}\overline{e} \neq \text{lóli-a} / \text{ngelólya}/$	$\text{ngi-}\overline{e} \neq \text{lólí-á ku}$
SM.2sg:	$\text{u-}\overline{e} \neq \text{lóli-a} / \text{welólya}/$	$\text{u-}\overline{e} \neq \text{lólí-á ku}$
SM.3sg:	$\text{n-e-}\overline{e} \neq \text{lóli-a} / \text{nelólya}/$	$\text{n-e-}\overline{e} \neq \text{lólí-á ku}$
SM.1pl:	$\text{du-}\overline{e} \neq \text{lóli-a} / \text{dwelólya}/$	$\text{du-}\overline{e} \neq \text{lólí-á ku}$
SM.2pl:	$\text{mu-}\overline{e} \neq \text{lóli-a} / \text{mwelólya}/$	$\text{mu-}\overline{e} \neq \text{lólí-á ku}$
SM.3pl:	$\text{ve-}\overline{e} \neq \text{lóli-a} / \text{velólya}/$	$\text{ve-}\overline{e} \neq \text{lólí-á ku}$
structure:	$\text{SM-}\overline{e} \neq [\acute{v}\acute{v}]_{\text{stem(L)}}-a$	$\text{SM-}\overline{e} \neq [\acute{v}\acute{v}]_{\text{stem(L)}}-\acute{a} \text{ ku}$

この時制形では、肯定形で語幹初頭音節のみに H が認められる。語幹 $\neq \text{loli-a}$ に H の契機となる要素は確認されないので、この H は、IH に相当するものと考えてよいであろう。否定形については、H 動詞 (OM 接合形) においてこの H が出現しないことを考慮に入れば、NTP が適用され、*ku* に起因する高音調が、語幹初頭まで拡張していると見られる。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	$\text{n-e-}\overline{e}-(\text{ng}^?) \neq \text{lóli-a} / \text{ne}(\text{ng}^?)\text{lólya}/$	$\text{e-}\overline{e}-\text{ng}^? \neq \text{lólí-á ku}$
OM.2sg:	$\text{n-e-}\overline{e}-\text{ku} \neq \text{lóli-a} / \text{neklólya}/$	$\text{e-}\overline{e}-\text{ku} \neq \text{lólí-á ku} / \text{eéklólíá ku}/$
OM.3sg:	$\text{n-e-}\overline{e}-\text{m}^? \neq \text{lóli-a} / \text{nem}^?\text{lólya}/$	$\text{e-}\overline{e}-\text{m}^? \neq \text{lólí-á ku}$
OM.1pl:	$\text{n-e-}\overline{e}-\text{du} \neq \text{lóli-a} / \text{nedulólya}/$	$\text{e-}\overline{e}-\text{du} \neq \text{lólí-á ku}$
OM.2pl:	$\text{n-e-}\overline{e}-\text{mu} \neq \text{lóli-a} / \text{nemulólya}/$	$\text{e-}\overline{e}-\text{mu} \neq \text{lólí-á ku}$
OM.3pl:	$\text{n-e-}\overline{e}-\text{va} \neq \text{lóli-a} / \text{nevalólya}/$	$\text{e-}\overline{e}-\text{va} \neq \text{lólí-á ku}$
structure:	$\text{SM-}\overline{e}-\text{OM} \neq [\acute{v}\acute{v}]_{\text{stem(L)}}-a$	$\text{SM-}\overline{e}-\text{OM} \neq [\acute{v}\acute{v}]_{\text{stem(L)}}-\acute{a} \text{ ku}$

ここでは、(1sg における不安定な実現を除き) IH は確認されず、単数形 OM を接合する形でも複数形 OM を接合する形でも、語幹初頭音節で H が実現している。他の時制形、およびこの時制形の H 動詞におけるふるまいを考えあわせても、これはイレギュラーな実現である。否定形の場合は、規則的に ku の遡及的音調拡張が、語幹初頭音節まで伸びている。

次に、H 動詞 ≠kab-a 「叩く」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

	肯定形	否定形
SM.1sg:	$ngi-\widehat{e} \neq kab-^{(4)}\acute{a} / ng\acute{e}kab^{(4)}\acute{a} /$	$ngi-\widehat{e} \neq kab-\acute{a} ku / ngekab\acute{a} ku /$
SM.2sg:	$u-\widehat{e} \neq kab-^{(4)}\acute{a} / w\acute{e}kab^{(4)}\acute{a} /$	$u-\widehat{e} \neq kab-\acute{a} ku / wekab\acute{a} ku /$
SM.3sg:	$n-e-\widehat{e} \neq kab-^{(4)}\acute{a} / n\acute{e}kab^{(4)}\acute{a} /$	$e-\widehat{e} \neq kab-\acute{a} ku / ekab\acute{a} ku /$
SM.1pl:	$du-\widehat{e} \neq kab-^{(4)}\acute{a} / dw\acute{e}kab^{(4)}\acute{a} /$	$du-\widehat{e} \neq kab-\acute{a} ku / dwekab\acute{a} ku /$
SM.2pl:	$mu-\widehat{e} \neq kab-^{(4)}\acute{a} / mw\acute{e}kab^{(4)}\acute{a} /$	$mu-\widehat{e} \neq kab-\acute{a} ku / mwekab\acute{a} ku /$
SM.3pl:	$ve-\widehat{e} \neq kab-^{(4)}\acute{a} / v\acute{e}kab^{(4)}\acute{a} /$	$ve-\widehat{e} \neq kab-\acute{a} ku / vekab\acute{a} ku /$
structure:	$SM-\widehat{e} \neq [v]_{\text{stem(H)}}-^{(4)}\acute{a}$	$SM-\widehat{e} \neq [v]_{\text{stem(H)}}-\acute{a} ku$

ここでは、(他の時制形でのパターンから期待されるように) SM 位置に IH が実現している。肯定形における語彙的な H とみられる高音調も動詞語末で実現する(ただし、音声的な高さは初頭のそれに比べ低い)。否定形の場合は H が動詞語末のみで実現している。

次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

	肯定形	否定形
OM.1sg:	$n-e-\widehat{e}-ng' \neq kab-^{(4)}\acute{a} / nen\acute{g}'kab^{(4)}\acute{a} /$	$e-\widehat{e}-ng' \neq kab-\acute{a} ku$
OM.2sg:	$n-e-\widehat{e}-k\acute{u} \neq kab-^{(4)}\acute{a} / nek\acute{u}kab^{(4)}\acute{a} /$	$e-\widehat{e}-ku \neq kab-\acute{a} ku / ekkab\acute{a} ku /$
OM.3sg:	$n-e-\widehat{e}-m' \neq kab-^{(4)}\acute{a} / nem'\acute{a}kab^{(4)}\acute{a} /$	$e-\widehat{e}-m' \neq kab-\acute{a} ku$
OM.1pl:	$n-e-\widehat{e}-du \neq kab-^{(4)}\acute{a} / n\acute{e}dukab^{(4)}\acute{a} /$	$e-\widehat{e}-du \neq kab-\acute{a} ku$
OM.2pl:	$n-e-\widehat{e}-mu \neq kab-^{(4)}\acute{a} / n\acute{e}mukab^{(4)}\acute{a} /$	$e-\widehat{e}-mu \neq kab-\acute{a} ku$
OM.3pl:	$n-e-\widehat{e}-va \neq kab-^{(4)}\acute{a} / n\acute{e}vakab^{(4)}\acute{a} /$	$e-\widehat{e}-va \neq kab-\acute{a} ku$
structure:	$[OM = \text{sg}] SM-\widehat{e}-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-^{(4)}\acute{a}$ $[OM = \text{pl}] SM-\widehat{e}-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-^{(4)}\acute{a}$	$SM-\widehat{e}-OM \neq [v]_{\text{stem(H)}}-\acute{a} ku$

肯定形においては、複数形 OM の場合は、OM を接合しないパターンと同様 SM 位置で IH が実現しており、単数形 OM の場合は OM 位置で IH が実現している。他の時制形でも、OM 接合構造の場合、IH の実現位置がずれる(単数形では、#[H]_{SM-TAM}[H]_{OM} か#[L]_{SM-TAM}[H]_{OM}、複数形では[H]_{SM-TAM}[L]_{OM})現象が確認されるが、この時制形で言えば、TAM e- が基底の H を有していると考えれば、単数形 OM の場

合は次頭音節（つまり OM 位置）に移動（shifting）ないし拡張（spreading），複数形 OM の場合は，OM の H にブロックされる（cf. Anti-Meeussen's Rule）形で，初頭位置（SM-TAM 融合位置）で実現するという解釈は合理的であろう．否定形では NTP が適用され，動詞語末のみで H が実現していると解釈される．

9.4 継起

9.4.1 概要

ある事態が，先行する事態に引き続いて行われているというアスペクト概念を継起（consecutive, CONSEC）と呼ぶ．この概念を表現する形式には，少なくとも 3 つの構造パターンが確認されている．

- (10) *vélesha ímwirá,*
「彼らは彼（女）を捕まえに来て」 Walikuja kumchukua,
a. *ve-ká ≠sihúri-a /vekásihúrya/ vé ≠dish-a*
SM.3pl-CONSEC ≠ 'leave'-F SM.3pl ≠ 'run'-F
「そして彼らはすばやく逃げた」 wakaondoka kwa mbio.
b. *ve-ā ≠sihúri-a /vakásihúrya/ vé ≠dish-a*
SM.3pl-ANT ≠ 'leave'-F SM.3pl ≠ 'run'-F
「そして彼らはすばやく逃げた」 wakaondoka kwa mbio.
c. *ve-ā-ká ≠sihúri-a /vákasihúrya/ vé ≠dish-a*
SM.3pl-ANT-CONSEC ≠ 'leave'-F SM.3pl ≠ 'run'-F
「そして彼らはすばやく逃げた」 wakaondoka kwa mbio.
- (11) *dúlela klaló,*
「私たちはごはんを食べ，」 Tulikula chakula,
a. *du-ká ≠nw-a du-ká ≠kab-á n-goma*
SM.3pl-CONSEC ≠ 'drink'-F SM.3pl-CONSEC ≠ 'hit'-F CPx.9-'dram'
「飲み，そして太鼓を叩いた」 tukanywa, tukapiga ngoma.
b. ** du-ā ≠nw-a du-ā ≠kab-á n-goma*
SM.3pl-ANT ≠ 'drink'-F SM.3pl-ANT ≠ 'hit'-F CPx.9-'dram'
「飲み，そして太鼓を叩いた」 tukanywa, tukapiga ngoma.
c. ** du-ā-ká ≠nw-a du-ā-ká ≠kab-á n-goma*
SM.3pl-ANT-CONSEC ≠ 'drink'-F SM.3pl-ANT-CONSEC ≠ 'hit'-F CPx.9-'dram'
「飲み，そして太鼓を叩いた」 tukanywa, tukapiga ngoma.

3 つのパターンを挙げてあるが，形式上，純粋な継起形と呼びうるのは (a) の形式で，TAM は *ka-* である．さらに，完了形が代用される場合 (b)，また完了の TAM *a-* に *ka-* が後続する形式 (c) が確認されている．(10) の例では，このいずれもが継起の概念を表わす形式として許容されるが，(11) では，(11a)

以外は不可であるという。基本的に *ka-* の形式が用いられるということであるが、*ka-* が許容されない例²³もわずかながらあり、その場合は完了形で代用されるということのようである。

9.4.2 構造の一般化

まず、継起形の構造を、動詞形態論のテンプレートにしたがって示せば次のようになる。

		《継起》				
SM-	NEG2-	<i>ka-</i>	(OM-)	≠ stem		- <i>a</i>
		《完了+継起》				
SM-	NEG2-	<i>á-ka-</i>	(OM-)	≠ stem		- <i>a</i>

以下に一般現在形の基本活用パターンを示す。音調は単独発話におけるそれである。まず L 動詞 ≠ *loli-a* 「見る」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。概念として、否定の形式は考えづらく（例えばスワヒリ語では継起の否定形は存在しない）、ここでは肯定形のみを扱う。

肯定形	
SM.1sg:	<i>ngi-ká ≠ loli-a /ngikálolya/</i>
SM.2sg:	<i>u-ká ≠ loli-a /ukálolya/</i>
SM.3sg:	<i>e-ká ≠ loli-a /ekálolya/</i>
SM.1pl:	<i>du-ká ≠ loli-a /dukálolya/</i>
SM.2pl:	<i>mu-ká ≠ loli-a /mukálolya/</i>
SM.3pl:	<i>ve-ká ≠ loli-a /vekálolya/</i>
structure:	SM- <i>ká</i> ≠ [vv] _{stem(L)} - <i>a</i>

他の時制形同様、L 動詞では IH のみが発現し、それは TAM 位置に現れる。次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

肯定形	
OM.1sg:	<i>e-ka-ng' ≠ loli-a /ekang'lolya/</i>
OM.2sg:	<i>e-ka-kú ≠ loli-a /ekak'lolya/</i>
OM.3sg:	<i>e-ka-m' ≠ loli-a /ekam'lolya/</i>
OM.1pl:	<i>e-ka-du ≠ lóli-a /ekadulolya/</i>

²³ 例えば、次のような例である：(*alafú úkatengesa iki?* 「(それから) 何を作ったの?」 *Halafu ukatengesa nini?*). おそらくは、スワヒリ語における *ka-* のカバーする領域と、ロンボ語のそれとの間にズレがあるというようなことだと推測されるが、詳細は不明である。

OM.2pl:	<i>e-ka-mu ≠ lóli-a /ekamulólya/</i>
OM.3pl:	<i>e-ka-va ≠ lóli-a /ekavalólya/</i>
structure:	[OM = sg] SM-ka-OM' ≠ [vv] _{stem(L)} -a
	[OM = pl] SM-ka-OM ≠ [v̄v] _{stem(L)} -a

単数形 OM を接合した形では OM 位置で、複数形 OM を接合した形では語幹初頭音節で H が実現している。H 連続回避 (HH → LH) の規則であるメーウセンの逆規則 (Anti-Meeussen's Rule) が適用されていると仮定すると、OM 単数形では IH が右に一音節移動して実現し、OM 複数形では、IH が消去され、OM の H が一音節右にずれて実現していると推定できる。

次に、H 動詞 ≠kab-a 「叩く」に各人称形の SM を接合した形式は次のとおりである。

肯定形	
SM.1sg:	<i>ngi-ká ≠ kab-¹á /ngikákab¹á/</i>
SM.2sg:	<i>u-ká ≠ kab-¹á /ukákab¹á/</i>
SM.3sg:	<i>e-ká ≠ kab-¹á /ekákab¹á/</i>
SM.1pl:	<i>du-ká ≠ kab-¹á /dukákab¹á/</i>
SM.2pl:	<i>mu-ká ≠ kab-¹á /mukákab¹á/</i>
SM.3pl:	<i>va-ká ≠ kab-¹á /vakákab¹á/</i>
structure:	SM-ká ≠ [v] _{stem(H)} - ¹ á

L 動詞同様、TAM 位置で IH が実現し、さらに語末音節で、語彙的な H と推定される高音調が実現している。次に、各人称形の OM を接合したパターンを示す。SM は 3sg である。

肯定形	
OM.1sg:	<i>a-ká-ng' ≠ kab-¹á /akáng'kab¹á/</i>
OM.2sg:	<i>a-ká-kú ≠ kab-¹á /akákkab¹á/</i>
OM.3sg:	<i>a-ká-ń' ≠ kab-¹á /akám'kab¹á/</i>
OM.1pl:	<i>a-ká-dú ≠ kab-¹á /akádúkab¹á/</i>
OM.2pl:	<i>a-ká-mú ≠ kab-¹á /akámúkab¹á/</i>
OM.3pl:	<i>a-ká-vá ≠ kab-¹á /akávákab¹á/</i>
structure:	SM-ká-OM' ≠ [v] _{stem(H)} - ¹ á

いずれの形式も、TAM 位置および OM 位置で H が実現している。他の時制形との関係で言えば、少なくとも OM 複数形の場合は OM 位置での H は期待されない。語末位置での語彙的 H は確認される。

9.5 アスペクトマーカースのまとめ

本章で扱ったアスペクトマーカースの一覧を、8章で扱った時制マーカースの一覧とともに示す。ここで、TAM₀、TAM₁、TAM₂とスロットを分けているのは、各マーカースの相対的な出現位置を反映したものである。例えば、完結 *a-me-* の形から、*me-* が *a-* に後続することが明らかであり、これは継起の *ka-* においても同様である。このような、他のマーカースとの共起関係において、後続位置に現れるものを TAM₂ と位置付けている。このカテゴリーには、他に *she-* を含めているが、これについては、次章で明らかになる。

それに対して、相対的に先行位置に現れるものが、TAM₀ と TAM₁ であるが、両者の違いは、TAM₀ が SM との母音融合を起こすのに対し、TAM₁ はそれを起こさないということである。とりわけ、習慣と未来 2 は、音形はともに *e-* であるが、前者は TAM₀、後者は TAM₁ という形で整理される。

ここで注意したいのは、TAM₀ は形式的な判断基準が明確であるが、TAM₁ と TAM₂ については、組み合わせが可能である TAM 同士の相対位置という基準に基づくものであり、厳密な意味で相互排他的なカテゴリーをなしていることが証明されているわけではない、ということである。つまり、この分類は、作業仮説的なものであることを明記しておく。

音調面の特徴としては、進行 *i-*、未来 2 *e-*、さらに継起 *ka-* において、IH が次頭音節で実現することが確認されている。それ以外は、(イレギュラーなものも認められるが) 原則的には初頭音節で実現する。

表 9-2 : TAM 一覧

	TAM ₀	TAM ₁	TAM ₂	[stem]	FV
一般現在 PRS					
状態現在 PRS.STAT					-i
近過去 PST1		le-			
遠過去 PST2					-ie
状態過去 PST.STAT		ve-			-i
未来 1 FUT1			she-		
未来 2 FUT2		e-			
進行 PROGR		i-			
完了 ANT	a-				
完結 COMP			me-		
習慣 HAB	e-				
継起 CONSEC			ka-		

10. 複合 TAM 形

時制概念とアスペクト概念は、組み合わせて表現することが可能である。組み合わせる概念の種類によって、両者をひとつの動詞構造のなかに集約的に表現する（つまり、それぞれの概念に対応するマーカーを TAM スロットに充填する）方法と、それぞれの概念を補助動詞と本動詞の二語に分けて表現する方法のいずれかが用いられる。ここでは、前者のパターンを統合形 (10.1)，後者のパターンを分析形と (10.2) 呼ぶ。

10.1 統合形（とくに *she-/nde-* 形）

TAM₀ および TAM₁ と、TAM₂ の構造上可能な組み合わせは、次のようなマトリクスの形で表現できるが、実際には、すべての組み合わせが許容されるわけではない。確認されている可能な組み合わせは、次のとおりである。

表 10-1 : TAM の可能な組み合わせ (暫定)

		TAM ₂				
		PFTV Ø-	COMP <i>me-</i>	CONSEC <i>ka-</i>	CERT <i>she-</i>	ITIVE <i>nde-</i>
TAM _{0/1}	PST1 <i>le-</i>	<i>le-Ø-</i> PST	<i>le-me</i> PST COMP	-	<i>le-she-</i>	<i>le-nde</i>
	ANT <i>a-</i>	<i>a-Ø-</i> ANT	<i>a-me-</i> PRS COMP	<i>a-ka-</i> CONSEC		
	PRS Ø-	Ø-Ø- PRS	-	Ø- <i>ka-</i> CONS/ COND	Ø- <i>she-</i>	Ø- <i>nde</i>
	PROGR <i>i-</i>	<i>i-Ø-</i> PRS.CONT	-	-	<i>i-she-</i>	<i>i-nde</i>
	FUT2 <i>e-</i>	<i>e-Ø-</i> FUT	-	-	<i>e-she</i>	<i>e-nde</i>

ここでは、とくに広範な TAM との結びつきを許容する TAM₂ *she-*, *nde-* を扱う。これらはともに、移動を表わす基本的な動詞 ≠*sh-a* 「来る」、≠*end-a* 「行く」が文法化したものである（したがって、以下のグロスでは後者を ITIVE と言及している）。前者は、未来 1 の TAM として 8.3.1 で扱ったが、以下に見るように、本質的には、ある種のモダリティ概念を表示する形式と見ることができる。

以下、順に近過去 *le-*、現在 Ø-、進行 *i-*、未来 2 *e-*、との組み合わせの具体例を見ていく。相互対照の便宜のために、キャリア文は「私は彼（女）に会った／会う（／会うだろう）」（行為性述語）、「私は教師であった／である／であるだろう」（状態性述語）、「雨が降った／降る／降るだろう」（非意図性述語）に揃えてある。

10.1.1 *le-she-/nde-*

近過去 *le-* と TAM *she-* および *nde-* の組み合わせの具体例は次のとおりである。

- (1) a. + she, AFF: *ngí-le-shé-m' ≠loli-a /ngíleshém'lolya/*
 SM.1sg-PST1-FUT1-OM.3sg ≠'see'-F
 「たしかに、私は彼（女）に会った」 (cf. Nilimwonaga)
 cf. **ngi-she-m' ≠loli-ie*
 SM.1sg-FUT1-OM.3sg ≠'see'-PST2
- b. + she, NEG: *ng^l-le-she-m' ≠lólí-á* *ku*
 SM.1sg-PST1-FUT1-OM.3sg ≠'see'-F NEG
 「私は彼（女）に会わなかった (e.g. 約束をしていたけど会えなかった)」
- c. + nde, AFF: * *ngi-le-nde-m' ≠loli-a*
 SM.1sg-PST1-ITIVE-OM.3sg ≠'see'-F
- d. + nde, NEG: * *ngi-le-nde-m' ≠loli-a* *ku*
 SM.1sg-PST1-ITIVE-OM.3sg ≠'see'-F NEG
- (2) a. + she, AFF: *ngí-le-she ≠v-a* *mw-alímu*
 SM.1sg-PST1-FUT1 ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher'
 「私は教師であった (たしかに教師になった)」
 cf. * *ngi-ve-she ≠i*
 SM.1sg-PST.STAT-FUT1 ≠EXT1
 * *ngi-she ≠ve*
 SM.1sg-FUT1 ≠COP.PST
- b. + she, NEG: *ngi-le-she ≠v-a* *mw-álímú* *ku*
 SM.1sg-PST1-FUT1 ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher' NEG
 「私は教師ではなかった (e.g. 機会があったがなれなかった)」
- c. + nde, AFF: * *ngi-le-nde ≠v-a* *mw-alímu*
 SM.1sg-PST1-ITIVE ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher'
- d. + nde, NEG: * *ngi-le-nde ≠v-a* *mw-alímu* *ku*
 SM.1sg-PST1-ITIVE ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher' NEG
- (3) a. + she, AFF: *Ø-m'fúa* *í-le-shé ≠kab-á*
 CPx.9-'rain' SM.9-PST1-FUT1 ≠'hit'-F
 「雨はたしかに (特定できる時間, 時期に) 降っていた」
- b. + she, NEG: *Ø-m'fúa* *i-le-she ≠kab-á* *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-PST1-FUT1 ≠'hit'-F NEG
 「雨は (降ることが期待されたけれど) 降らなかった」
- c. + nde, AFF: * *Ø-m'fua* *i-le-nde ≠kab-a*
 CPx.9-'rain' SM.9-PST1-ITIVE ≠'hit'-F

- d. +nde, NEG: * Ø-*m'fua* *i-le-nde* ≠ *kab-a* *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-PST1-ITIVE ≠ 'hit'-F NEG

まず確認されるのは、(1)–(3) の例をとおして、*le-nde-* の組み合わせが許容されない、ということである。このこと、つまり *nde-* に分布上の制約があるということから示唆されるのは、TAM マーカーとしての *nde-* は、文法化プロセスの浅い段階にとどまっているということであろう。少なくとも、*nde-* に比べ *she-* の方が、文法化の進んだ形であるということは言えよう。

さらに構造的な特徴としては、まず (1) から、遠過去 *-ie* との共起が不可であること、(2) より存在詞やコピュラ相当形式との共起も許容されないことが挙げられる。

she- の表示概念に関しては、肯定形において「たしかに～」((1a) は口語スワヒリ語の一種の強調形, *nilimwonaga* 「たしかに会ったんだよ」に近いという判断も参照)、否定形では「可能性が明確であったにもかかわらず、しなかった／できなかった」というような含意を持つようである。ひとまず肯定形における意味に基づけば、*she-* の基本的な表示概念として、ある種のモダリティー概念としての「確信性 (certainty, CERT)」といったものを想定することができる。この性質の帰結として、例えば (3a) における「特定できる時間に」といった、時間的な特定性 (specificity) といった含意が表現される。

10.1.2 Ø-*she-*/*nde-*

現在 Ø- と TAM *she-* および *nde-* の組み合わせの具体例は次のとおりである。

- (4) a. +*she*, AFF: *ngí-she-m' ≠ loli-a /ngíshem'lolya/*
 SM.1sg-FUT1-OM.3sg ≠ 'see'-F
 «たしかに、私は彼(女)に会う» *Nina haki ya kumwona.*
 > 「私は彼(女)に会うだろう」 *Nitamwona.*
- b. +*she*, NEG: *ng^l-shé-m' ≠ lólí-á* *ku*
 SM.1sg-FUT1-OM.3sg ≠ 'see'-F NEG
 «私は彼(女)に会う予定がない» *Sina mpango wa kumwona.*
 > 「私は彼(女)に会わないだろう」 *Sitamwona.*
- c. +*nde*, AFF: *ngí-nde-m' ≠ loli-a /ngíndem'lolya/*
 SM.1sg-ITIVE-OM.3sg ≠ 'see'-F
 「(はっきりとは決めていないが) 私は彼(女)に会うだろう」
- d. +*nde*, NEG: *ngi-nde-m' ≠ lólí-á* *ku*
 SM.1sg-ITIVE-OM.3sg ≠ 'see'-F NEG
 «彼(女)に会う必要性／意図／関心がない» *Sina kusudi la kumwona.*
 > 「私は彼(女)に会わないだろう」 *Sitamwona.*
- (5) a. +*she*, AFF: *ngí-she* ≠ *v-a* *mw-alímu*
 SM.1sg-FUT1 ≠ 'be, become'-F CPx.1-'teacher'
 «私は(たしかに)教師になる／そうなることが期待されている»
 > 「私は教師になるだろう」 *Nitakuwa mwalimu.*

- b. + she, NEG: *ngi-she* ≠*v-a* *mw-álímú* *ku*
 SM.1sg-FUT1 ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher' NEG
 ≪私は教師になる予定がない≫ Sina mpango wa kuwa mwalimu.
 > 「私は教師にならないだろう」 Sitakuwa mwalimu.
- c. + nde, AFF: *ngí-nde* ≠*v-a* *mw-alímu*
 SM.1sg-ITIVE ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher'
 ≪教師になるための準備をしている, 教師になりたい≫
 > 「私は教師になる／なりたい」 Nitakuwa/Nataka kuwa mwalimu.
- d. + nde, NEG: *ngi-nde* ≠*v-a* *mw-álímú* *ku*
 SM.1sg-ITIVE ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher' NEG
 ≪教師になるよりも他のになりたいものがある≫
 > 「私は教師になるつもりはない」 Sina kusudi la kuwa mwalimu.
- (6) a. + she, AFF: \emptyset -*m'fúa* *í-she* ≠*kab-⁽⁴⁾á*
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT1 ≠'hit'-F
 ≪雨が降る兆候が確認できる≫
 > 「雨が降るだろう」 Mvua itanyesha.
- b. + she, NEG: \emptyset -*m'fúa* *i-she* ≠*kab-á* *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT1 ≠'hit'-F NEG
 「雨は降らないだろう」 Mvua haitanyesha.
- c. + nde, AFF: \emptyset -*m'fúa* *í-nde* ≠*kab-⁽⁴⁾á*
 CPx.9-'rain' SM.9-ITIVE ≠'hit'-F
 ≪e.g. 別の地域で雨が降っているという情報を聞いて≫
 > 「雨が降るだろう」 Mvua itanyesha.
- d. + nde, NEG: \emptyset -*m'fúa* *i-nde* ≠*kab-á* *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-ITIVE ≠'hit'-F NEG
 ≪e.g. 得られる情報から判断するに, 雨雲は通らないだろうから≫
 > 「雨は降らないだろう」 Mvua haitanyesha.

ここでは, *she-*, *nde-* 双方が TAM として機能している. *she-* の方は, ここまで未来 1 形として扱ってきた形式そのものであるが, 構造的には, 「現在 (時制) + 確信性 (モダリティ)」という形式であると見なすことができる. その意味で, 純粋な時制概念を表わすのは, TAM₁ の *e-* ということになる. ただし, TAM₁ *i-* によっても, 近未来的な概念が表現される.

また, この例において *she-* と *nde-* の意味的な違いについて, 対照的に検討することが可能になる. 前節で, *she-* は確信性と呼びうる概念を表示していることを見たが, ここでも同様のことが確認される (とくに (4a), (5a)). さらに, (6a) を見ると, 今後「雨が降る」という事態が生起することが, 具体的な証拠から「直接的に」(例えば, 雨雲を自分の目で見て) 判断される, という含意を表示しているようである. それに対して, *nde-* を用いた (6c) では, 「他からの情報」によって「雨が降る」という事態が起きることが想定される, といった内容を表わす. 例えば, より西の地域で雨が降っているということ

が知らされて、その情報から自分がいる地点でも今後雨が降ることが予想される、といった内容である。つまり、(6a) と (6c) の対照から、*she-* には「直接証拠性 (direct evidentiality)」、*nde-* には「間接証拠性 (indirect evidentiality)」といったモダリティー概念上の対立を認めることができる。

さらには、*she-* と *nde-* を対置することで、客観性 vs. 主観性という概念対立を見出すこともできるかもしれない。すなわち、(4b) «私は彼 (女) に会う予定がない» に対して、(4d) «彼 (女) に会う必要性／意図／関心がない», また (5a) «私は (たしかに) 教師になる／そうなることが期待されている» に対して、(5c) «教師になるための準備をしている, 教師になりたい» とした対照から、*she-* 形には (周囲からみて明らかであるといった意味での)「客観性」の含意があるのに対し、*nde-* 形からは (意図, 関心といった内面的なモチベーションに基づくといった意味での)「主観性」の含意を認めることができるというわけである。

she- の客観性の含意は、(1b)「私は彼 (女) に会わなかった (e.g. 約束をしていたけど会えなかった)」、(2b)「私は教師ではなかった (e.g. 機会はあったがなれなかった)」といった表現とも整合的であるように思われる。すなわち、これらの文では、「約束」や「機会」といった客観的な証拠ないし論拠をもって、事態を捉えているものと見ることができるからである。

10.1.3 *i* + *she-*/*nde-*

進行 *i-* と TAM *she-* および *nde-* の組み合わせの具体例は次のとおりである。

- (7) a. + *she*, AFF: *ngi-í-she-m' ≠ loli-a /ngiíshem'lolya/*
 SM.1sg-PROGR-FUT1-OM.3sg ≠ 'see'-F
 «会うためのプロセスが始まっている»
 > 「私は彼 (女) に会うだろう」 Nitamwona.
- b. + *she*, NEG: *ngi-i-she-m' ≠ lolí-á* *ku*
 SM.1sg-PROGR-FUT1-OM.3sg ≠ 'see'-F NEG
 「私は彼 (女) に会わないだろう」 Sitamwona.
 «*ngiim'lolíá ku* と意味的に大きな相違はない»
- c. + *nde*, AFF: *ngi-í-nde-m' ≠ loli-a /ngiíndem'lolya/*
 SM.1sg-PROGR-ITIVE-OM.3sg ≠ 'see'-F
 «会うということは決めた» Nimefanya maamuzi (ya kumwona).
 > 「私は彼 (女) に会うだろう」 Nitamwona.
- d. + *nde*, NEG: *ngi-(í-ndé-m') ≠ lolí-á* *ku*
 SM.1sg-PROGR-ITIVE-OM.3sg ≠ 'see'-F NEG
 «会うことを決めていない» Sina maamuzi ya kumwona.
 > 「私は彼 (女) に会わないだろう」 Sitamwona.
- (8) a. + *she*, AFF: *ngi-í-she ≠ v-a* *mw-álimu*
 SM.1sg-PROGR-FUT1 ≠ 'be, become'-F CPx.1-'teacher'
 «まだなっていないが、そうなることが期待されている»
 > 「私は教師になるだろう」 Nitakuwa mwalimu.

- b. + she, NEG: *ngi-^l-she ≠v-a* *mw-álímú* *ku*
 SM.1sg-PROGR-FUT1 ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher' NEG
 «教師になることが期待されていない» Sina matarajio...
 > 「私は教師にならないだろう」 Sitakuwa mwalimu.
- c. + nde, AFF: *ngi-í-nde ≠v-a* *mw-álimu*
 SM.1sg-PROGR-ITIVE ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher'
 «教師になるための準備をしている, 教師になりたい»
 > 「私は教師になる／なりたい」 Nitakuwa/Nataka kuwa mwalimu.
- d. + nde, NEG: *ngi-i-nde ≠v-a* *mw-álímú* *ku*
 SM.1sg-PROGR-ITIVE ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher' NEG
 «e.g. 教師になるための学校にいたとしても, その意図はない»
 > 「私は教師になるつもりはない」 Sina kusudi la kuwa mwalimu.
- (9) a. + she, AFF: *Ø-m'fúa* *i-í-she ≠kab-⁴á*
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT1 ≠'hit'-F
 «雨が降る兆候がたくさんある» Kuna dalili nyingi ambazo itanyesha.
 > 「雨が(きっと)降るだろう」 Mvua itanyesha.
- b. + she, NEG: *Ø-m'fúa* *i-i-she ≠kab-á* *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT1 ≠'hit'-F NEG
 «雨が降らないことに確証がある» Kuna uhakika ambao haitanyesha.
 > 「雨は降らないだろう」 Mvua haitanyesha.
- c. + nde, AFF: *Ø-m'fúa* *i-í-nde ≠kab-⁴á*
 CPx.9-'rain' SM.9-ITIVE ≠'hit'-F
 «降る可能性がある» Kuna uwezekano ambao itanyesha.
 > 「雨が降るだろう」 Mvua itanyesha.
- d. + nde, NEG: *Ø-m'fúa* *i-i-nde ≠kab-á* *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-ITIVE ≠'hit'-F NEG
 «降る可能性がない» Hakuna uwezekano.
 > 「雨は降らないだろう」 Mvua haitanyesha.

TAM *i-* も, *she-*, *nde-* いずれとも共起可能である。また概念的にも, これまでの例で認められたような特徴, すなわち *she-* の直接証拠性に対する *nde-* の間接証拠性 (cf. (9)), *she-* の客観性に対する *nde-* の主観性 (cf. (8)²⁴) といった特徴が確認される。また, この主観性の含意は, (7c) では «会うということは決めた» Nimefanya maamuzi (ya kumwona) という, 「決心 (Sw. maamuzi)」という表現にも見出される。

²⁴ また, (8c) に典型的に見られるように, *nde-* はしばしば, 「プロセスの途上」という含意を表わすことがある。これは, 元となる語彙形式の概念構造とも整合的であり, *nde-* の核心をなす概念のひとつである可能性がある (小幡千陽氏の考察による)。

10.1.4 e-she-/nde-

未来 2 e- と TAM she- および nde- の組み合わせの具体例は次のとおりである。基本的にこの構造は、概念的には TAM i- との組み合わせで表現されるそれに準ずるものであるが、TAM i- を用いた構造と異なるのは、時間的により離れた未来での事態として表現されるということのようである。以下に、具体例のみ示す。

- (10) a. + she, AFF: *ngi-é-she-m' ≠loli-a /ngeéshem'lolya/*
SM.1sg-FUT2-FUT1-OM.3sg ≠'see'-F
「(別の日に会うこともできるが、ある特定の日に) 私は彼 (女) に会うだろう」 Nitamwona.
- b. + she, NEG: *ngi-e-she-m' ≠loli-á* *ku*
SM.1sg-FUT2-FUT1-OM.3sg ≠'see'-F NEG
《会わないということをもう決めている》
「私は彼 (女) に会わないだろう」 Sitamwona.
- c. + nde, AFF: *ngi-é-nde-m' ≠loli-a /ngeéndem'lolya/*
SM.1sg-FUT2-ITIVE-OM.3sg ≠'see'-F
「今はできないけど、将来時間が空けば) 私は彼 (女) に会うだろう」 Nitamwona.
- d. + nde, NEG: *ngi-é-ndé-m' ≠loli-á* *ku*
SM.1sg-FUT2-ITIVE-OM.3sg ≠'see'-F NEG
《会う意図を持っていない》 Sina kusudi ya kumwona.
> 「私は彼 (女) に会わないだろう」 Sitamwona.
- (11) a. + she, AFF: *ngi-é-she ≠v-a /ngeésheva/* *mw-álimu*
SM.1sg-FUT2-FUT1 ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher'
《将来的に、そうなることが期待されている》
> 「私は教師になるだろう」 Nitakuwa mwalimu.
- b. + she, NEG: *ngi-e-she ≠v-a /ngeesheva/* *mw-álimú* *ku*
SM.1sg-FUT2-FUT1 ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher' NEG
《将来的に、教師になることが期待されていない》 Sina matarajio...
> 「私は教師にならないだろう」 Sitakuwa mwalimu.
- c. + nde, AFF: *ngi-é-nde ≠v-a /ngeéndeva/* *mw-álimu*
SM.1sg-FUT2-ITIVE ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher'
《教師になるための準備をしている、教師になりたい》
> 「私は教師になる／なりたい」 Nitakuwa/Nataka kuwa mwalimu.
- d. + nde, NEG: *ngi-e-nde ≠v-a /ngeendeva/* *mw-álimú* *ku*
SM.1sg-FUT2-ITIVE ≠'be, become'-F CPx.1-'teacher' NEG
《e.g. 教師になるための学校にいたとしても、その意図はない》

- > 「私は教師になるつもりはない」 Sina kusudi la kuwa mwalimu.
- (12) a. +she, AFF: Ø-*m'fúa* *i-é-she ≠kab-⁽⁴⁾á* /*yeéshekab⁽⁴⁾á*/
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT2-FUT1 ≠'hit'-F
 <<雨が降る兆候がたくさんある>> Kuna dalili nyingi ambazo itanyesha.
 > 「雨が（きっと）降るだろう」 Mvua itanyesha.
- b. +she, NEG: Ø-*m'fúa* *i-e-she ≠kab-á* /*yeeshekabá*/ *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT2-FUT1 ≠'hit'-F NEG
 <<雨が降るといふ兆候がない>> Hamna dalili ya kunyesha.
 > 「雨は降らないだろう」 Mvua haitanyesha.
- c. +nde, AFF: Ø-*m'fúa* *i-é-nde ≠kab-⁽⁴⁾á* /*yeendekab⁽⁴⁾á*/
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT2-ITIVE ≠'hit'-F
 「(伝聞等の根拠によって) 雨が降るだろう」 Mvua itanyesha.
- d. +nde, NEG: Ø-*m'fúa* *i-e-nde ≠kab-á* /*yeendekabá*/ *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT2-ITIVE ≠'hit'-F NEG
 <<与えられた根拠によれば>> Kutokana na taarifa zilizoletwa...
 > 「雨は降らないだろう」 Mvua haitanyesha.

10.1.5 まとめ

以上、概観してきた各 TAM との共起例から、*she-* および *nde-* の表示概念について、概ね次のようなことが言えるだろう。

移動動詞「来る」に由来する *she-* は、他の（音形を伴う）TAM と共起せずに単独で現れる場合は、未来時制概念を表わす一般的なマーカーとして機能するが、より広範な TAM との共起例から帰納的に解釈すると、その本質的な意味は、「確信性 (CERT)」と呼びうるモダリティ概念を表示すると見なすことができる。一方「行く」に由来する *nde-* は、*she-* に比べると、語彙的な性質を幾分残すものであり、他の TAM との部分的な共起制約があることから、構造的にも確認される。

それぞれの表示概念の核心部分は、「直接証拠性」vs. 「間接証拠性」、あるいは「客観性」vs. 「主観性」といった形で、対立概念的に捉えることができそうである。また、*she-* の「確信性」という性質から、とくに過去時制形において「時間的特定性」のような含意が表現される。

10.2 分析形

時制概念とアスペクト概念を分離して表現する分析形は、いずれも、先行の動詞構造で時制概念を、後続の動詞構造でアスペクト概念を表示する。述部の語彙的な意味は後続の動詞で表されるので、先行の動詞構造が助動詞的な機能を果たしているということになる。この助動詞相当構造の語幹 *≠koli-a* は、語彙的には「手に入れる、見つける」といった意味を有する。

10.2.1 過去進行

過去のある時点において事態が進行中であったことを示す過去進行形は、助動詞構造で TAM₁ *le-* によって過去時制であることがマークされ、後続する本動詞の側で TAM₁ *i-* によって進行アスペクトが表示される。つまり、次のような構造になる。

《過去進行-1》					
SM-	NEG2-	le-	(OM-)	≠ <i>koli</i>	-a
+					
SM-	NEG2-	i-	(OM-)	≠ stem	-a

- (13) AFF: *ngí-le ≠koli-a /ngílekolya/* *ngi-í ≠andik-a* *Ø-bárúa*
 SM.1sg-PST1 ≠'get'-F SM.1sg-PROGR ≠'write'-F CPx.9-'letter'
 「私は手紙を書いていた」 Nilikuwa ninaandika barua.
- NEG: *ngi-le ≠koli-a /ngílekolya/* *ngi-i ≠andik-a* *Ø-bárúa* *ku*
 SM.1sg-PST1 ≠'get'-F SM.1sg-PROGR ≠'write'-F CPx.9-'letter' NEG
 「私は手紙を書いていなかった」 Nilikuwa siandiki barua.
- (14) AFF: *Ø-m'fúá* *ĩ-le ≠koli-a /ílekolya/* *i-í ≠kab-a*
 CPx.9-'rain' SM.9-PST1 ≠'get'-F SM.9-PROGR ≠'hit'-F
 「雨が降っていた」 Mvua ilikuwa inanyesha.
- NEG: *Ø-m'fua* *i-le ≠koli-a /ílekolya/* *i-i ≠kab-á* *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-PST1 ≠'get'-F SM.9-PROGR ≠'hit'-F NEG
 「雨が降っていなかった」 Mvua ilikuwa hainyeshi.

過去進行には、もうひとつ、統合型の形式がある。それは状態過去の TAM *ve-* を用いるものである。このとき、/veé/ という母音が長い形式も確認される（ただし、/veí/ という形式は許容されない）。

《過去進行-2》					
SM-	NEG2-	ve-(V)	(OM-)	≠ stem	-a

- (15) AFF: *ngí-ve ≠andik-a* *Ø-bárúa*
 SM.1sg-PST.STAT ≠'write'-F CPx.9-'letter'
 「私は手紙を書いていた」 Nilikuwa ninaandika barua.
- NEG: *ngi-ve ≠andik-a* *Ø-bárúa* *ku*
 SM.1sg-PST.STAT ≠'write'-F CPx.9-'letter' NEG
 「私は手紙を書いていなかった」 Nilikuwa siandiki barua.
- (16) AFF: *Ø-m'fúá* *ĩ-ve ≠k'á'b-a*
 CPx.9-'rain' SM.9-PST.STAT ≠'hit'-F
 「雨が降っていた」 Mvua ilikuwa inanyesha.

NEG: \emptyset -*m'fua* *i-vé* ≠*kab-á* *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-PST.STAT ≠'hit'-F NEG
 「雨が降っていなかった」 *Mvua ilikuwa hainyeshi.*

10.2.2 過去完了

過去のある時点において事態が終了していたことを示す過去完了の形式は、助動詞構造で TAM₁ *le-* によって過去時制であることがマークされ、後続する本動詞の側で TAM₀ *a-* によって完了アスペクトが表示される。つまり、次のような構造になる。

《過去完了》

SM-	NEG2-	<i>le-</i>	(OM-)	≠ <i>koli</i>	- <i>a</i>
+					
SM-	NEG2-	\widehat{a} -	(OM-)	≠ stem	- <i>a</i>

(17) AFF: *ngí-le* ≠*koli-a* /*ngílekolya*/ *ngí-á* ≠*andik-a* \emptyset -*bárua*
 SM.1sg-PST1 ≠'get'-F SM.1sg-ANT ≠'write'-F CPx.9-'letter'
 「私は手紙を書いていた」 *Nilikuwa nimeandika barua.*

NEG: *ng^ʔ-le* ≠*koli-a* /*ngílekolya*/ *ngí-á* ≠*andik-a* \emptyset -*báruá* *ku*
 SM.1sg-PST1 ≠'get'-F SM.1sg-ANT ≠'write'-F CPx.9-'letter' NEG
 「私は手紙を書いていなかった」 *Nilikuwa sijaandika barua.*

(18) AFF: \emptyset -*m'fúa* *i-le* ≠*koli-a* /*ílekolya*/ *i-á* ≠*kab-a* /*yákaba*/
 CPx.9-'rain' SM.9-PST1 ≠'get'-F SM.9-ANT ≠'hit'-F
 「(そのときには) 雨が降ってしまっていた」 *Mvua ilikuwa imenyeshi.*

NEG: \emptyset -*m'fú'a* *i-le* ≠*koli-a* /*ílekolya*/ *i-á* ≠*kab-á* /*yákabá*/ *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-PST1 ≠'get'-F SM.9-ANT ≠'hit'-F NEG
 「(そのときには, まだ) 雨が降っていなかった」 *Mvua ilikuwa haijanyesha.*

10.2.3 未来進行

未来のある時点において事態が進行中であることを示す未来進行形は、助動詞構造で TAM₁ *e-* ないし TAM₂ *she-* によって未来時制であることがマークされ、後続する本動詞の側で TAM₁ *i-* によって進行アスペクトが表示される。つまり、次のような構造になる。

《未来進行》

SM-	NEG2-	<i>e-/she-</i>	(OM-)	≠ <i>koli</i>	- <i>a</i>
+					
SM-	NEG2-	<i>i-</i>	(OM-)	≠ stem	- <i>a</i>

- (19) AFF: *ngí-she ≠koli-a /ngíshekolya/* *ngi-í ≠andik-a* \emptyset -*bárua*
 SM.1sg-FUT1 ≠'get'-F SM.1sg-PROGR ≠'write'-F CPx.9-'letter'
 「私は手紙を書いているだろう」 Nitakuwa ninaandika barua.
- NEG: *ngi-she ≠koli-a /ngishekolya/* *ngi- \emptyset ≠andik-a* \emptyset -*báruá* *ku*
 SM.1sg-FUT1 ≠'get'-F SM.1sg-PROGR ≠'write'-F CPx.9-'letter' NEG
 「私は手紙を書いていないだろう」 Nitakuwa siandiki barua.
- (20) AFF: \emptyset -*m'fúa* *i-é-she ≠koli- \acute{a} /iéshekoly \acute{a} /* *i-í ≠kab- \acute{a}*
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT2-FUT1 ≠'get'-F SM.9-PROGR ≠'hit'-F
 「雨は降っているだろう」 Mvua itakuwa inanyesha.
- NEG: \emptyset -*m'fúa* *i-é-she ≠koli- \acute{a} /iéshekoly \acute{a} /* *i-í ≠kab- \acute{a}* *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT2-FUT1 ≠'get'-F SM.9-PROGR ≠'hit'-F NEG
 「雨は降っていないだろう」 Mvua itakuwa hainyeshi.

10.2.4 未来完了

未来のある時点において事態が終了していることを示す未来完了形は、助動詞構造で TAM₁ *e-* ないし TAM₂ *she-* によって未来時制であることがマークされ、後続する本動詞の側で TAM₀ *a-* によって完了アスペクトが表示される。つまり、次のような構造になる。

《未来完了》

SM-	NEG2-	<i>e-/she-</i>	(OM-)	≠ <i>koli</i>	- <i>a</i>
+					
SM-	NEG2-	\bar{a} -	(OM-)	≠ stem	- <i>a</i>

- (21) AFF: *ngi-é ≠koli-a /ngeékolya/* *ngi- \bar{a} ≠ándik-a /ngaándika/* \emptyset -*báru \acute{a}*
 SM.1sg-FUT2 ≠'get'-F SM.1sg-ANT ≠'write'-F CPx.9-'letter'
 「私は手紙を書き忘れてしまっているだろう」 Nitakuwa nimeandika barua.
- NEG: *ngi-é ≠koli-a /ngeékolya/* *ngi- \bar{a} ≠andik-a /ngáandika/* \emptyset -*báruá* *ku*
 SM.1sg-FUT2 ≠'get'-F SM.1sg-ANT ≠'write'-F CPx.9-'letter' NEG
 「私は手紙を書き忘れていないだろう」 Nitakuwa sijaandika barua.
- (22) AFF: \emptyset -*m'fua* *í-she ≠koli-a /íshekolya/* *i- \bar{a} ≠kab- \acute{a} /yákab \acute{a} /*
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT1 ≠'get'-F SM.9-ANT ≠'hit'-F
 「雨は降ってしまっているだろう」 Mvua itakuwa imenyasha.
- NEG: \emptyset -*m'fua* *í-she ≠koli-a /íshekolya/* *i- \bar{a} ≠kab- \acute{a} /yákabá/* *ku*
 CPx.9-'rain' SM.9-FUT1 ≠'get'-F SM.9-ANT ≠'hit'-F NEG
 「雨は降ってしまっていないだろう」 Mvua itakuwa haijanyesha.

11. 動詞派生形

バントゥ諸語一般において広く認められる動詞派生概念である、受動 (11.1)、使役 (11.2)、相互 (11.3)、中動 (11.4)、適用 (11.5) は、一般に派生接尾辞 (DSuf) によって表現される。以下では、具体例を提示しつつ、主に形式面から整理する。

11.1 受動

受動形 (passive, PASS) とは、一般に「論理的な目的語が表層上 [=文法関係としての] 主語になり、論理上の主語が、消去されるか迂言的な句 [=側置詞句等] に降格する」形式である (Trask [1997: 163], Rose et al. [2002: 61] から引用)。バントゥ祖語 (PB) では、*-*u* (ないし異形態としての *-*ibu*)²⁵ という形式が再建されている (Schadeberg 2003: 72)。ロンボ語における対応形式は次のようである。

- (1) *ngálolywa*
ngi-á ≠ loli-w-a
SM1.sg-ANT ≠ 'see'-PASS-F
「私は見られた」 Nimeonwa.
- (2) *úishíłwa ~ úishíliwa*
ú ≠ ishí-l(i)w-a
SM.2sg-PROGR ≠ 'hear'-PASS-F
「あなたは聞かれている」 Unasikiwa.
- (3) *klaló* *keéliwa*
ki-laló *ki-é ≠ li-w-a*
CPx.7-'food' SM.7-FUT2 ≠ 'eat'-PASS-F
「ごはんは食べられるだろう」 Chakula kitaliwa.
- (4) *védukund⁴*
vé-du ≠ kund-⁴
SM.3pl-OM.1pl ≠ 'love'-STAT
「私たちは愛されている」 Tunapendwa.
cf. **du ≠ kund-w-a*
- (5) *múlekabwa*
mú-le ≠ kab-w-a
SM.2pl-PST1 ≠ 'hit'-w-F
「あなたたちは殴られた」 Mlipigwa.

²⁵ Meeussen (1967: 92) では、*-*ú* (母音の音価は同じ)。

- (6) *m'dí* *wáuliwa*
m'-dí *u-á ≠ u-líw-a*
 CPx.3-‘tree’ SM.3-ANT ≠ ‘fall’-PASS-F
 「木が（ある場所に）落とされた」 Mti umeangukiwa.

受動に対応する形態素としては、*-w* であるが、単母音語幹に後接する場合 *-liw* という異形態を認める。また (4) では、意味的には受動形で表現されうる内容が、その形式を避け、3pl の SM を非指示的 (non-referential) に用いた状態動詞の能動形で表現されている。

11.2 使役

意味役割上、使役者 (causer) に相当する名詞項を、文法上の主語として導入する使役形 (causative, CAUS) は、PBにおいては、**-i* ないし **-ici*²⁶ という形式が再建されている。PB段階では、**-i* は子音に後続し、**-ici* は母音に後続するという形で相補分布していたと考えられるが、現在の多くの言語では、**-ici* に対応する形式 (*-is*, *-ish*, 等) に収斂されている (Schadeberg 2003: 72)。ロンボ語における対応形式は次のようである。

- (7) *ngílem'lorá* *n'ko*
ngi-le-m' ≠ lor-a *n'-ko*
 SM1.sg-ANT ≠ ‘see’-PASS-F CPx.3-‘path’
 「私は彼女に道を教えた (lit. 見せた)」 Nilimwonesha njia.
- (8) *úim'lisha* *mwaná* *waké*
ú-i-m' ≠ li-ish-a *mw-aná* *u-ake*
 SM.2sg-PROGR-OM.3sg ≠ ‘eat’-CAUS-F CPx.1-‘child’ PPx.1-POSS.3sg
 「あなたは彼 (女) の子どもを食べさせるだろう」 Utamlisha mtoto wake.
- (9) *élang'amb'ŵra* *ukwelí*
é-le-ng' ≠ amb-ŵra *u-kwelí*
 SM.3sg-PST1-OM.1sg ≠ ‘say’-CAUS-F CPx.11-‘true’
 「彼 (女) は私に本当のことを言わせた」 Alinisemesha ukweli.
- (10) *dúilem'kabíra* *m'ndu* *ungí*
dú-le-m' ≠ kab-ír-a *m'-ndu* *u-ingí*
 SM.1sg-PST1-OM.3sg ≠ ‘hit’-CAUS-F CPx.1-‘entity’ PPx.1-‘other’
 「私たちは他の人に殴らせた」 Tulimpigisha mtu mwingine.

²⁶ Meeussen (1967: 92) では、**-í* (and **-íc?*) (母音の音価は同じ)。

- (11) *muúúířa* *m'di* *úl'á*
mu-í-u ≠ ú-ír-a *m'-di* *ú-l'á*
 SM.2pl-PROGR-OM.3 ≠ 'fall'-CAUS-F CPx.3-'tree' PPx.3-DEM.F
 「あなたたちはあの木を落とす（倒す）だろう」 Mtauangusha mti ule.
- (12) *valá* *vameéku* *vávaingířa* *vaná*
va-lá *va-meéku* *ve-á-va ≠ ingi-ír-a* *va-aná*
 PPx.2-DEM.F CP.2-'old person' SM.2-ANT-OM.2 ≠ 'enter'-CAUS'-F CPx.2-'child'
 「あの老人は子どもたちを入れ（させ）た」 Wale wazee wameingiza watoto.

形式的には、*-ír* ないし *-ish* という形態が確認できるが、おそらく後者はスワヒリ語からの形式借用であると推定され、その分布（どちらがどの語幹に接合するか）は、語彙的に決定されると考えられる（また (10) *kab-ír-a* は *kab-ish-a* という形式が確認されるなど、規則的な異形態とは考えづらい）。

また、使役の派生接尾辞は、自動詞語基にも他動詞語基にも接合可能であるが、自動詞語基に接合する場合は形態統語論上、いわゆる他動詞化接辞（transitivizer）として機能する (11), (12)。

(7) *≠lor* については、共時的には分節不可能な一形態素（他動詞語幹）に融合しているが、通時的には、おそらく次のようなプロセスを経て成立したものと解釈される；**≠lol(i)-ír* > [l の r への同化] > *≠lor-ír* > [i の脱落] > *≠lor-r* > [二重子音の単子音化（de-gemination）] > *≠lor*。さらに、共時的には *≠ror* という形式も（同義異形態として）確認されるが、これは r への同化が語幹頭子音にも及んだものと解釈される。

11.3 相互

複数の動作主が、お互いにある行為を行いあうという事態を表わすのが相互形（reciprocal, RECIP）である。つまり、意味役割的には動作主（agent）でもあり同時に被動者（patient）でもある複数の名詞句が、ともに文法的な主語（=SM は複数形）に位置づけられ、目的語はとらない構造になる（あるいは、いずれか一方が主語（=SM は単数形）になり、もう一方は前置詞句（*na* 名詞）という形で動詞の統語幹から外れる）。多くのバントゥ諸語で、PB **-an* を継承した形式が用いられるが、ロンボ語においても、*-an* という形態素が設定される。

- (13) *véitemíana* *pamója*
vé-i ≠ tem-í-an-a *pamója*
 SM.3pl-PROGR ≠ 'play'-APPL-RECIP-F 'together'
 「彼らは一緒に遊んでいる（lit. 遊びあっている）」 Wanachezana pamoja.

- (14) *dwáishuána* *habarí* *sedú*
du-á ≠ ishu-án-a \emptyset -*habarí* *si-edú*
 SM.1pl-ANT ≠ 'hear'-RECIP-F CPx.10-'news' PPx.10-POSS.1pl

「私たちはお互いの近況を聞きあった」 *Tumesikiana habari zetu.*

- (15) *vakáishwa* *taarífa* *yó,* *veékabána*
ve-á-ká ≠ ishu-a \emptyset -*taarífa* *yó* *ve-é ≠ kab-án-a*
 SM.3pl-ANT-COND ≠ 'hear'-F CPx.9-'information' DEM.M.9 SM.3pl-FUT2 ≠ 'hit'-RECIP-F

「彼らがその情報を聞いたら、彼らは殴り合うだろう」 *Wakisikia taarifa hiyo, watapigana.*

11.4 中動

動詞語基がとる名詞項を増やす、つまり他動詞化（あるいは二重他動詞化）の機能を果たす使役接辞とは反対に、動詞語基がとる名詞項を減らす自動詞化（*intransitivize*, 目的語を主語化し、本来の主語は消去される）の働きを担う形式に中動（*neuter*, NEUT）がある。名詞項を減らすという点では受動と共通する機能を持っているが、中動形が表わす文法的な意味は、意味役割としての対象（*theme/ object*）が主語になって「(対象が) ~されうる」といった、「受動+可能 (状態)」のような意味を表わす。PBにおいては、**ik*²⁷ という形式が再建されている（Schadeberg 2003: 72）。ロンボ語における対応形式は次のようである。

- (16) *élikana* *afya* *yaké* *ni* *ng'sha*
é ≠ loli-ik-an-a \emptyset -*afya* *i-aké* *ni* *ng'sha*
 SM.3sg ≠ 'see'-NEUT-RECIP-F CPx.9-'health' PPx.9-POSS.3sg COP APx.9-'good'

「彼（女）は健康（状態がよさ）そうに見える」 *Anaonekana afya yake ni nzuri.*

- (17) *sauti* *ya* *músikí* *ũshuíka*
 \emptyset -*sauti* *ya* \emptyset -*músikí* *ĩ ≠ ishu-ík-a*
 CPx.'sound' ASS.9 CPx.9-'music' SM.9 ≠ 'hear'-NEUT-F

「音楽の音が聞こえる」 *Sauti ya muziki inasikika.*

- (18) *samaki* *yí* *ílika*
 \emptyset -*samaki* *yí* *ĩ ≠ li-ik-a*
 CPx.9-'fish' DEM.N.9 SM.9 ≠ 'eat'-NEUT-F

「この魚は食べられる」 *Samaki huyu analika.*

- (19) *kalámu* *yí* *ũandik'ík-a*
 \emptyset -*kalámu* *yí* *ĩ-i ≠ andik-ík-a*
 CPx.9-'pen' DEM.N.9 SM.9-PROGR ≠ 'write'-NEUT-F

「このペンは書きやすい（書きうる）」 *Kalamu hii inaandikika.*

²⁷ Meeussen (1967: 92) では、**ik*（母音の音価は同じ）。

- (20) *kitabu* *kí* *kí̃somika*
ki-tabu *kí* *kí̃≠som-ik-a*
 CPx.7-‘book’ DEM.N.7 SM.7 ≠ ‘read’-NEUT-F

「この本は読める（読みやすい）」 *Kitabu hiki kinasomeka.*

例えばスワヒリ語においては、この形式は語基の(先行)母音の舌位によって母音調和 (vowel harmony)²⁸ を起こすが、ロンボ語では原則として母音調和現象は認められず、安定して *-ik* という形式で現れる；(20) ≠ *som-ik-a*, cf. Swahili. ≠ *som-ek-a*. またこのことは、形式に母音 *i* を含む使役、適用の接尾辞についても同様である。

11.5 適用

使役と同様、名詞項を増やす機能をもつ形式に適用形 (applicative, APPL) がある。使役の場合は、導入される名詞項は形式上主語に位置付けられるが、適用形は、動詞語基の直接目的語 (これを以下、base object, BO と言及する) 以外の名詞項を目的語項として導入する形式であり、自動詞語基にも他動詞語基にも接合可能である。以下では、適用形にすることで導入される目的語 (これを適用項 applied object, AO と呼ぶ) の意味役割に応じて、受益 (beneficiary, 11.5.1), 場所 (location, 11.5.2), 道具 (instrument, 11.5.3) について具体例を示していく。

適用形接辞は、PBにおいては、**-il*²⁹ という形式が再建されている (Schadeberg 2003: 72)。ロンボ語における対応形式は、以下に見るように形態素としては *i-* を設定できるが、F *-a* が直後に後接する場合は、*-i-a* 連続が /*ya*/ として実現する (cf. 1.3)。もっとも適用形の場合は、名詞項が後続する環境であれば、単音節化しない発音も認められるが、(規則的に単音節化する) 文末位置での発音と中和している発音もある (以下の例は調査時の実現形をそのまま示している)。

11.5.1 受益

適用項が受益の意味役割を担う場合の具体例は次のようである。

- (21) a. OM = AO, NP: AO-BO
- | | | | |
|--------------|------------------------------------|---------------|----------------|
| <i>ksali</i> | <i>élem'korya</i> | <i>mwaná</i> | <i>klálo</i> |
| <i>ksali</i> | <i>é-le-m'≠kor-i-a</i> | <i>mw-aná</i> | <i>ki-lálo</i> |
| Kisali | SM.3sg-PST1-OM.3sg ≠ ‘cook’-APPL-F | CPx.1-‘child’ | CPx.7-‘food’ |
- 「クサリは、子どものために (子どもの代わりに etc.) 料理を作った」
Kisali alimpikia mtoto chakula.

²⁸ スワヒリ語であれば、次のような規則になる；*ik* → *ek*/ V [+mid] (=e, o)。この規則は、使役 (*-ish*, *-is*)、適用 (*-i*, *-li*) の接辞にも同様に適用される。

²⁹ Meeussen (1967: 92) では、**-id* (母音の音価は同じ)。

- b. OM = AO, NP: BO-AO
ksali élem'korya klaló mwána
- c. OM = BO, NP: AO-BO
ksali élekkorya mwaná klálo
ksali é-le-ki ≠ kor-i-a mw-aná ki-lálo
 Kisali SM.3sg-PST1-OM.7 ≠ 'cook'-APPL-F CPx.1-'child' CPx.7-'food'
- d. OM = BO, NP: BO-AO
ksali élekkorya klaló mwána
- e. OM = AO-BO
ksali é-le-m'-ki ≠ kor-i-a
- f. OM = BO-AO
ksali é-le-ki-m' ≠ kor-i-a

(21a—d) で確認されるように、他のチャガ諸語同様ロンボ語の場合も、AO のみならず BO も OM によってマークされうる。一方で、AO のみが OM による一致を受けることができ、BO と一致させると非文になるという言語も少なくない。例えばスワヒリ語では、(21c) に対応する構造は明らかな非文である；
 * *Kisali alikipikia mtoto chakula*. このとき、ある名詞項が「OM と一致することが許可される」というのは、形態統語論的に当該名詞項が動詞の目的語として認可された（ライセンスを受けた）ということの意味する。つまり、通バントゥ語的に適用形を眺めると、AO のみが適用形の目的語としての地位を得るタイプの言語（スワヒリ語）と、AO, BO 双方にその資格が与えられる言語（チャガ諸語一般）という類型的区分があることが分かる。一般に、前者を目的語非対称型言語（object asymmetric language）と呼び、後者を目的語対称型言語（object symmetric language）と呼ぶ。

(21) に示した受益の AO を導入する形式では、AO, BO 双方を、i) OM として動詞構造に表示させること (21a—d), ii) どちらの名詞項も動詞直後位置に置くこと (21a—d), iii) 双方を並列的に（かつ順不同で）OM として表示すること (21e, f), のいずれもが可能であることが確認される。ただし 6.3.3 で述べたように、OM で一致を受ける場合、名詞項自体が（少なくとも動詞よりも後の位置で）現れることが回避されるのが原則である。しかしながら、以上の例からは、構造的には双方の目的語が現れ、かつ、どちらも名詞直後位置に置きうるということが確認される。以下では、以上の環境に準じた形で、場所項、および道具項を導入する適用形構文のデータを示す。これによって、同じ言語体系内でも、AO の意味役割によって、統語的なふるまいが変容しうることを示す。

11.5.2 場所

適用項が場所の意味役割を担う場合の具体例は次のようである。

- (22) a. OM = AO, NP: AO-BO
ksali élekfúlya m'toni samáki
ksali é-le-ku ≠ ful-i-a m'-tó-ini Ø-samáki
 Kisali SM.3sg-PST1-OM.17 ≠ 'fish (v.t.)'-APPL-F CPx.3-'river'-LOC CPx.9-'fish'
 「クサリは、川で魚を釣った」 Kisali alivua samaki mtoni.
- b. OM = AO, NP: BO-AO
ksali élekfúlya samáki m'tóni
- c. OM = BO, NP: AO-BO
ksali éleifúlya m'toni samáki
ksali é-le-i ≠ ful-i-a m'-tó-ini Ø-samáki
 Kisali SM.3sg-PST1-OM.9 ≠ 'fish (v.t.)'-APPL-F CPx.3-'river'-LOC CPx.9-'fish'
- d. OM = BO, NP: BO-AO
ksali éleifúlya samáki m'tóni
- e. OM = AO-BO
ksali é-le-ku-i ≠ fúlya
- f. OM = BO-AO
ksali é-le-i-ku ≠ fúlya

これらは、いずれも許容される例であるが、OM が指示する名詞項自体が文構成要素として出現する構造が許容されない例もある：**ngílek'ú'andikya bárua meséni*（下線部 *ku-* は *meseni* 「机（の上）で」を指示する OM.17）→ *ngílek'ú'andikya bárua* 「私はそこで（机の上で）手紙を書いた」。また、OM が 2 つ現れる (22e, f) では、同様の理由で目的語名詞との共起が回避されるが、目的語名詞が中称指示詞を伴う場合は、それが許容されることがある：?? *dúlekuirúndia kási*（下線部 *i-* は *kasi* 「仕事」を指示する OM.9）→ *dúlekuirúndia kási yo* 「私たちはそこで（e.g. 町で）その仕事をした（*yo* は DEM.M.9）」。

また、場所項の場合、名詞句の語順が AO-BO であると容認度が下がる場合がある：?? *dúlerundia m'jini kási* → *dúlerundia kási m'jini* 「私たちは町で（*m'jini* = AO）仕事（*kasi* = BO）をした」。これは、場所項名詞は、事実上副詞句的な解釈を受け、目的語名詞項が位置する（ことが期待される）動詞直以後位置（あるいはその後ろに目的語名詞項が続くこと）を嫌うということと関係があるかもしれない。

11.5.3 道具

適用項が道具の意味役割を担う場合の具体例は次のようである。

- (23) a. OM = AO, NP: AO-BO
 ?? *ksali élekaandikya kákálámú barúa*
ksali é-le-ka ≠ andik-i-a ká-Ø-kálámú Ø-barúa
 Kisali SM.3sg-PST1-OM.12 ≠ 'write'-APPL-F CPx.12-CPx.9-'pen' CPx.9-'letter'
 「クサリは、小さなペンで手紙を書いた」

Kisali aliandika barua kwa kutumia kalamu ndogo (= kakalamu).

cf.-1 OM = AO, NP: BO

ksali élekaandikya bárúa

cf.-2 OM = Ø, NP: AO-BO

ksali éleandikya kákálámú barúa

b. OM = AO, NP: BO-AO

?? *ksali élekaandikya bárúá kakálamu*

cf. OM = Ø, NP: BO-AO

ksali éleandikya bárúá kakálamu

c. OM = BO, NP: AO-BO

?? *ksali éleiandikya kákálámú barúa*

ksali é-le-i ≠ andik-i-a ká-Ø-kálámú Ø-barúa

Kisali SM.3sg-PST1-OM.9 ≠ 'write'-APPL-F CPx.12-CPx.9-'pen' CPx.9-'letter'

cf. OM = BO, NP: AO

ksali éleiandikya kakálamu

d. OM = BO, NP: BO-AO

?? *ksali éleiandikya bárúá kakálamu*

e. OM = BO-AO

ksali é-le-i-ka ≠ andik-i-a

f. OM = AO-BO

ksali é-le-ka-i ≠ andik-i-a

ここでも、文成分として現れる目的語名詞項と同一指示の OM の出現は許容度が下がる。ただし、OM が名詞項自体のいずれかを消去すれば問題なく容認される (23a—d)。

また、場所項同様、名詞項の語順 AO-BO が回避されるという例が、道具項でも一部確認される：
**éledumbulya kshú nyama* → *éledumbulya nyámá kshu* 「彼(女)はナイフ (*kshu* = AO) で肉 (*nyama* = BO) を切った」。AO-BO という語順は、目的語非対称型の言語においてむしろ許容される配列であることを考えれば奇妙に見えるが、対称性のタイプに関わらず、AO として道具項を取ることに制約のある言語はたしかに認められるから、そのことと関係がるかもしれない³⁰。

このように、適用形の場合、対称型 vs. 非対称型という「言語間」の類型があり、同一言語体系内で複数のタイプを併せ持つということは一般的には考えづらいが、名詞項の意味役割にしたがって、対称型に近い特徴を示した非対称型に近い特徴を示したりという、ユレが認められることがある、

³⁰ たとえば、非対称型ではスワヒリ語、対称型では同じチャガ系のルッ語 (E61) がそのような言語である。また、ルッ語の場合は、(そのかわり) 使役形で道具項名詞を含めた三項動詞を構成することができる。

12. 従属節

最後に、いくつかの従属節 (subordinate clause) に関する構造的特性について概観する。扱うのは、主節で表示される命題 (proposition) の前提条件 (presupposition) に相当する仮定 (conditional) を表わす節 (12.1), 名詞修飾節としての関係節 (12.2), そして時間及び空間的概念を表現する節 (12.3) である。

12.1 仮定節

「～ならば」という仮定に相当する節には、未来に生じる事柄に関する未確定の内容を示す条件節 (indicative conditionals) と、すでに起っている事実と反する仮定に相当する反実条件節 (counter-factual conditionals) とがある。

12.1.2 条件

条件節であることを示すマーカーは、TAM₂ *ka-* であり、これは継起のそれと (少なくとも) 分節素レベルで同形である。一方、否定の条件 (「～しなければ」) は、NEG2 スロットに充填される *te-* という形式で表示される。以下に具体例を示す。

- (1) AFF: *ngí-ka ≠koli-a /ngíkakolya/* *Ø-faídá*
 SM.1sg-COND≠'get'-F CPx.9-'benefit'
 「私が利益を得たら」 Nikipata faida,
ngi-é-va ≠ol-i-a /ngeévaolya/ *va-aná /vaná/* *fi-tabu* *fi-íngi /fíngi/*
 SM.1sg-FUT2-OM.2≠'buy'-APPL-F CPx.2-'child' CPx.8-'book' APx.8-'many'
 「子どもたちにたくさん本を買ってあげるだろう」 Nitawanunulia watoto vitabu vingi.
- NEG: *ngi-te ≠koli-a /ngitekolya/* *Ø-faídá*
 SM.1sg-NEG2≠'get'-F CPx.9-'benefit'
 「私が利益を得られなかったら」 Nisipopata faida,
ngi-^(e)- ≠dim-a *i-va ≠ol-i-a /nge^(e)dimeevaolya/* *hatá* *Ø-pipí* *ku*
 SM.1sg-FUT2≠'be able'-F INF-OM.2≠'buy'-APPL-F 'even' APx.9-'candy' NEG
 「彼らに飴を買うことすらできないだろう」 Sitaweza kuwanunulia hata pipi.
- (2) AFF: *u-ká ≠dish-á*
 SM.2sg-COND≠'run'-F
 「あなたが走ったら (逃げたら)」 Ukikimbia,
i-kité *lí-e-ku ≠dish-ír-i-a /l(e)ékdishíra/*
 CPx.5-'dog' SM.5-FUT2-OM.2sg≠'run'-CAUS-APPL-F
 「犬はあなたを追いかけます」 Mbwa atakukimbilia.

NEG: *u-te ≠dish-á*
 SM.2sg-NEG2≠'run'-F
 「あなたが走らなければ (逃げなければ)」 Usipokimbia,
i-kité *li-e-ku ≠dish-ír-í-á /l(e)ékdishíría/* *ku*
 CPx.5-'dog' SM.5-FUT2-OM.2sg≠'run'-CAUS-APPL-F NEG
 「犬はあなたを追いかけません」 Mbwa hatakukimbilia.

それぞれの構造は次のようにまとめられる.

《条件形 (cf. 継起形)》						
SM-	NEG2-	ka-	(OM-)	≠ stem	-	a
《条件形 (否定)》						
SM-	te-	∅-	(OM-)	≠ stem	-	a

また、「もし」という意味を明示したい場合は, *kolia* 「もし」という要素を前置させることができる.

12.1.2 反実

反事実的な仮定を表現する節であることを示す形式は, TAM *ve-* であり, これは状態過去のそれと (少なくとも) 分節素レベルで同形である. このとき, 条件節だけでなく主節の方も *ve-* によってマークされる. また否定形は, *ve-* と, それに先行する NEG2 *te-* によって表示される.

- (3) AFF: *du-ve ≠i* *vá-kúltmá*
 SM.1pl-PST.STAT≠EXT1 CPx.2-'farmer'
 「もし私たちが農民だったとしたら」 Tungekuwa wakulima,
dú-ve-(y)a ≠koli-á /dúve(y)akolyá/ *ma-shamba* *ma-dúve*
 SM.1pl-PST.STAT-OM.6≠'get'-F CPx.6-'field' APx.6-'big'
 「大きな畑を手に入れていただろうな」 tungepata mashamba makubwa.
- NEG: *du-te-ve ≠i* *vá-kúltmá*
 SM.1pl-NEG2-PST.STAT≠EXT1 CPx.2-'farmer'
 「もし私たちが農民ではなかったとしたら」 Tusingekuwa wakulima,
dú-te-vé ≠dim-a *i ≠ishí* *ku-ní* *ku*
 SM.1pl-NEG.COND-PST.STAT≠'be able'-F INF-'live' DEM.N.17-LOC NEG
 「ここで生きていくことはできなかつただろう」 Tusingeweza kuishi huku.

- (4) AFF: *i-ve ≠ kab-á* \emptyset -*m'fúá*
 SM.9-PST.STAT ≠ 'hit'-F CPx.9-'rain'
 「もし雨が降っていたとしたら」 *Ingenyeshá mvua,*
dú-v'è-u ≠ du-a / dúv'è'udwa/ *m'-líma* *ku*
 SM.1pl-PST.STAT-OM.3 ≠ 'climb'-F CP.3-'mountain' NEG
 「私たちは山に登らないだろう」 *tusingepanda mlima.*
- NEG: *i-te-ve ≠ kab-a* \emptyset -*m'fúá*
 SM.9-NEG2-PST.STAT ≠ 'hit'-F CPx.9-'rain'
 「もし雨が降っていなかったとしたら」 *Isingenyeshá mvua,*
dú-ve-u ≠ du-a / dúveudwa/ *m'-líma*
 SM.1pl-PST.STAT-OM.3 ≠ 'climb'-F CP.3-'mountain'
 「私たちは山に登るだろう」 *tungepanda mlima.*

《反実形》

SM-	NEG2-	ve-	(OM-)	≠ stem	-a
《反実形（否定）》					
SM-	te-	ve-	(OM-)	≠ stem	-a

12.2 関係節

関係節には、大別して 2 種類の構造が認められる。一方は関係節標識 *amba-*（スワヒリ語のそれと同形式）を用いる構造で、もう一方は、声調パターンを NTP にすることのみによって関係節であることを示す構造である。後者に関しては（声調自体が曖昧化していることを反映してか）、先行詞のクラスに対応した遠称指示詞が付随することも多い（ただし構造的に義務的ではない、cf. 12.3 (11)）。前者の構造に関しては、*amba-* に先行詞と一致する要素が後接するが、それは原則として中称の指示詞である。ただし、cl.1 のみ *-ye* という（おそらくは）スワヒリ語からの借用形式が用いられる。それぞれの否定形は、NEG2 *te-* によってマークされる。

- (5) *dúlem'lolía* *m'sangi* *úl'á*
 dú-le-m' ≠ lolí-a *m'-sangi* *ú-l'á*
 SM.1pl-PST1-OM.3sg ≠ 'see'-F CPx.1-'youth' PPx.1-DEM.F
- + *amba:* *ambayé* *ěledusaidya* *ísho*
 amba-yé *ě-le-du ≠ saidí-a* *ísho*
 REL-1 SM.1-PST1-OM.1pl ≠ 'help'-F 'day before yesterday'

- amba: *eledusaidya* *ísho*
e-le-du ≠ *saidi-a* *ísho*
SM.1-PST1-OM.1pl ≠ 'help'-F 'day before yesterday'
「一昨日私たちを助けてくれたあの若者に、私たちは会った」
Tulimwona kijana yule ambaye alitusaidia juzi.
- (6) *ngílekolya* *ktabú*
ngí-le ≠ *koli-a* *ki-tabu*
SM.1sg-PST1 ≠ 'get'-F CPx.7-'book'
- + amba: *ambakyó* *éleng'ólya*
amba-kyó *é-le-ng'* ≠ *ól-i-a*
REL-7 SM.3sg-PST1-OM.1sg ≠ 'buy'-APPL-F
- amba: *eleng'ólya*
é-le-ng' ≠ *ól-i-a*
SM.3sg-PST1-OM.1sg ≠ 'buy'-APPL-F
「彼が私に買ってくれた本を手に入れた」 Nilipata kitabu ambacho alininunulia.
- (7) *dúlem'lolía* *m'sangi* *úl'á*
dú-le-m' ≠ *loli-a* *m'sangi* *ú-l'á*
SM.1pl-PST1-OM.3sg ≠ 'see'-F CPx.1-'youth' PPx.1-DEM.F
- + amba: *ambayé* *ételedusáídyá* *ísho*
amba-yé *é-te-le-du* ≠ *saidi-a* *ísho*
REL-1 SM.1-NEG2-PST1-OM.1pl ≠ 'help'-F 'day before yesterday'
- amba: *eteledusáídyá* *ísho*
e-te-le-du ≠ *sáídi-a* *ísho*
SM.1-NEG.2-PST1-OM.1pl ≠ 'help'-F 'day before yesterday'
「一昨日私たちを助けてくれなかったあの若者に、私たちは会った」
Tulimwona kijana yule ambaye hakutusaidia juzi.
- (8) *ngílekolya* *ktabú*
ngí-le ≠ *koli-a* *ki-tabu*
SM.1sg-PST1 ≠ 'get'-F CPx.7-'book'
- + amba: *ambakyó* *ételeléng'ólya*
amba-kyó *é-te-lé-ng'* ≠ *ól-i-a*
REL-7 SM.3sg-NEG.2-PST1-OM.1sg ≠ 'buy'-APPL-F
- amba: *eteleléng'ólya*
é-te-le-ng' ≠ *ól-i-a*
SM.3sg-NEG.2-PST1-OM.1sg ≠ 'buy'-APPL-F
「彼が私に買ってくれなかった本を手に入れた」 Nilipata kitabu ambacho hakuninunulia.

以上の構造を一般化すれば，次のように記述される．

《 amba- 関係節 》			
[CPx _{Chi} -stem] _N	##	[amba-DEM.M _{CLi}] _{Rel}	## [SM-TAM-OM ≠ stem] _V
《 amba- 関係節（否定形） 》			
[CPx _{Chi} -stem] _N	##	[amba-DEM.M _{CLi}] _{Rel}	## [SM-te-TAM-OM ≠ stem] _V
《 声調表示関係節 》			
[CPx _{Chi} -stem] _N	##		[SM̂-TAM-OM ≠ stem] _V (NTP)
《 声調表示関係節（否定形） 》			
[CPx _{Chi} -stem] _N	##		[SM̂-te-TAM-OM ≠ stem] _V (NTP)

12.3 時間・空間を表現する従属節

まず、「～したとき／するとき（に）」といった，時間概念を表示する従属節は，過去形に関しては，「とき」を表わす名詞 *wakati* を接続詞的に従属節の前に前置するという．非過去形については，時間節であることを示す不変化詞 *li-* が節頭に配される．コンサルタントの説明によれば，この要素は過去形とは共起しないということであるが，Appendix に示した民話テキストを参照すると，過去形と共起する例は多く認められ，*li-* の共起制限（もしあるとしたら）には，時制以外の要因が関与していることが推測される．

- (9) *wakati* *duléshika* *k'á'á*
u-akati *du-lé ≠ shik-a* \emptyset -*k'á'á*
 Cpx.11-‘time’ SM.1pl-PST1 ≠ ‘arrive’-F Cpx.9-‘home’
mwaná *wedú* *ěvemél'á'á*
mw-aná *u-edú* *ě-ve-mé ≠ l'á'á*
 CP.1-‘child’ PPx.1-POSS.1pl SM.1-PST.STAT-COMP ≠ ‘sleep’-F
 「私たちが家に着いたときには，我々の子どもは寝てしまっていた」
 Tulipofika nyumbani, mtoto wetu alikuwa amelala.
 cf. **lí duléshika k'á'á*

- (10) *lí* *duéshika* *k'á'á*
lí *du-é ≠ shik-a* \emptyset -*k'á'á*
'when' SM.1pl-FUT2 ≠ 'arrive'-F CPx.9-'home'
mwaná *wedú* *neéam'ka*
mw-aná *u-edú* *n-e-é ≠ am'k-a*
CP.1-'child' PPx.1-POSS.1pl ASSERT-SM.1-FUT2 ≠ 'wake up'-F
「私たちが家に着くころには、我々の子どもは目を覚ますだろう」
Tutakapofika nyumbani, mtoto wetu ataamka.

最後に、「~した場所 (ところ)」という場所概念に関する従属節は、場所名詞を先行詞にとった関係節が
用いられる。 *amba-* 関係節における一致クラスは、基本的に *cl.17* が用いられるようである。

- (11) *véenda* *dukáni*
 ve ≠ end-a \emptyset -*duka-ini*
 SM.3pl ≠ 'go'-F CPx.5-'shop'-LOC
- a. + *amba*: *ambakó* *díleólya* *simu* *ya* *máoko*
 amba-kó *dí-le ≠ ol-i-a* \emptyset -*simu* *ya* *ma-óko*
 REL-17 SM.1pl-PST1 ≠ 'buy'-F CPx.9-'phone' ASS-9 CPx.6-'hand'
 「彼らは、私たちが携帯電話を買った店に行く」
 Wanakwenda dukani ambapo tulinunua simu ya mkononi.
- b. DEM.F: *kúla* *duleolya* *simu* *ya* *máoko*
 kú-la *du-le ≠ ol-i-a* \emptyset -*simu* *ya* *ma-óko*
 PPx.17-DEM.F SM.1pl-PST1 ≠ 'buy'-F CPx.9-'phone' ASS-9 CPx.6-'hand'
- c. – *amba*: *duleolya* *simu* *ya* *máoko*
 du-le ≠ ol-i-a \emptyset -*simu* *ya* *ma-óko*
 SM.1pl-PST1 ≠ 'buy'-F CPx.9-'phone' ASS-9 CPx.6-'hand'

Appendix

Appendix-1: 民話

以下に，チャガ＝ロンボ語の民話テキストの例を挙げる．表記は，「1. 文字と発音」の項に示した原則と異なる部分があるので注意されたい．とくに，動詞語末の *ya*, *wa* は，形態論的な構造にしたがって，*ia*, *ua* のように「開いて」記述している．同様に，語境界で母音融合や半母音化が生じる部分も，形態論的な構造にしたがって分ち書きしてある．また，文中の表現には，スワヒリ語からの干渉が疑われる箇所が散見されるが，それらもそのまま残してある．

Ifuve na ikite

Ifuve na ikite vevei maṛafiki vaduve sana. Findo fya ifuve fivei fya ikite na fya ikite fivei fya ifuve. Siku imu maṛafiki va velelawa aṛusini. Ifuve likavia ikite kuwa handu ho velelawa eveere vandu vengi sana. Likaamba, duedima ikolia m'ndu wa dualika kolia dueva dwakupamba usha kabisa.

Ifuve likaamba, lasima dudumbue m'dwe usha na dutinde nyusi, dudumbue shaa na ikufia kila mapambo mesha ya aina soose ili dushihie. Ikite likakubali ushauṛi wa ifuve. Vakaira wembe, fiove, sabuni, mahaṛashi, brashi, ṛangi sa dumbuni vakashikia meseni. Ikite likaansa ifia ifuve na idumbua m'dwe na itinda nyusi kwa kila aina ng'sha neveiishi. Elem'dumbua shaa sa maoko na mat'ende mbooha mbooha. Ifuve likakusakwa kioveni, likakolia lashihia sana likakunda sana.

Ifuve livei kinyosi m'sha sana. Liveishi iimba nyimbo ng'sha wakati wa ihusa mpaka welaa t'oo kabisa. Likaansa ihusa ikite lakini kuni liamba fo mooni kwake kolia ngem'tengnesa ashihie saidi yakwa. Ngeedima ngaua m'ndu wa ing'aalika. Akaansa iimba nyimbo ng'sha ambaso ikite likalaa. Akaansa ibadili kiamu kya ikite mpaka maoko na mat'ende yose yakabadilika. Li ikite lileamka lilekolia kiamu kyake kyabadilika na mat'ende yake na maoko yafuhia kabisa, navem'viishwa sana. Akalolia baiṛe akabane na ifuve, lakini ifuve likadisha likadua m'di shu. Ikite liledima ku kwani maoko na mat'ende yake yevedima ira se ku. Likabaki sumbai lim'sakua ifuve kwa hasiṛa.

Mpaka luni ikava ni chanso cha ikite na ifuve isuvana na kila umu etafta ungi amlipise ksasi.

【スワヒリ語意訳（解説）】

Mbwa na nyani

Nyani na Mbwa walikuwa ni marafiki wakubwa sana. Mali ya nyani ilikuwa ya mbwa na ya mbwa ilikuwa ya nyani. Siku moja marafiki hawa wawili waliokaribishwa harusini. Nyani akamwambia mwenziwe kuwa waliokaribishwa katika hafla kubwa ambapo kuna uwezekano wakapata posa kwa wale watakaofika katika harusi hiyo ila wanatakiwa wajipambe vizuri ili waweze kumvutia kila mmoja atakayewaona katika hafla hiyo

Nyani akashauri wakate nywele zao vizuri, wanyoe nyusi wakate kucha za miguu na mikono, wajipambe kwa rangi zote za midomo na uso na pia wajipulizie manukato mazuri. Mbwa alipendezwa sana na wazo la rafiki yake. Nyembe, brasi, vioo, rangi za midomo na kucha, sabuni na manukato mazuri yaliwekwa mezani. Mbwa alianza kumpamba nyani na kumkata kucha, nywele na nyusi zote vizuri sana alimchora sura yake kwa michoro mizuri na kumpaka rangi nzuri mdomoni na usoni. Nyani alipojitazama katika kio alifurahi sana kwani alikuwa amepeneza sana.

Sasa ilikuwa na zamu ya nyani kumpamba mbwa. Nyani alikuwa ni kinyozi mzuri aliyetumia nyimbo nzuri za kuliwaza kila aliyekuwa akimnyoa. Basi alianza kumnyoa mbwa lakini moyoni mwake alijisemea kuwa kama atapendeaza zaidi yangu mimi naweza kukosa posa. Kwa hivyo akamwambia nyimbo nzuri akalala akaamua kubadili kabisa sura na mwaonekano wake. Hadi miko na miguu yake akaibadili kwa kukata kucha zake katika staili ya kuzifanya zionekanae kama zilivyo sasa. Alipoamka akakuta sura yake imebadilika. Imekuwa mbaya sana na mikono na miguu yake nayo hakuipenda tena. Akakasrika sana akaamua kupiga nyani lakini nyani akakimbia na kupanada juu ya mti na mbwa kabaki chini akimtazama kwani hakuweza tena kupanda kwani mikono na miguu yake ilikuwa imeharibiwa. Akamtazama kwa hasira akimsubiri ashuke ili amwadhibu. Tangu siku hiyo urafiki wao ukaisha na hadi sasa kila mmoja anamtafuta mwenzake amwadhibu kwa kumfanya aonekana kama alivyo.

【日本語抄訳】

犬とヒヒ

ヒヒと犬はとても仲の良い友達同士でした。ヒヒのものは犬のもの、犬のものはヒヒのもの。ある日、二人は結婚式に呼ばれました。ヒヒは犬に言いました。「ここにはたくさんの方が呼ばれているね。おしゃれに飾っていったら、結婚相手を見つけられるかも」

犬が言いました。「髪の毛をきれいに切らないと。まゆ毛を剃って、爪を切って、ありとあらゆる装飾品をつけよう。美しくなるために」。犬はヒヒの助言に賛成しました。二人は、かみそり、鏡、石鹸、香水、ブラシ、それから口紅を机の上に置きました。犬は、ヒヒに飾りをつけて、髪を切り、眉毛を剃ってあげました。知りうる限りに美しく。さらに指の爪と足の爪を、ゆっくりゆっくり切ってあげました。ヒヒは鏡の中の自分を見ると、とても美しく見え、とても気に入りました。

(さあ次はヒヒが犬を飾り付ける番です。) ヒヒはとても上手な美容師でした。ヒヒは、毛を剃っている間でもあなたがすっかり寝てしまうようなすてきな歌を知っていました。ヒヒは犬の毛を剃り始めました。だけど、そのときヒヒは自分の心の中で言いました。もし、犬が自分よりきれいになってしまったらどうしよう。私と結婚してくれる人を、捕まえそびれてしまうかも。ヒヒは、聞いたら寝てしまう歌を歌い始めました。それから、犬の顔をすっかり変えてしまいました。それどころか手と足まで。犬が目を開くと、自分の顔が変わっていることに気付きました。そして、足と手も短くされていることに気付きました。犬はとても怒りました。それから、ヒヒに殴りかかろうと思いましたが、ヒヒはもう走って木に登っていました。犬は木に登ることができませんでした。なぜなら、手も足も短くされているからです。犬は、木の下で怒ってヒヒを見上げるだけでした。

これが、今に至るまでのお互いが憎み合う(そして、それぞれが今のような格好になってしまった)理由なのです。

《語彙》

<i>arusini</i>	「結婚式」	<i>maharashi</i>	「香水」
≠ <i>alika</i>	「結婚する」	<i>kinyosi</i>	「美容師」
<i>kwani</i>	「なぜなら」	≠ <i>laa t'oo</i>	「ぐっすり眠る」
≠ <i>tinda</i> , ≠ <i>usa</i>	「剃る」	≠ <i>ua</i>	「失敗する (<落ちる)>」
≠ <i>fia</i>	「飾る (装飾品をつける)」	<i>baire</i>	「~した方がよい」
<i>pambo</i>	「装飾品」	<i>se</i>	「もう一度」
≠ <i>shihia</i>	「愛らしい, 美しい」	<i>chanso</i>	「起源」
≠ <i>kubali</i>	「同意する」	≠ <i>lipisa ksasi</i>	「復讐する」
<i>ushauri</i>	「助言」		

Appendix-2: 挨拶および自己紹介の表現

I. 挨拶

a) お元気ですか? / Habari yako?

→ 元気です / Nzuri.

b) ~の調子(様子)はいかがですか? / Habari ya~

朝 / asubuhi?

昼 / mchana?

晩 / jioni?

仕事 / kazi?

家庭 / nyumbani (kwako)?

学校 / shule?

子どもたち / watoto?

c) ありがとう / Asante.

→ どういたしまして / Karibu.:

d) すみません / Samahani.

e) お気の毒に~おつかれさま / Pole.

f) ~おつかれさま / Pole na~

旅(移動) / safari

仕事 / shughuli

g) さようなら / Kwaheri ('Naondoka kwako')

さようなら(聞き手複数) / Kwaherini

h) また会いましょう / Tutaonana.

i) うまく行っていますか? / Umeshinda je?

→ はい, うまく行っています / Ndiyo, nimeshinda vizuri

i') うまく行っていますか? (聞き手複数) / Mmeshinda je?

→ はい, うまく行っています / Tumeshinda vizuri

j) お目覚めはいかが? / Umeamka je?

→ いい目覚めです / Nimeamka vizuri

habarí yafó?

ná ng'sha.

habarí ya ~.

habarí ya shúru.

habarí ya kwáya.

shámeshá?

habarí ya kashíni.

habarí ya kási.

habarí ya k'á'á.

habarí ya káá kwafó.

habarí ya shúle.

habarí ya vána.

kaá kasha.

kaa kásha.

karíbu.

ng'samehé.

ngáakosya.

mboóha.

mboóha ná ~

mboóha ná safári.

mboóha ná kási.

náá kwafó.

náá kwafóni.

duísheloliana.

wásinda?

wásinda ája?

iye, ngásinda úsha.

mwásinda?

mwásinda ája?

iye, dwásinda úsha.

waám'ka?

ngaám'ka úsha.

j) お目覚めはいかが? (聞き手複数) / Mmeamka je?
→ いい目覚めです / Tumeamka vizuri

mwaám'ka?
duám'ka úsha.

II. 自己紹介

a-1) 私は～です / Mimi ni ...

níanyí ni ...

a-2) あなたは誰ですか? / Wewe ni nani?

váavé ni tívi?

b-1) 私の名前は～です / Jina langu ni ...

r^ʔná lakwá ni ...

b-2) あなたの名前は何かですか? / Jina lako nani?:

r^ʔná lafó ni língalí?

c-1) 私は～と申します / Mimi ninaitwa ...

níanyí ngeláwa...

c-2) あなたは何とおっしゃるのですか? /
Wewe unaitwa nani?

váavé weláwa aja?

d-1) 私は日本人です / Mimi ni Mjapani

níanyí ni m'japani.

d-2) あなたはタンザニア人です / Wewe ni Mtanzania

váavé ni m'tansanía

e-1) 私は～から来ました / Ninatoka ...

ngífuma...

e-2) あなたはどちらから来たのですか? / Unatoka wapi?

kú úfumá are?

f-1) 私は教師です / Mimi ni mwalimu.

níanyí ni mwálim.

スワヒリ語を教えています / Ninafundisha Kiswahili.

ngífundisha kswahíli.

f-2) 私は学生です / Mimi ni mwanafunzi.

níanyí ni mwanafúnsi.

勉強しています / Ninasoma

ngísoma

g-1) 私は 30 歳です / Nina miaka 30.

ngíre mwaká slasíni.

g-2) あなたはおいくつですか? / Una miaka mingapi?

úre mwaka ínga?

h) ありがとう / Asante

kaa kásha.

私の子ども (よ) / mtoto wangu

kaa kásha mwanákwa.

[大人の男性に] / bwana

kaa kásha mbe.

お母さん / mama

kaa kásha máe. ~ kaa kásha mányi.

お姉さん / dada

kaa kásha rí'shikí.

お兄さん / kaka

kaa kásha rí'soró.

[目上の人に] / [kwa anayeheshimiwa]

kaa kásha ávaé.

h') ありがとうございます / asanteni sana

kaa kásheni tíki.

Appendix-3: 文法形式のリスト

I. 名詞クラスごとの一致形態素

	CPx	ASS	PPx	SM	OM	Ind. Pro.	POSS.	Demonstratives			APx
								N.	M.	F.	
1sg				<i>ngi-</i>	<i>ng'-</i>	<i>níanyí</i>	<i>-akwa</i>				
2sg				<i>u-</i>	<i>ku-</i>	<i>váavé</i>	<i>-afo</i>				
3sg				<i>(n)e-</i>	<i>m'-</i>	<i>vé</i>	<i>-ake</i>				
1pl				<i>du-</i>	<i>dú-</i>	<i>sóosó</i>	<i>-edu</i>				
2pl				<i>mu-</i>	<i>mú-</i> <i>(ku- -eni)</i>	<i>níonyó</i>	<i>-enyu</i>				
3pl				<i>ve-</i>	<i>vé-</i>	<i>vó</i>	<i>-avo</i>				
cl.1	<i>m'-</i>	<i>wa</i>	<i>u-</i>	<i>(n)e-</i>	<i>m'-</i>			<i>shu</i>	<i>sho</i>	<i>ula</i>	<i>m'-</i>
cl.1a	\emptyset -	<i>wa</i>	<i>u-</i>	<i>(n)e-</i>	<i>m'-</i>			<i>shu</i>	<i>sho</i>	<i>ula</i>	<i>m'-</i>
cl.2	<i>va-</i>	<i>va</i>	<i>va-</i>	<i>ve-</i>	<i>va-</i>			<i>va</i>	<i>vo</i>	<i>vale</i>	<i>va-</i>
cl.2a	<i>vaa-</i>	<i>va</i>	<i>va-</i>	<i>ve-</i>	<i>va-</i>			<i>va</i>	<i>vo</i>	<i>vale</i>	<i>va-</i>
cl.3	<i>m'-</i>	<i>wa</i>	<i>u-</i>	<i>u-</i>	<i>u-</i>			<i>shu</i>	<i>sho</i>	<i>ula</i>	<i>m'-</i>
cl.4	<i>mi-</i>	<i>ya</i>	<i>i-</i>	<i>i-</i>	<i>i-</i>			<i>yi</i>	<i>yo</i>	<i>ila</i>	<i>mi-</i>
cl.5	<i>i-/∅-</i>	<i>la</i>	<i>li-</i>	<i>li-</i>	<i>li-</i>			<i>li</i>	<i>lo</i>	<i>lya</i>	<i>i-</i>
cl.6	<i>ma-</i>	<i>ya</i>	<i>ya</i>	<i>ya-</i>	<i>(y)a-</i>			<i>ya</i>	<i>yo</i>	<i>yala</i>	<i>ma-</i>
cl.7	<i>ki-</i>	<i>kya</i>	<i>ki-</i>	<i>ki-</i>	<i>ki-</i>			<i>ki</i>	<i>kyo</i>	<i>kila</i>	<i>ki-</i>
cl.8	<i>fí-</i>	<i>fya</i>	<i>fí-</i>	<i>fí-</i>	<i>fí-</i>			<i>fí</i>	<i>fyo</i>	<i>fila</i>	<i>fí-</i>
cl.9	<i>N, ∅-</i>	<i>ya</i>	<i>i-</i>	<i>i-</i>	<i>i-</i>			<i>yi</i>	<i>yo</i>	<i>ila</i>	<i>ng'-</i>
cl.10	<i>N, ∅-</i>	<i>sa</i>	<i>si-</i>	<i>si-</i>	<i>si-</i>			<i>si</i>	<i>so</i>	<i>sila</i>	<i>ng'-</i>
cl.11	<i>u-</i>	<i>wa</i>	<i>u-</i>	<i>u-</i>	<i>u-</i>			<i>wu</i>	<i>wo</i>	<i>ula</i>	<i>u-</i>
cl.12	<i>ka-</i>	<i>ka</i>	<i>ka-</i>	<i>ka-</i>	<i>ka-</i>			<i>ka</i>	<i>ko</i>	<i>kala</i>	<i>ka-</i>
cl.13	<i>du-</i>	<i>dwa</i>	<i>du-</i>	<i>du-</i>	<i>du-</i>			<i>du</i>	<i>do</i>	<i>dula</i>	<i>du-</i>
cl.16	<i>ha-</i>	<i>a</i>	<i>ha-</i>	<i>a-</i>	<i>a-</i>			<i>ha</i>	<i>ho</i>	<i>hala</i>	<i>a-</i>
cl.17	<i>ku-</i>	<i>kwa</i>	<i>ku-</i>	<i>ku-</i>	<i>ku-</i>			<i>ku</i>	<i>ko</i>	<i>kula</i>	<i>ku-</i>

II. TAM, 派生接尾辞, 末尾辞

II-a: TAM₀

ANT	HAB
<i>a-</i>	<i>e-</i>

II-b: TAM₁

PRS	CONT	PST1	FUT2
∅-	<i>i-</i>	<i>le-</i>	<i>e-</i>

II-c: TAM₂

PST.STAT	COMP	CONSEC	FUT1 > CERT	ITIVE
<i>ve-</i>	<i>me-</i>	<i>ka-</i>	<i>she-</i>	<i>nde-</i>

II-d: Derivational suffixes

CAUS	NEUT	APPL	RECIP	PASS
<i>-ir, -ish</i>	<i>-ik</i>	<i>-i</i>	<i>-an</i>	<i>-w</i>

II-e: Fs

IND	SUBJ	PST2	STAT
<i>-a</i>	<i>-e</i>	<i>-ie</i>	<i>-i</i>

参照文献

Chuwa, Albina Rogati. 2004.

Jifunze Kichaga cha Vunjo, *Journal of Swahili and African Studies Supplement No.2, Section of Swahili and African Studies*, Department of Area Studies, Osaka University of Foreign Studies

Dundas, Charles. 1924/1968.

Kilimanjaro and Its People: A History of the Wachagga, Their Laws, Customs and Legends, together with Some Account of the Highest Mountain in Africa, Frank Cass & Co. Ltd.

Guthrie, Malcolm. 1961-1971.

Comparative Bantu: an introduction to the comparative linguistics and prehistory of the Bantu languages. Vols. 1-4, Gregg Press

Machng'u, Robert S. 1993.

Kindo kya Kando: Kitabu kya wana kya Kichagga ku-imreriye wo Kichagga kya Vunjo, Chuo Kikuu, Sokoine (Sokoine University of Agriculture?)

Maho, Jouni Filip. 2009

NUGL Online: The online version of New Uppdated Guthrie List, a referencial classification of the Bantu languages

URL <http://goto.glocalnet.net/mahopapers/nuglonline.pdf>

Makule, Alice Oforo. 2004.

Asili ya Wachaga na Baadhi ya Koo Zao (Historia ya Makabila ya Mkoa wa Kilimanjaro, Kitabu cha Kwanza), Peramiho Printing Press

Meeussen, Achilles Emile 1967

Bantu Grammatical Reconstrucitions, In: *Africana Linguistica*, Vol. 3, pp. 80-122

Mradi wa Lugha za Tanzania. 2009.

Atlasi ya Lugha za Tanzania, Chuo Kikuu cha Tanzania

National Bureau of Statistics, Ministry of Finance, Tanzania. 2013

Tanzania in Figures 2012

URL http://www.tanzania-gov.de/images/downloads/tanzania_in_figures-NBS-2012.pdf

Nurse, Derek. 1981.

Chaga/Taita, In: Hinnebusch, Thomas H. (ed.) *Studies in the Classification of Eastern Bantu Languages*, pp. 127-161, Helmut Buske Verlag

————— 2003.

Tense and Aspect in Chaga, In: *Annual Publication in African Linguistics 1*, pp. 69-90

Nurse, Derek and Gérard Philippson. 1977.

Tones in Old Moshi (Chaga), *Studies in African Linguistics 8(1)*, pp. 49-80

Nurse, Derek and Gérard Philippson (eds.) 2009.

The Bantu Languages, Routledge

Philippson, Gérard. and Marie-Laure Montlahuc. 2003.

Kilimanjaro Bantu (E60 and E74), In: Nurse, D. and G. Philippson (eds.) pp. 475-500

Rose, Sarah, Christa Beaudoin-Lietz and Derek Nurse, 2002

A Glossary of Terms for Bantu Verbal Categories, Lincom Europa

Schadeberg, Thilo. 2003.

Derivation, In: Nurse and Philippson (eds.) *The Bantu Languages*, Routledge, pp. 71-89

辻村英之 2012

『おいしいコーヒーの経済論—「キリマンジャロ」の苦い現実（増補版）』, 太田出版

A grammatical sketch of Chaga-Rombo (Bantu E623)
ILCAA Intensive Language Course 2014: Chaga-Rombo, Textbook 1

チャガ＝ロンボ語(Bantu E623) 文法スケッチ
平成 26 年度言語研修 チャガ＝ロンボ語研修テキスト 1

平成 26 年 10 月 30 日 発行

著者 品川大輔

発行 東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
TEL. 042-330-5600

印刷 日本ルート印刷出版株式会社
〒135-0007 東京都江東区新大橋 1-5-4
TEL. 03-3631-3861

©Daisuke SHINAGAWA
ISBN 978-4-86337-170-5

ISBN 978-4-86337-170-5

